
WINDBLAST

波風蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WINDBLAST

【コード】

N0623M

【作者名】

波風蒼

【あらすじ】

間宮凜、15歳。過保護な兄達に構われるのも鬱陶しくなってきたお年頃。兄達の制止を振り切って、冒険家の父の遺志を継ぐため蒼刻の森へと踏み込んだ。今度こそ幻の遺跡を見つけ出す！……と息巻いていたのはいいけど、「ここどこ!?」なんてベタな台詞を吐きつつ健気に頑張ります！異世界（恋愛？）トリップファンタジー。

0話

私は、間違っていたのだろうか。^{わたくし}

今更こんなことを思案していても仕方のないことは分っている。

それでも自問自答せずにはいられない。

ただ一人の人を愛し、そして殺した。

ただ一人の人を信じ、そして見捨てた。

私は、愛と癒しの女神ではなかったか。

愛した人を守ること、まして唯一の友人を癒すことすらできなかった。

私は、決断した。

私が愛したファルスの地を救うことを。

最後のときでさえ、禁忌を犯そうとする私は、もはや神ではないかもしれない。

それでも、望みを捨て去ることはできないのだ。

それに、何故か安堵している自分がいるのも確かなのである。

そう、私は、何者にも囚われることのない、自由を司る女神なのだから。

「ファルスの地を創りし風の女神よ。そなたの神権を剥奪し、死をもって罪を購うことを神界議会で決定された旨をここにお知らせする」

「最後に言い残すことはあるか？」

「……では、一言だけ」

『ファルスの地に破滅が訪れし時、漆黒の者が現れる。彼の者こそ

が、己おのが世界を導く要となるろう』

「！！貴様何を！？クソツ風の女神の力か！？」

「何をやっている！？力の発動を止める！！」

「ならぬ！力の発動はもはや誰にも止められぬ！殺せ！！」

「殺せ！！早く殺すのだ！！」

力を神々に奪われ、牢に入れられ、ろくな待遇を受けなかったが、それでも細々と力を蓄えてきた。

そして、それをを使うべきは今だ。最後の一滴の力さえも残さず言の葉にこめた。

私の言葉は風に乗れ、どこまでも広がっていくだろう。それは、神々でさえ止めることはできない。

ああ、私はもう駄目であろう。

何故か、ざわめきが遠くに聞こえるのは死が近い証拠かもしれぬ。

ひやりと、私の首に刃物が当たる。

そして、両腕を捕らえられ身動きすることなく、私は意識を断った。

私の声が聞こえる稀有な者よ。

最後の私の望み、どうか聞き届けて。

1話

「だっ誰か！…ハアハアッ誰か！…助けて！」

ひたすら走る。走らなければ！そう本能が告げる。何故、何故と走る合間にも疑問を繰り返す。

何故、私が追われなければならない？何故、私はこんなところにいる？

そう、思うも答えるものは誰もいない。

草に足を切られ、木の根に躓きそうになりながらもひたすら走る。

転べば終わりだ。

足がもつれる。限界は近い。ここには、いつもピンチになれば必ず駆けつけてくれる兄はいない。

助けて、助けて！そう叫んでも誰の救いの手も差し伸べられない。

咄嗟に出た言葉が誰かを頼るものなんて、情けなさ過ぎる。

結局、私は一人では何もできないことを、窮地に立たされることではしか理解できないのだ。

目が涙でにじむ。ダメだ！！泣くな！ここは、まだ泣く場面じゃない。そう、思っても一度出た涙は引つ込まない。

まずい。前が曇って見えない。あ！と思った時にはもう、地面に手をつけていた。案の定躓いてしまったのだ。

ピリツとした痛みで顔をしかめる。手のひらを地面から引き剥がすと、泥でまみれた奥で血が滲んでいた。

ああ、終わりだ。

一度転んでしまえばもう立ち上がれない。足がガクガクと震えるのは疲労のためか、それとも恐怖のためか。

自分でも良く分らない。とにかく、もう走れないのは分った。後ろを振り向く。

絶望が胸を支配した。私は、死ぬのだ。反射的に目をつぶり、身体を強張らせた。

その瞬間、一陣の風が吹き抜けた　気がした。

「凜！あんまり奥に行くな！！」

「蒼兄、そう言えば言うほど奥に進むのが凜だつて分つてんだろ？」

「浩樹！お前も暢気なこと言つてないで凜を止める！！」

「……はあ。つたく、しよーがねーな。おい！凜！蒼兄が切れてんぞ！戻つて来い！」

とりあえず、表向き凜を止めようと試みる。無理なことと分つているが、この超がつくほどの妹LOVEな長男に逆らうのは無謀だ。

…多分、ヘッドロックをかけられるだけではすまないだろう。だが、予想通りというかなんというか、いやーだー！という凜の声が少し先のほうから届く。そろりと、隣にいる蒼兄を盗み見る。こちらも案の定、こめかみに一本の青筋が浮かんでいる。手間のかかる兄妹がいると大変だ。としみじみ思う。

今にも爆発しそうな兄から目をそらし、空を仰いだ。今日はどんよりとした曇り空だ。

何もこんな天気の日、こんな気味の悪いところに来ることはないだろうとどれだけ言つても、妹は譲らなかつた。どうしても見たい古代の遺跡があるのだそうだ。勉強熱心なのは喜ばしいことだが、この状況はかなり喜ばしくないことになっている。

周りは、見渡す限り木・木・木しかない。そう、ここは森。人畜無害な木があれば、有害なモノもいる。さっきもへビが出て、凜が撃退したばかりだ。なんて遅しく成長したものだ、と嬉しいやら悲しいやら複雑な心境だ。

俺たちの父親は名のある冒険家だった。どんな危険な場所でも臆せず、突っ込んでいった気性はまるごと凜に受け継がれたように思う。親父は、自分が旅をすることはあれど、家族を連れて行くなんてことは滅多に無かった。いつでも、自由気ままで自分勝手に行動していた。家族のことなんか省みず、結局最後は、どこかの森で遭難して呆気なく死んでしまった。ここは、そんな親父が何の気まぐれか、初めて俺たちを連れてきてくれた場所だった。俺が確か11歳のときだ。凜はまだ小さくて、震える手で蒼兄と俺の手をぎゅっと握り締めていた。あの頃はかわいかったなあ。今では、震えるそぶりなどミジンコほども見せず、むしろ嬉々として遺跡を探すのに夢中だ。

「……まったく親父の七回忌なんて来るんじゃないなかつたぜ」
ポツリと苦虫を噛み潰したような声にふと我に返る。

「来ちまつたもんは仕方ねーだろ？それに、凜だつて喜んでる」
「それが嫌なんだよ。どうせ、遺跡なんて見つかるわけない。落胆するのが落ちだ」

目の前にある草木を掻き分けながら、蒼兄は履き捨てるように呟く。こんな兄を見るのは珍しい。そういえば、先ほどの様子もおかしかった。

いつもは、冷静沈着な兄が自分の感情を隠しもしない。何か嫌な予感に襲われたが、頭を振って否定する。

ここは、親父の故郷で、俺たちは親父の七回忌でここに来ている。ど田舎の小さな村だ。この村には、昔から変な言い伝えがある。

何十年に一度、満月の夜に現れる遺跡。神から選ばれた者でないと探し当てることはできず、もし見つけることができたなら、神の選ばれし者として神の力の一部を授かるのだと言う。

親父は、その遺跡を見つけられなかった。何度も悔しいと言うのを聞いたことがある。

凜が探しているのはその遺跡だ。凜は何故か親父に懐いていた。そ

の親父が見つけれなかった遺跡を見つけ出して、七回忌であるこの日に親父に知らせたいのだそうだ。

当然、凜と違つて俺と蒼兄は、親父のことは嫌いだ。お袋や俺たちのことをないがしろにし、お袋が病気で死んだときも帰つてこなかった。そんな親父を好きになれと言つほうがおかしい。だから、凜が何故親父のことをこつも好いているのかが分らない。

「そろそろ、日が落ちるな」

蒼兄の言葉に、空を再び見上げるがさつきと変わらぬ曇り空だった。

「凜!!! いいかげんにしろ! 今日はもう引き上げるぞ!」

えー!!と言つ声が風に乗せて聞こえる。

「いいのか?今日は、春乃さんが凜のためにご馳走作るつて言つてたぞ」

ご馳走と言つ言葉に反応したのか、しびしびと凜がこちらに戻つてきた。

「つたくお前は。あんまり心配させるな」

「はい……」

ごしごしと汚れた凜の顔を自分の袖でぬぐいながら、蒼兄は小言を言わずにはいれないらしい。凜も表向きは従っているが、俺のほうにちらりと視線を向け、んべつと舌を出す。

こいつ……全くこりてねえ。

それでも文句を言えないのは、自分も重度のシスコンだという証拠だろう。

とりあえず、せめてもの仕返しに凜の頭をもみくちやに撫でてから手をとつて歩き出した。

凜の抗議の声が聞こえるが、それは丸ごと無視の方向で。

「あらあら、3人とも法要が終わった途端お寺から飛び出していったからどうしたのかと思ったら、泥んこ遊びしてきたのね？」
……泥んこ遊び。いい年してそんなことを言われるとは思わなかった。

勘違いされても仕方ない姿をしていることは否定しないが……。

「……春さん、俺たちそんなに子どもに見える？」

「あら？私にしてみれば3人ともまだまだ子どもよ？」

俺の心の声を代弁した浩樹にニコニコと笑顔を向けるのは春乃さん、親父の妹だ。

「それにしても、久しぶりね。ちつとも遊びに来てくれないんだから。さっきは忙しくて挨拶もできずにごめんなさいね。凜ちゃんも大きくなっただわね」

春乃さんはそう言つて、凜の頭を撫でる。

「へへっ。ごめんね、春ちゃん。兄貴たち、仕事と大学が忙しい忙しって全然連れてきてくれないんだもん」

大きくなったと言われ、嬉しそうに微笑んだ次の瞬間にはぷうと顔を膨らませる凜。責めるように俺をちらりと見やる。

「仕方がないだろう。本当に忙しいんだから」

「そればかり！」

俺の言葉で余計に凜を怒らせてしまった。その様子に少し苦笑した後、春乃さんに向き直る。

「本当にご無沙汰してすみませんでした。今回は父のためにありがとうございました」

「蒼太君も相変わらずねえ。さあさ、そんな堅苦しいのはなしにして早く上がりなさい」

「はい。お言葉に甘えてお邪魔します」

「お邪魔しまーす」

俺の後に弟妹の声が続く。

春乃さんは、ふんわりと微笑んで、

「いらっしゃい。ゆっくりしていったね。……ここ、出るけど」

「は？い？……！！！！！！えええー！！？？」

と、小さな声で大きな爆弾を落とし、鼻歌を歌いながら、動けない俺たちを玄関に置き去りにした。

「……………」

さすが兄妹。親父にそっくりだ。

3人同時につくりと肩を落としたのは言うまでも無い。

2話

季節の変わり目は結構好きだ。まだまだ暑いことに変わりはないが、夏のじめじめとした空気から心地よい秋風になっっているのを直に感じる。

私は、夜の闇に紛れて、再びあの森に立っていた。正確にはその入り口。

もちろん、兄貴たちには内緒で、だ。昼間は一緒に探してもらったが、見つからなかったのだから仕方ない。それに、どうせあの時は見つからないと思っていた。私が求めているものは、満月の夜に現れるのだから。

見つからないと分かっておきながら、わざわざこんな森に入り込んだのには、それなりに理由がある。

ひとつは下見。子どもの頃に遊び場に使っていた場所であっても、ここ何年かご無沙汰だったせいかわかづけている。しばらく、歩いてみて分かったことだが、何となく昔と空気が変わっているような気がする。兄貴たちが気づかなかったみたいだから、気のせいかもしれない。でも、ぼんやりと嫌な違和感を感じたのだ。その違和感も一瞬だけで、すぐに懐かしさを取り戻したのだが。

ふたつめは、兄貴たちへのカモフラージュだ。

私が、こんな夜中に遺跡を探しに行きたいなんてお願いしたところで、兄貴たちが、素直に送り出してくれることなどありえない。兄貴同伴でもいいから、と言ったとしても無駄な努力だろう。いつも反発しあっているくせにこういう時ばかり相性がいいのがあの2人だ。

何も言わずこっそり探す、という作戦も考えたが、蒼兄も浩兄も、私が円ちゃんのことを大好きなことは知っているし、私が遺跡のことを言い出さないのはかえって怪しまれるだろう。あ、円ちゃんは私たちのお父さんのこと。私は、お父さんのこと好きだけど、兄貴

たちは違うみたい。何でなのかは知らないけど、兄貴たちには兄貴たちなりの理由があるんだと思う。

話を戻すけど、あの2人に怪しまれたら元も子もない。だから、下見を兼ねて、昼間に遺跡を探しに行けば、兄貴たちは、それで私が満足したと思うはず。まさか、夜中に抜け出すなんて思わない、という寸法だ。我ながら、いい作戦を思いついたものだ。兄貴たちは油断してとっくに就寝しており、春ちゃんの家を抜け出すのは笑いが出るほど簡単だった。

春ちゃんは、円ちゃんの妹で、私たちのことをとても可愛がつてくれている。ただ、その可愛がり方が普通とは違うのが玉に瑕きずなんだよね。春ちゃんの旦那さんは、もう随分前に病気で亡くなっていて、私は会ったことがない。春ちゃんは、大きな家に一人で暮らしているから、やっぱり寂しいんじゃないかと思う。それと、可愛がり方が密接に結びついていていいのかといえれば首を傾げるしかないが、とにかく春ちゃんの悪戯は強烈なのだ。

さっきも、春ちゃんの玄関での置き土産のせいでも、てっきり幽霊が出るのかと思つてびびっていた私たちだったが、あいにく出るもの違ひだったようだ。結局出たのは、《イニシャルG》。つまり、ゴキブリだった。

ゴキブリでも十分嫌なことには変わりないが、実態を持つている分、撃退できたので問題はない。でも、浩兄は虫が嫌いだから、逃げるのにかなり必死だった。ちょっと笑つたら睨まれた。蒼兄は、平然とGを撃退する私を見て、なんかぶつぶつ言つてたけどGを押しつぶしたティッシュを蒼兄の目の前に持つてつたら勝手に黙つた。

まあ、そんなこんなでG騒動は、解決した。でも、どうせなら最初に勘違いしたとおりに幽霊が出て欲しかった、というのが私の本音だ。ここは円ちゃんの思い入れのある場所だし、七回忌、なんて特別な日でもある。もしかしたら……と思つてしまったのだ。その期待は、Gの出現によつてあっけなく碎かれたけれど。

だからこそ、というのもある。今日、この日になんとしてでも遺跡

を見つげ出したい。そうしたら、どこからかひよっこりと会いに来てくれそうな気がするのだ。今でも、円ちゃんが死んだなんて、本当は嘘なんじゃないかって思うときがある。

円ちゃんが遭難した、という連絡が来たとき、心配はしたけど、私たちは心のどこかで円ちゃんなら大丈夫っていう気持ちがあった。その後、森の奥で遺体を発見した、という警察からの知らせを聞いても私たちは信じなかった。そんなただの冗談だ、って兄貴たちと笑いあった。

「あんなゴキブリ並みにしぶといやつが、遭難くらいで死ぬわけねーだろ」

蒼兄は、私の頭をぐしゃぐしゃに撫でながら、そう言った。でも、いざ病院に着いて、円ちゃんの遺体を見たとき。ああ、円ちゃんは、死んだんだ、と不思議に納得してしまった。涙は出なかった。

あまりに、突然で、あまりに、呆気ない死だった。

蒼兄が、円ちゃんの抜け殻に掴みかかろうとするのを、浩兄が必死で止めようとしている光景が、まるで他人事のように見えた。

私たちは、家への道のりを無言のまま歩いた。私の両手は、二人の兄のそれと繋がっていた。なんとなく、その手が震えているような気がした。

兄貴たちは、円ちゃんのことを早く忘れろなんて言うけど、そんなことできるわけがない。円ちゃんは、私にとって父親以上の存在だということは何度説明しても兄貴たちには、理解されなかった。言っておくけど、別に円ちゃんに恋愛感情なんかを抱いていたわけではないからね。あしからず。そんなものは、とっくに超越した存在で……ってなんかよく分かんなくなってきたけど、とにかく私は、円ちゃんのことを大好きだ。

そんな私に、円ちゃんのことを忘れさせようとするなんて言語道断

の極みなのだ。兄貴たちのことも大好きだけど、それとこれとは別。この件に関してなら、私は、兄貴たちに全面的に対抗することを厭わないのである。

その、対抗の結果がこの遺跡探しなのだが、どうやらこの作戦にはいささか不備があったようだ。素晴らしい作戦を立てたことに自画自賛していたのだが、肝心なところで考えが至らないのが私の私たる所以とも言おうか。完全に月が雲に隠れている空を見上げてため息を吐く。こんなはずではなかった。まさか、天気にも裏切られることになるとは予想だにできなかった展開である。そう、ここは森。周りに街灯なんてものがあるはずもなく、月明かりに頼ろうとしてもそれすらない。つまり、自分の身体さえ見えぬほどに真つ暗なのだ。まあ、そこはそれ、冒険家の娘に生まれたのだからそれなりの知識はある。私は、見えないながらも背中に抱えているリュックサックの中から懐中電灯を取り出した。手探りでスイッチを入れるとようやくホツと息をついた。

でも、私のお目当ては満月の夜に現れるのだ。その満月が出ていなくても大丈夫なのだろうか。言い伝えはどの程度まで本当なのだろう。選ばれた者であるけど、その選考基準は何なのか。…ふう。考えてもきりがいいない。答えの出ないことを考えていても仕方ない！いぎ、実践あるのみだ！そう、意気込んで目の前の森を見据える。

……ああ、夜の森って結構不気味。

こっこんなところで立ち往生している暇はない！多少びびりながらも、精一杯の勇気を振り絞って、私は森の中へと一步を踏み出した。

助けて

足を出した、その瞬間柔らかな風が私を包んだ。それとともに聞こえた、《声》と言っているのだろうか。……いや、これは《想い》だ。身を切るような辛く悲しい《想い》。この《想い》には、覚えがある。すみれちゃん（私の母親だ）と円ちゃんが亡くなったとき。

それと、幼い頃の

私は、駆け出した。森で走るのは危ないと分かっている。それでもこの《想い》を無碍むげにできなかつた。

助けなきや。一刻も早く。私に何ができるのかなんて考えるのは後でいい。とにかく駆けつきたいと思った。どこの誰が助けを求めているのかなんて知らないけど、なんとかかしてあげたい、そう、思った。早く！早く！！焦燥にも似た気持ち私を急き立てる。もうすでに、最重要事項だつた、遺跡を見つけるといふ目的は私の中から消え去つていた。

おかしい。この森は、どこかおかしい。昼間来たときは別物だ。足を動かすスピードは変えずに違和感の正体を探る。昼間に一瞬感じた違和感がここにきて膨大に膨れ上がったような感覚だ。森に入ったときから頭の中で警鐘が鳴り続けている。これ以上先へは行つては駄目だと本能が訴える。背中に一筋の冷や汗が流れた。それでも足を止めたくなかつた。自分が一体どこへ向かっているのかすら分らない。でも、私が行くべき場所は私の身体が知っている。そんな気がした。

ここだ。直感的にそう感じた。周りの景色が変わつたのだ。ずいぶんと荒れている場所だ。これでもかというほど密集している木がここにはなく、ぽつかりと空いた焼け野原のようになっている。この森にこんな場所があるなんて知らなかつた。ふと、手元の懐中電灯を見ると、いつ消えたのか、小さな灯りはなかつた。でも、それならなぜ視界がこれほどひらけているのだろうか。地面に目を落とすと、自分の影がある。空に視線を移した。

「きれい」

見事なまでの月がそこにあつた。雲はいつの間にか晴れたのだろう。いままで感じていた焦燥や恐怖は消え、代わりに穏やかな気持ちを

運ぶ。少しだけ気持ちが悪くなった私は、視線を元に戻し、《想い》の主を探そうとした。

「…う、そ」

思わず声に出していた。驚愕で身体が震える。今まで何もなかった焼け野原に、西洋風の建物が現れていた。それは、厳かで神聖な雰囲気を感じさせず、そこにあった。

「…なん、で？何も、なかったのに」

そなたが、私の《声》を受け止めたから。

「!!!!!!……な!!!!!!??」

もう、訳が分らない。ここには私しかないはずなのに、自分に向けた疑問を目に見えないものが答えている。驚きすぎて頭がうまく働かない。でも何故か、恐怖は感じなかった。

すまない。驚かせてしまったようだ。

姿は見えないが、劣るような優しい気遣いを感じさせる声音だ。私は、とにかく状況を確認しようと、深呼吸をひとつした。きつと、この人は悪い人じゃない。

「…あなたは誰？」

何を考えるでもなく、自然と口から言葉が出た。見ず知らずの人を信用してはいけない、とさんざん幼い頃に教えられてきたにもかかわらず、私は早くも姿なき声の主を信用し始めていた。

私の名は、エレスティア。ファルスの地を創りし、風の女神だ。

この世のものとは思えない流麗な声が言の葉を紡ぐ。

「…えつと、エレ？」

エレスティアだ。エレンでいい。

「エレン?…あ、の、助けを求めていたのは、あなた、ですか?それと、ごめん、なさい。あなたの言っている意味がよく分らない…です」

ふふ、無理に敬語を使わずともよいよ。分からないのも無理はない。この世界の話ではないのだから。そう、私がそなたを呼んだ。

「この世界の話じゃない?…ってどういう?…どうして私を?」

私の頭の中は、すでに疑問符のオンパレードだ。今更気づいたのだが、私は今とても非現実的な状態に陥っているのではないだろうか。姿なき声の主と普通に話していることもそうだが、女神がどうたらとか、とてもじゃないが私の理解の範疇を超えている。つまり、声の主は神様なのだろうか?

すまない。それを話してやれる時間が私にはないのだ。そなた、名は?

「あ!凜です!間宮凜。ごめんなさい。自分からエレンの名前を聞いておいて、名乗らなくて…」

そなたは、真っ直ぐない子だね。…その真っ直ぐさがあだにならねばいいが。

「え?」

いや、なんでもない。…凜、か良い名だ。力強く、野の花のよう美しい。

思いがけない賛辞に私は素直に喜んだ。この名前は、密かな自慢だった。すみれちゃんが残してくれたものだから。しかし、こども銜いなく褒められると、なんていうか、こころ…照れる。

「あ、あり…がとう」

お礼を言いつつ、つい、目が泳いでしまうのは許してほしい。

礼を言われるようなことはしていないよ。さあ、そろそろ時間だ。そなたに私の残った力全てを捧げよう。

「え？あの、力って？」

おや？そなたはそのためにここに来たのではないの？我が神の力を求めんがゆえに、我が消滅せし場所に。

「え？……！つてことはここが!？」

私は、頭の隅においやっていた、この森に入り込んだ最初の目的を唐突に思い出した。そして、目の前にそびえ立つ、とても遺跡なんていえない建物を見上げる。これが、円ちゃんが見つけたかった遺跡？

そうだ。そなたは、選ばれた。いや、受け入れた。だから、神殿が現れた。

「神殿？…そつか、これは神殿なんだ」
なんとなく納得したような気分になる。本当は、何も分かったことなんてないけど。

さあ、中にお入り。そして、私の願いを叶えて。

「エレンの願い？」

そう、私の願いは

その言葉を聞き終えたときには、私はすでに神殿の中にいた。自分で中に入ったつもりはないのに、そこにいた。瞬間移動を初めて体験した事実ではなく、神殿の素晴らしさに、私は声が出なかった。すでに非現実的なことを受け入れている自分が、何だかおかしい。そこは、かなり広い空間だった。私の周りには壁ではなく、緻密に造られたステンドグラス。それが、月明かりに照らされて、とても綺麗だった。

ここは、気に入ってくれただろうか？

何故か、エレンが遠慮がちに問う。

「うん！凄く綺麗」

そうか。そなたには、ここが綺麗に見えるのだね。

「…エレンは、そう見えないの？」

エレンのどこか寂しさが滲む声音に不安になる。

すまない。不安にさせたようだ。この場所は私にとって特別な場所だから、そう言ってもらえて嬉しいよ。…！！まずい！！！！

私を安心させる穏やかな声音から一変して、切迫した声が響く。

「エレン？どうし…？」

説明している暇はない！！凜！すまない！そなたを異世界へと送る！！そなたを巻き込むことになってしまったこと、許して欲し

い！

「え？え？なに？いつ異世界って！？」

落ち着け！いいか、危なくなったら私の名を呼べ！そなたに私の加護を！！

「エレン！！？…？…なに？なに！！？」

エレンが叫ぶと、急に身体が熱くなった。それは、とても気持ちのいいものではなく、自分の中に何かが入り込むのを必死で抵抗する。頭がガンガンと痛み出し、吐き気がした。声なき悲鳴をあげる。

凜！抗うな！受け入れろ！！頼む！！向こうで を助けてくれ！！

エレンがそう叫ぶのを最後に、私の意識は途切れた。

3話

暗い。真っ暗だ。ふわふわと足元がおぼつかない感覚を不安に思いながら、これは夢だと悟る。幼いころに見た夢。なぜ今更、と思う。こんな夢、早く覚めたいと思う反面でまだこのまどろみの中に留まりたいと思う。おかしい。俺は、あの頃に戻りたいのか？現実でありながらも悪夢のようなあの場所に？そんなわけはないと慌てて頭を振る。早く夢から覚めなければ。ここに居たくない。何かに押しつぶされそうな圧迫感が俺を襲う。

ふ、と泣き声のようなものが聞こえた。嫌だ、見たくない。そう思うのに俺の身体は、俺が思っていることと逆のことをする。見なくても分かる。誰が泣いているのか、どうして泣いているのか。何十回と見た夢だ。内容など全て覚えてしまっている。嫌だ。必死でその光景を見ることを抗う。それも無駄なことで分かってる。それでも、俺は見たくない。

……今回もまた、失敗に終わった。視界に映るのは一人の幼い男子だ。いつもと同じ部屋、いつもと同じ体勢、いつもと同じ服装で、それは泣いていた。助けは来ないと分かっているのに、よくそんなにも泣けるものだ。

お父様、お母様。

そう、呟いて涙をこぼす。俺の眉間に皺が寄る。あんな奴らに救いを求めるなんて愚かとしか言いようがない。

いつもと同じ光景。いつもと同じ台詞。もう、飽き飽きだ。そう思うのに、一度視線を合わせてしまえば、夢が覚めるまで、そこから目が離せない。

夢がどうやって覚めるのか、その方法は知っている。でも、それを

今する気にはなれなかった。俺にかかる圧力がさらに強くなるのを感じる。早くいつものようにしろ、と俺を急いでいるのだろうか。仕方ない。どうせ俺は、この夢にはどうあっても抗えない。

そして、俺は男の子に向かって手を伸ばした。何かに気づいた男の子がこちらを振り向く。もう遅い。俺は、男の子の首に手を添える。

お兄ちゃん？

目に涙をいっばいにためた男の子が、突然現れた俺を不思議そうに見上げる。

人が来てくれたことが嬉しかったのだろうか。戸惑いながらもパツと表情が明るくなる。やめろ。頼むからそんな目で俺を見ないでくれ。

いつも通りだ。これは夢。幼い頃の俺の夢。そう、目の前のガキ、それは、俺だ。

あいつに殺されるくらいなら、俺が代わりに俺を殺そう。そうすれば、夢は覚め、いつもの日常に戻る。手に力を込める。

!!あつ…お、にい、ちゃん。くる…しい、よ。

誰も助けてはくれない。俺の頬に冷たいものが伝った。

瞬間、目の前のガキは急に苦しんでいた素振りをやめ、表情が醜く歪み、声すらも人の声とは思えない程に急激に変化した。そして、そんな俺を見て、お前は、自分がそんなに可愛いのか、と嘲笑う。うるさい、うるさい。

夢の癖に、俺に意見するな。

お前は、日常には戻れない。この世界で未来永劫彷徨うのだ。

やめろ、そんなのは嫌だ！！俺は　　！！

「蒼兄！！」

突然、凜の声が聞こえた気がした。夢の中は、真っ暗なのが当たり前だった。その夢の中で、一筋の光が俺を照らす。これは、いつも通りじゃない。俺は、その光に引っ張り上げられるように意識を上にあげる。俺を苦しめていた、俺の幻影はいつの間にか消えていた。

目を開くと、そこは、見慣れた天井ではなかった。ああ、そういえば春乃さんの家にお邪魔しているんだった。夢を見た後は、必ずと言っていいほど身体が重い。ゆっくりと身体を起こし、頭を振る。

凜の声が夢の中で聞こえたのは初めてだった。

窓からはすでに光が差し込んでいて、もう朝だと告げている。眩しさに、目を細めた。凜みたいだ、と思う。……俺のシスコンは重症だな。浩樹に少しは自覚しろ、と幾度となく言われているが、これでも分かっている。ただ、自覚はしているが、態度は直さないだけであって……というか、浩樹だって十分シスコンだろう、と言いたい。あまり、態度に出ないようにしているのだろうがバレバレだ。さて、そろそろ起きないと春乃さんが奇襲に来る。幼い頃は本当に参った。人が寝ている布団に、へびやらカエルだかを突っ込むのだ。凜はなぜかキヤアキヤアと喜んでいたが……。もっと、女の子らしく育てるつもりだったのに、どこで失敗したのだろう。俺と浩樹が情けないのが原因か？自分の考えたことに軽くシヨックを受けつつ、布団を畳もうと立ち上がった。

「蒼兄！！」

急に、部屋の襖が開き、浩樹が突進するように部屋に入って来た。顔面は蒼白で今にも倒れそうな容貌だった。

「浩樹？どうし？」

「凜が、凜が消えた！！」

瞬間、俺の目の前は真っ暗になった。

4話

「……ここ、どこ？」

とりあえず、ベタな台詞を吐いてみる。っていうか、本当にここはどこだ？

……とりあえず、こういう時は状況の整理だ、と蒼兄がいたら言うだろう。頭を整理することで、現状を把握し、冷静になる必要がある。

蒼兄がそつと諭す様が簡単に想像できて、私はため息を吐いた。蒼兄と浩兄、きつと怒ってるだろうな。弱気になる気持ちをグツと抑え思考を元に戻す。

えつと確か、さっきまで私は、エレンと神殿の中にいたはずだった。円ちゃんがずっと探していた遺跡がその神殿だったのには驚いたな。エレンは、よく理解できなかったけど、どこかの世界の女神らしい。女神って本当にいるんだ。それで、エレンは私に助けを求めた。昔から、満月とともに現れるという神殿で。その神殿は、見つけたものに力を与えるという言い伝えがある。きつと、エレンが最後に私に何かしたアレがそうなんだと思う。気持ち悪くなるほどの頭痛はもうしなかった。特に身体に異変も見られない。うーん、本当にエレンの力が私に備わったのだろうか。甚だ疑問だがとりあえずそれは置いておくことにする。

さて、ようやく私は周りを見渡す。どうやら、私は建物の中にいるようだ。ずいぶんと古ぼけている場所で、少し壁に触ると簡単にボロっと崩れた。まずい、崩壊しかけている。とりあえず、こんなところに長居は無用だ。生き埋めにされたらたまらない。ゆっくりと立ち上がり、自分の身体を確認する。足と手に多少の擦り傷はあるものの、たいした怪我はないようだ。ほっと息をつき、出口を探す。「あれ？これって……」

あるものが目に留まり、そちらに近づく。ちらちらと光ってるもの

が見えたのだ。壁についているソレは、埃と砂にまみれていた。さつと手で汚れをを払う。

「これって…ステンドグラス？」

かなり汚れてはいるものの、緻密な技術は損なわれずにそこにあった。光っていたのは、これに光が反射したためだったようだ。何故か、ステンドグラスに描かれているものに見覚えがあるような気がして首をひねる。

「あ！これ！」

私は、ある予感が閃き、期待とか不安とかをごちゃ混ぜにして駆け出した。もし、私の予想が外れていないのならここは…。

「やっぱり」

建物の外に出た私は、そう、呟いた。そして、建物を見上げながら、自分を落ち着かせようと息を吐く。

ここは、私が意識を失う前にいた、神殿だった。

私は、はやる鼓動を落ち着かせようと胸を掴む。そして、先ほど見たステンドグラスを思い返す。

あそこに描かれていたのは1組の男女と一匹の悪魔だった。綺麗な翡翠色の長い髪を持った女性と短髪で銀の髪が寄り添っている。一目見て二人は、きつと愛し合っているのだろうと分かるくらい幸せそうな、優しい顔をしていた。そんな二人を少し離れた場所からじつと睨みつけている悪魔。確か、そんな絵だった気がする。何故だか私は、その悪魔が気になった。少しだけ悲しそうに見えた目のせいだろうか。

「はあ、これからどうしよ」

とりあえず、自分の置かれた状況を確認した私は、改めてため息をつく。周りは森。目の前には古びた神殿。上から下まで見回して、

ぐるりと一周歩いてみたが、これといって元の場所へ帰れそうな気はしない。きつと、ここは異世界なんだろうと思う。確か、エレンもそんなようなことを言っていた。私を異世界へ送る、と。ここがエレンの言う異世界なのかどうかは、分からないが、さっきまでこの世のものとは思われないほど綺麗だった神殿が、一瞬でボロに変わるなんてことはありえないだろうから、きつとここは、私がいた場所とは違う場所なのだろう。

異世界ってどこなのさ、もつと具体的に教えてよエレン、と呼びかけても返事はない。僅かに残っていた期待も見事、沈黙と言う形で裏切られる。ここは私が生まれ育った世界ではないのだとぼんやりと感じていたことが確信に変わった。こうもあっさり、納得してしまっている自分が変でもやもやする。

ともかくにも、とりあえずここにいるのは何となく危険な気がする。変な動物とか出てきそうだし。さつきから気づかない振りをしてきたが、あまり遠くないところで何かの遠吠えのようなものが聞こえてくる。狼がいるのかもしれない。そう意識すると急に怖くなる。一旦恐怖を意識してしまえば、なかなかその感情は去ってくれない。ぽつかりと空いた自分が立っている空間の頭上には、爛々とした満月が顔を出している。

『あつち』に居たときは綺麗だと思った月が、『こつち』では不気味さを3割り増しくらいに際立たせる効果を果たしているなんて！詐欺だよ、と月にまで文句をたれる。

ああ、ダメだ。いい加減この状況を何とかしなくては。月は、人の心を惑わせると言うけれど本当かもしれない。現に私は、内心かなり焦っている。森の中を夜に動くのは危険だ。これは、円ちゃんに教わった。(『あつち』では、その言いつけを破って遺跡探しなんぞをしてしまったが)でも、こんな所で一夜を明かす気にもなれない。

「うっ、ああいい、うっいい」

私は力なくその場にしゃがみ込んだ。これは自分が招いた事態だ。私を心配して、危険なことから遠ざけようとしてくれた2人の兄に助けを求めるなんて、都合が良いにもほどがある。それでも、事態の深刻さについて、名前を呼んでしまう。

ガサツ

ポツリと2人の兄の名を口にした直後に背後で草を鳴らす物音が聞こえ、私は反射的に身体をビクリと震わせた。まつまさか本当に狼が出てきたりしないだろうか。もしそうだとしたら一環の終わりである。

こっこんな展開は聞いていない。エレン、あなたの頼みとやらを叶える前にこれではジ・エンドではないか。

心臓がドクンドクンと鳴り始め、身体が小刻みに震える。ダラダラと冷や汗をかきつつ、じっと物音のするほうから目が離せない。心なしかガサガサという音が近づいてきてはいないか。本当に勘弁してほしい。とっとにかくこのままじっとしているのは危ない気がする。とりあえず、一旦神殿の中に戻ろう。やつとの思いで決断し、重い腰を上げた私は、中腰の体勢でピタツと動きを止めた。何やらガサガサという音の中に人の声が聞こえた気がしたのだ。

「ったくよー。ほんっつとについてないぜ。あんつなチャラけた格好してやがったくせによ」

「まあ、仕方ないな。今の時代だ、そんなものだろう。むしろ、喜ぶべきだ。俺たちは運が良かった」

「へーへー。お前は何でもかんでも感謝しやがる。それはいいが、俺にまで強制しようとするのはやめろ」

人だ！！やっぱりそうだ。私は嬉しくて飛び上がりそうになった。

話している言葉は、まだここから距離はあるものの確かに日本語だ。多分声の調子からして中年ぐらいの男の人が二人だろう。私は、初めてこの世界で出会う人に期待で胸を膨らませた。神殿に戻るのはやめ、ここがどこなのか聞いてみよう。うまくいったら一緒に行動させてもらえるかもしれない。私は、おとなしくその場で彼らがここに来るのを待った。そうして、一際大きく草を掻き分ける音がし、私の思った通り、ひょっこりと姿を現したのはひげ面の二人の男の人だった。暗くてしつかりとした確信はできなかったが、二人ともくすんだ金髪だった。やはり、ここは日本ではないと認めざるを得ない。

彼らは、最初私の姿を見つけられなかった。こんな暗闇では仕方ない。決して私が小さかった、とかそんな理由ではないのだ。絶対に！！しかし、さすがに目の前を何もなかったように通り過ぎられては困る。私は、思い切って声をかけることにした。

「あ！あの！」

また、無視されてはたまらないと割と声を大きめに出したのがいけなかったのだろうか。彼らは、さつとその場を離れ、素早い動きで武器のようなものを取り出した。逆に、その動きに驚いたのは私だ。そんなに、ビックリさせてしまったのだろうか。ピリピリとした空気に私は動けなくなってしまった。生まれて初めて武器を向けられたという貴重な体験は一生忘れることはないだろう。彼らと見詰め合うこと数秒、フツとその空気を解いたのは、大柄な男だった。

「……なんだよ。ただのガキじゃねーか」

彼は、ため息をついて剣のような長い刃物を腰に差しなおした。声をかけただけで武器を取り出すとは、さすが異世界。ここは、なかなか物騒な世界らしい。大柄の男が武器をしまつてくれたことに多少安堵したものの、もう一人の大柄な男に比べたら小柄の、それでも標準の男性ほどの体格のある男は、まだ短剣のような武器を二本

両手に所持していたため気は抜けない。それを見た大柄の男は、せせら笑う。

「随分と用心深いな。こんなガキにまで」

「お前は油断しすぎだ」

「油断ねえ。こんなガキに油断も何もねえだろうが」

「フー……。だから、お前は単細胞だというんだ」

「んだと!? だったら、このガキのどこに警戒する要素があるってのか教えてもらおうじゃねえか!!」

「…声をかけられるまで存在を俺たちに気づかせなかった。それだけでも、警戒する意味はあると思うが?」

「!? ……まあ、確かにそうだが。だけどよ、こいつビビッてるじやねえか。武器も持ってねえみてえだしよ」

「それは、やってみれば分かる」

……何やら話が危ないほうにいつてはいませんか? やってみればわかる? ……無理無理無理無理。断じて無理。っていうか、武器も持っていないか弱い乙女に何たる仕打ち!?

「ちよつちよつと待ってください!!」

慌てて静止の言葉を投げる。

「わっ私は無実です! 潔白です! ほっほら武器も持ってません! ただのか弱い迷子の乙女です!!」

「「……………」」

なっなんだろう。このいたたまれない沈黙。私、何か変なこと言っただかな? いや〜な空気の中必死に耐え、二人の反応をじつと待つ。

「……………どこに乙女がいるって?」

ボソッと大柄の男が呟く。おやっとな私は首をかしげた。何を言って

いるのだこの人は。いるではないか、目の前に。

「いやだな。いるじゃないですか。あなたの目の前に」とびっきりの笑顔で大柄の男に答える。

「……おい、冗談も休み休み言えや。このクソ坊主。ガキの癖に気持ちの悪いこと言ってるねえでママのおっぱいでも吸ってる!!」

なんだなんだ、なんなのだ。私は事実しか言っていないのになんでこんなメタクソに言われねばならないのだ!! っていうか、むしろ男の子だと思われているのだと、言葉の端々で気づいてしまった。確かに、髪は短いし、微妙な天パーの無造作ヘアーだけど、そつそこまで言わなくてもいいと思う。男の言葉にかなりのダメージを受け、自然と首が垂れる。その頭上から違う声で言葉がかけられた。

「迷子だといったな。どこから来た? お前の着ている服は珍しい。外国か?」

大柄な男よりは冷静で小柄な男だ。

「……どこからって、…日本」
「にほん?」

「おい、こんなガキの言うこと真剣に聞いてんじゃねえよ」
やっと、話を聞いてくれるかと思っただのに横槍を入れるな大男め! もう、お前なんか大男で十分だ!!

「にほん、なんていう地名は聞いたことがない。どうやってここまで来た?」

大男を無視して冷静な男は話を続ける。フンツいい気味だ。しかし、日本を知らないという言葉に少なからずショックを受ける。

「……分からない。だから、あなたたちに聞こうと思って。…ここは、どこですか?」

私の言葉に、冷静な男はやっと武器を下ろしてくれた。どうやら、私が無害であると判断したらしい。

「…ここは、エレスティアの森だ。裏切りの森とも呼ばれている。ファルス国のことは知っているだろう。その東のはずれにある森。

それがここだ」

「……ふあ、ふありゆしゆ？」

「……」

言い慣れない言葉をなんとか言ってみると、またしても男たちは私をじつと見つめて沈黙した。

「……まさか、ファルス国を知らないと？」

冷静な男に尋ねられた問いに、私は正直にこっくりと頷き返した。どこかで聞いたこともあつた様な気もするが知っているかと聞かれたらノーだ。多分エレンから聞いたんだろう。

「おいおい、一体どこの田舎もんだよ、てめえは。ファルスは、4 大国の中の1つだろーが。世界の始まりの国を知らないやつあ、言葉話せねえガキでもいねえぞ？」

「そつそんなこと言われても……。あつても、えつえりえしゆていあなら知ってるよ!!!」

さつき、冷静な男が口にした『えりえしゆていあ』はきつとエレンのことだ。知っている単語があつたことは私にとって喜ぶべきことである。

「……」

男たちは私に分からないよう視線を交わす。

「エレスティア、だ。ファルスを知らずに、なぜエレスティアを知っている？」

冷静な男の問いに私は簡潔に答える。

「会ったから」

「……!?!?!」

「……会った、だと？」

珍しく、冷静な男がうろたえている。

「うん。あーでも、会った、っていうか、声を聞いたっていうか。ここ、エレンの森なんだね。エレンって女神様なんでしょ？」

「……ああ。エレスティアはファルス国を創造したとされる女神だ。

お前は、エレスティアの声を、聞いたのか？」

冷静な男は慎重な声音でゆっくりと問う。

「うん？だから、そうだよ。エレンと話してたら急にここに来てたんだ。だから、このことなんて全然分かんなくて」

「…そういえばお前、髪の色が漆黑だな。瞳も、暗くて分かりにくいが漆黑だ」

急に、大男の目が怪しく光った気がした。髪と瞳の色を聞く彼が何やら危険な雰囲気をもっている。

頭の中で大きく警鐘が鳴り始める。

やばい。この人はやばい。

「え？そ、そうだけど。漆黑って。大げさだよ、ただの、黒だよ」
私が、そう答えた瞬間、彼は大きな声で高笑いを始めた。

「…クツクククク、ハハハハハハハハハハ！！！！おい！！お前の言うことも偶にはまんざらじゃねえな！！俺たちは運が良いぜ！！」

「…ああ。俺たちは運が良い」

初めてだった。冷静な男が大男に同意したのは。

冷静な男が私を見た。にやりと嫌な笑いを向けられる。彼の笑顔を見るのもそういえば初めてだと頭の隅で思った。大男が私に向かって手を伸ばす。呆然と目の前で起こっていることを傍観していたが、彼の狂気じみた瞳を見て一気に覚醒した。私は、咄嗟に踵を返し、走り出した。この人たちは危ないと直感が告げる。きっと、私はあの人たちに言っただけはいけない情報を与えてしまったに違いない。自分の迂闊さに舌打ちしたい気分だった。

必死で走ってはいるが、だんだんとあの二人と距離が縮まっているのが分かる。なんだか今日は、森の中を全力疾走することに縁があるらしい。幸い、体格が大きい彼らは、鬱蒼と茂った森の中を全力

で走るのは苦手らしい。私は、心外だが同い年の子達の中でも割と小さいほうなので小回りが利く。その差が僅かでも逃げるのを助けてくれているが、向こうは私にはない体力がある。じきに捕まってしまうだろう。しかし、どうすることもできない。とにかく、今は走ることしか思いつかない。自分の迂闊さで招いた事態のせいで、どンドン窮地に追い込まれていく。それに比例して頭の中もマイナス思考で埋め尽くされる。自分は、馬鹿だ馬鹿だと思いながらひたすら走る。後ろから怒声が聞こえる。随分と距離が縮まってしまったようだ。

「俺たちから逃げようたつてそうはいかねんだよ！！ガキが！！おとなしく諦めやがれ！！！！」
そんなことを言われて誰が諦めるといふのだ。余計に逃げる力が入る。

「馬鹿が。そんなことを言えば余計逃げるだけだろうが」
さすが、冷静な男。何だか心の内を読まれたようで心地悪い。近づいてくる怒声、彼らが踏みしめる草音、自分から発する息切れの音。聴覚から入ってくる情報で恐怖心が煽り立てられる。

怖い。怖い怖い怖い。

「だつ誰か！！ハアハアツ誰か！！助けて！！」
「無駄だ！！助けなんか呼んだつて誰も来ねーよー！！ギャハハハハ！！」

ううつ大男め、気持ちにくじけさせるようなことを言うな！！もし、もしも捕まったら何をされるんだろう。私を捕まえることで彼らに何かメリットがあるのだろうか。ふ、と意識が思考に嵌りそうになり慌てて引き上げる。今は逃げるのが最重要事項だ。しかし、それれももう限界だった。もともと体力のあるほうではない。心を支配する弱気が一瞬二人の兄のことを思い出し、自分の不甲斐なさを再

確認した途端涙が滲んだ。涙のせいで視界が曇り転んでしまうのは必然だった。

「……まったく、手間かけさせやがって!!」

背後を振り向くと大男が腰に差さっている長剣に手を伸ばすところだった。

「クッククク、もう逃げられないように足の先でも切り落としてやるよ!! なあいいだろ!？」

「ああ、だが間違っても殺すんじゃないぞ」

「んなこた分かってんだよ!!」

大男は、ニヤニヤと笑いながら長剣を振りかざす。

ああ、終わりだ。

私は、反射的にギョツと目を閉じた。その瞬間切り裂くような風が吹いた、私にはそう感じた。

慌てて開いた目に映ったのは、綺麗な銀色だった。

5話

後姿しか見えないその人は、大男の振り下ろした長剣を自分の剣で簡単に受け止めていた。いつの間にも私と大男の間に入ったのだろう。彼は、灰色のフードつきのローブのようなものを羽織り、私を庇うようにして立っていた。銀色だと思ったのは彼の髪の色だった。月の光が彼の髪に溶け込んでとても綺麗だと思った。私は、何が起きたのか分からずじつと彼らの会話を聞いているしかできなかった。

まさか本当に助けが現れるとは思っていなかった大男は、動揺を隠そうともせずに激昂した。

「な！！なんだてめえは！！」

「それは、こちらの台詞だ。大の大人が二人がかりでこんなガキに何の用だ？」

ガキという言い草にカチンときたが、彼の初めて発した声があまりにも耳障りの良い低音でしばし放心してしまう。

「貴様には関係のないことだ」

冷静な男は、こんなときでもやはり冷静で銀髪の男の言葉を切つて捨てる。

「まあ、それもそうだな」

ちよつちよつと待て！！何故そこで納得するのだ、銀髪の男よ！私を助けてくれるのではないのか！？一瞬でも王子様みたいだと思つた自分が馬鹿みたいではないか！！

「だが、悪いが目が付いたんだ。お前らの薄汚い顔がな」

銀髪の男が続けた言葉に、私は心底安堵した。どうやらこの人は、本気で私を助けようとしてくれてるらしい。

「！！クツクツ随分かつこいいいこと言うじゃねえか。悪いことは言わねえ。そこどきな、兄ちゃん」

「……嫌だと言ったら？」

「始末するのみだ」

いつの間に取り出したのか、冷静な男は短剣を2本、その手に握り、銀髪の男に今にも襲いかかるうとしていた。

「！おい、待て。こいつは俺がやる。てめえは手え出すんじゃないよ」

大男がベロリと長剣を舐める。それをチラリと見た冷静な男は、ハアとため息をつき、構えていた武器を下ろした。

「……好きにしろ」

その様子に気を良くしたらしい大男は、ゆっくりと長剣を銀髪の男に向ける。威嚇しているつもりのようなのだが、あいにく銀髪の男には何の効果も成さなかったようだ。

「……話し合いは終わったか？」

のんびりとした口調の銀髪の男の態度が気に入らなかったのか、チツと大男が舌打ちした。どうでも良いが、大男は気分の移り変わりが相当激しいらしい。しかし、何かを思い直したらしい大男は、ギロツと今まで蚊帳の外だった私に視線をとめた。油断していたところに鋭い睨みを利かせられたこっちはたまったものではない。私は、一気に血の気が引き、いつの間にか治まっていた身体の震えが思い出したかのようにやってきた。

「なあ兄ちゃん、あんた、そこにいるガキにどんだけの価値があるのか分かってやってんのか？」

唐突に発せられた大男の言葉に困惑する。価値？私に？

「……どういう意味だ？」

「ククツそいつの髪と瞳、よく見てみる」

クイツと大男が私に向かって顎をしゃくる仕草をする。そして、今まで後姿しか見えなかった銀髪の男が振り向き、その瞳を大きく見開いた。私は、ただただその人の瞳を見つめ返した。彼は、何と違うか、本当に王子様のようなだった。彼の瞳は、透き通るほど綺麗な飴色で、今まで見てきた男の人の中でダントツに格好良かった。

私の姿を改めて確認して驚愕の色を見せる銀髪の男に、満足そうな大男は先を続ける。

「どうやら理解したようだな。分かったら？そのガキは放っとけば災いを呼ぶ。そうなる前に欲しがってる奴らに売り渡すのが筋だ。兄ちゃん、あんた、俺の剣を受けたんだ。少しはできるんだらう？なら、俺たちと組まねえか？報酬は山分けた。そのガキだってお前みてえな美形に売られるってんなら本望だろうさ」

災い？売り渡す？さっきから私は大男の言っている意味が理解できない。私は、この世界に来てまだ何分も経っていないのだ。右も左も分からない私に何の価値があるというのだらう。なのに、大男はまるで宝箱を見つけたように嬉々としている。

「……関係ないな」

不意にポツリと銀髪の男が呟く。

「ああ？関係ねえだと？」

「ああ。このガキが何だろうと関係ない。災い、か。ククツまだそんな迷信を信じてるヤローがいるとは思わなかったぜ」

急に馬鹿にするように笑い出した目の前の男に羞恥心からか、顔を真っ赤にした大男が怒鳴り声を上げる。

「てめえ！下手に出てりゃいい気になりやがって！！」

「落ち着け」

今までずっと沈黙を守っていた冷静な男が静かに口を開く。

「迷信かそうでないかなど、俺たちにとってはどうでもいいことだ。俺たちは単に金が欲しいだけだ。そのガキは高く売れるだらう。たとえ何の能力もなかったとしても、だ。そのガキが売払われた後にどうなるうが知ったことじゃない。……違うか？」

「！！てつてめえに言われなくてもんなこたあ初めっから分かってんだよ！！」

冷静な男のおかげで、少し頭を冷やしたのか、大男の顔から赤みが引いていく。

「……なら、これからすることは分かるな？」

「チツてめえに指図されるほど胸糞悪いことはねえぜ」

大男と冷静な男は言い合いをしつつも視線は銀髪の男に向かう。そして、一度は下ろした武器を再び構えた。

「邪魔者は、排除するのみだ」

全ては、一瞬の出来事だった。二人の男が武器を振りかざし、銀髪の男に向かう。私が確認できたのはそこまでだった。気づいたときには、立っているのは銀髪の男だけで、二人の男は地面に倒れ、ピクリとも動かなかった。

「う、そ」

目の前の男は一体何をしたというのだろう。お世辞にも王子様には見えてもそれほど強そうには見えない。私は、呆然と銀髪の男を見上げる。すると、不意に彼が振り向き、バチツと目が合ってしまった。何とというか、こんなに男前な人にお目にかかった経験などない私は、ドギマギと視線を泳がせる。言っておくが、これは、乙女として正しい反応であって、私がチキンハートだから、とかそんなことでは決してないのである！

彼は、何も言わずしばらくじっと私を見ているかと思ったら、おもむろに手を伸ばしてきた。そんな彼の行動に私は、おもいつきり動揺する。

手？ なっ何だこれは。助けてやったんだから何かよこせのあれなのか？ そんなことを要求されてもお金なんて持ってない。

私は、慌てて向こうの世界から唯一持つてきていたリュックを背中から下ろし、何かないかと中身を探り始めた。そんな私の突飛な行動に不審を抱いたのか、彼の眉間に皺がよる。依然手を差し出され

たままの状態では、パニックに陥りそうになりながらも懸命に賣物を探した。

「えっえつと、ちよつちよつと待ってください！なつ何かあるはず！」

冷や汗をダラダラと流しながら、ゴソゴソとリュックをかき回す。

この男は、自分よりもずつと強そうな男達をあつという間に倒してしまったのだ。私なんてひとたまりもない。だから、どうにかして機嫌をとっておかねば！私の命が危ないのだ。

「おい、お前、さつきから一体何を」

「あつたー！」

ついに業を煮やした彼が、言葉を発するのを遮って私はリュックから取り出したものをバラバラと彼の手の中に落とした。

「……………」

ジッと手の中のものを見つめる彼をビクビクと窺う。

「…何だ、これ？」

手の中のものから目を離さず、興味深そうに彼が聞く。

「あつ 飴玉です！えつと、本当は、私がお腹空いたら舐めようと思つてただけ…。えつとこんなものしかなくて、あんまり、いいお礼じゃないけど、その……………」

「…礼？」

彼は、ふつと視線をあげ、再び私を凝視する。

「…お前が気にすることじゃない。面倒だったが目に付いた。俺が勝手にしたことだ」

思わぬ言葉に、今度は私が彼を凝視する番だった。

これは、何？畏だろうか？よくある話の流れだと思えない。か弱い女の子が、悪者に襲われているところを颯爽とヒーローがどこからともなく現れ、格好良く救ってくれるのだ。まさか、そんなことが実際の身の上起こるはずがない。何かの罠だと思つのも仕方ないことだろう。しかし、そう思いつつも期待している私がいる

のも確かだ。女の子ならば一度は憧れるシチュエーションではないか！

「……あっあの、でも、助けてもらったことに変わりはないので。あの、本当に大したものじゃなくて申し訳ないんですけど」

動揺を押し隠し、ボソボソと話す私の頭に、ポンツと何かのがのつた。それが、彼の手だということに気づくのには数秒を要した。彼は、私と同じ目線になるようにしゃがみ込み、ぐしゃぐしゃと頭を撫でた。元々、天パーの頭がさらに鳥の巣になっていく。文句を言おうと口を開いたが、それが言葉になることはなかった。

この世界に来て、初めてだった。出会った人が3人だけというものがある。初めて、人肌に触れ、初めて、優しさに触れた。それが、どんな不器用な優しさであっても、その時の私は、それ以上の優しさを知らなかった。

「……うっうっう、うわー！ーん！！」

我慢の限界だった。ずっと、怖かったのだ。一人で、こんな知らない場所に来て、頼れる人は誰もいない。初めて出会った中年の親父には追い掛け回され、殺されそうになった。実際は、殺すつもりはなかったみたいだが、そのときの私は恐怖心で一杯で、そんな風に思えるわけもなく、そんな中でくれた優しさに縋り付くのは、仕方のないことだった。

しばらく、ぐしぐしと泣いていた私は、いきなり泣いて、きっと彼をビックリさせてしまったであろうことに思い当たる。慌てて、目をゴシゴシ擦るとやんわりとそれを止める手があった。

「バカ。擦るな」

そう言っつて、また、ぐしゃぐしゃと私の頭を撫でる彼は、兄貴たちを思い出させる。私は、ギリギリまで残っていたプライドをもかな

ぐり捨て、彼の腰におもいつきりしがみ付いた。

「うづうづ、ぐずっ、ずびびっ、うええっ」

「……おい、一つだけ言うておくが、鼻水はつけるんじゃねえぞ」

そんなことを言われても、もう遅い。

結局、私は、彼にしがみ付いたまま気の済むまで泣いた。彼は、そんな私を呆れたように見やっただけれど、最後は諦めたように、私の背中に腕を回して、ポンポンと宥めてくれた。そんな彼の行動に、またも涙腺が決壊しそうになったけれど、そこは何とか止めることに成功した。

「少しは落ち着いたか？」

ぐずぐずと鼻をすすり、頭上から降ってくる呆れの混じった言葉に何とか返事をしようとする。

「う、うん」

鼻声なのはこの際無視して、私はやっと彼からその身を引き剥がした。彼は、とてもいい匂いがして離れがたかったのだ。と、というか本当に迷惑をかけてしまった。突然現れた見ず知らずの男の人にこんなにも安心感を感じてしまった自分を恥じて、恐る恐る彼の顔を窺う。彼にしたって、私は突然現れた見ず知らずのガキだろう。そのガキにどのくらい経ったか分からないが、結構な時間を費やしてくれた。私は、一度泣き出すと長いのだ。それなのに、呆れられはしたが、怒ることもせず、見捨てることもせず、辛抱強く付き合ってくれた。

謝らなければ！と意気込み、居住まいを正そうとした私の気も知らず、彼は至極真剣にこう言った。

「なあ、『あめだま』って何だ？」

「……………え？」

彼は、ポカンと口を開ける私に構わず、先ほど彼に渡した色とりどりの小さな包みを面白そうに見やっっている。私は、珍獣でも見るような目で、彼を凝視した。

「……………飴、知らないの？」

まさか、と思いつつ、しかし、彼は冗談を言えるようなタイプにも見えない。

「ああ。空から降ってくる『雨』とは違うな。さっき腹が減ったら、とか言っていたから、食い物か？」

「!!!!!!？」

なっなんということだ!! 私は、驚愕に目を見開き、彼を心底憐れむような目つきで固まってしまった。そんな私に気づいた彼が、ムツとしたのが分かったが、そんなことを気にしてはいられなかった。「……………まさか、この世の中に飴を知らない人がいるなんて！」

私の言葉にプライドが傷つけられたのだろうか、彼は、ギロツと私を睨みつける。何だか今日は睨まれてばかりだ。美形が睨むと迫力がある、と誰かが言っていたが、それは本当らしい。私は、多少逃げ腰になる。

「…ファルスには、こんな食い物はない」

不貞腐れたように彼が呟き、ハツとした。そうだ、ここは異世界なのだ。なら、食文化が違って当たり前だろう。私は、そのことをすっかり失念していた。私は、慌ててごめんなさい、と謝り、彼の機嫌を直そうと必死で飴玉のことを説明した。

「えっと、これは、お砂糖を溶かして、固めてできたお菓子なんです(多分)」

へったくそな説明をすると、彼の嫌そうな顔が飛び込んでくる。

「……つまり、砂糖の固まりか？」

「え？うん、いや、まあ、そういうことになるけど……」

「なら、いらん」

私の返事を聞くや否や、彼は、私の手の中に飴玉を押し戻す。

「え、ええー！ちよつちよつと待つてよ。食べてみてくれたっていいのに！」

「俺は、甘いものは嫌いなんだ」

あ、いや、そんな気はしていたが、お礼であげたものを返されるとは思わなかった。今度は、ムツとしたのは私の方で、何としても彼に飴玉を食べさせてやるという、無駄な闘志が湧いてきた。私は、飴玉の入った包みを取り、彼の一瞬の隙を突いて、彼の口の中に飴玉を放り込んだ。

「！？おい、てめえ！何し、や、が……る」

彼は、私の行動に驚き、次いで抗議の声を上げるが、だんだんと尻すぼみになっていく。私は、ジツとそんな彼の様子を観察し、ニマニマと顔が緩んでいくのを止められなかった。彼は、しばらく飴玉を口の中でコロコロと転がして、私から視線を外しながら、美味い、と一言呟いたのだった。

心なしか、頬が赤く染まっていたように見えたのは、私だけの秘密である。

6話

「エルの瞳って飴玉みたい」

じつとこつちを見つめながらそう言った少女は、名を凜といった。少女の印象は、一言で言えば「変」だ。急におかしな行動をし、急におかしな言動をする。男二人から助けてやった後、腰が抜けてへたっているからわざわざ起き上がらせてやろうと手を差し出したのを、少女は、俺が金を欲しがっていると勘違いして、大量の飴玉を差し出してきた。どう考えても思考回路が常人と違う。まあ、飴玉は遠慮なく貰い受けたが……。

今の言葉だつてそうだ。多分、瞳の色が飴玉と似ていると言いたいのだろうが、この目を菓子みたいだと表現されたのは初めてだ。

少女は、俺の貸した上着をグルグルと身体に巻きつけて、眠いのだろう、目を擦りながら、にへらと笑っている。

少女を助けたのはただの気まぐれだった。ちょうど良い洞穴を見つけ、今日はこの中で休もうとした時、急に辺りが騒がしくなった。外に出てみれば、おそらく盗賊である二人組がガキ一人を追い回している場面に遭遇したのだ。自分が寝る場所に死体なんか捨て置かれなくなかった。だから助けた。それを何を勘違いしたのか、少女はニコニコと礼を言う。

お前を助けたのはただの気まぐれだと言ってみてもそれでもあなたがいないければ死んでいたと何度も頭を下げてくる。さっきまで、俺の口に無理矢理飴玉を突っ込んできたとは思えない殊勝ぶりに調子が狂う。そんな少女の名をやっと知ったのは、そのすぐ後だった。

「私は、凜っていいいます。あなたは？」

ニコニコと名を尋ねてくるガキに俺はどうしたものと内心で頭を抱えた。妙なものに懐かれてしまった。気まぐれで助けはしたが、この後の面倒まで見る気はない。だが、この世界に無関係でないかもしれない『漆黒の者』をこのまま放置してしまうのも面倒だ。後々こちらが不利な状況に追い込まれないとも限らないのだから。

「…………ツチ」

思わず舌打ちをするとビクツと身体を震わせオロオロと俺の顔を窺い始めたガキに更に苛立ちが募る。

「そんなナリしても男だろーが。いちいちビクついてんな」

そう吐き捨てるのがキの雰囲気が一変し、突然こっちに向かって突進してきた。

「私は正真正銘の乙女だ……………!!!!!!」

ボスッ

叫びながら俺の腹に頭突きをお見舞いしたガキは、生意気にもギツと俺を睨みつける。

「…………乙女?どこに?」

「お前の目の前だ……………!!!!!!」

「うるさい。わめくな」

ベシツとガキの頭をはたく。あうつと蹲るガキはそれでも諦めずに涙目になりながらも睨んでくるのをやめない。

ファルスでは女の短髪はほとんどいない。特に何か規定がある訳ではなく、女は長髪、と誰もが固定観念のように考える。その意識が俺の中にも根強く浸透していたようだ。些か、驚いた。

「…………女なのか?」

「…………うん」

こっくりとぶすくれつつ頷くガキに苦笑がもれる。

「悪かったな」

そう言ってくしゃりと頭を撫でてやればあっという間にニコツと笑

顔を見せる。こうして絆されてしまうのだろうか、深いため息を吐きつつ、こいつの面倒をみるのはもう決定事項なんだと頭の隅で思う。

「俺は、エルヴィス。エルヴィス・コーウェンだ」

「……………えっえにゅびしゅ？」

「……………エルでいい」

「える？」

「ああ」

舌つたらずに俺の名を満足そうに口にする少女は、くいつと俺の袖を引つ張るとさっきまでの表情を引き締め、少し青ざめた顔で倒れたままの男たちのほうを指差した。

「ねっねえ、える。あっあの人たち、えっと、その」

「何だよ」

言いつらそうにしているのを促してやると、恐る恐る口にする。

「もっもしかして、こっ殺しちゃった、の？」

「ああ。いや、気絶させただけだ」

そう言つとほうつと安堵の息を漏らす少女を訝しく思う。

「お前、あいつらに殺されかけたんだろ？普通そういつ反応はできないんじゃないかねえのか？」

俺の言葉に、少女は少しだけ眉を寄せると真つ直ぐに俺を見つめた。「確かに怖い目にあわされたし、もう2度と関わりたくないけど、この人たちが傷つくのが嬉しいとは思えない…です」

ああ、こいつはきつと争いのない平和な所から来たのだろう。だから、そんな甘いことが言える。今この場で始末しなかったことで後々寝首を掻かれるかもしれないことを微塵も疑っていない。

この国もかつてはそんなお人好しな人間ばかりだった。だが、今は違う。殺し、殺されるのが当たり前になってしまった。

この純粹さを、何色にも染められていない彼女の心を、この荒れ果てた場所にてなお、保つことができるのだろうか。その瞳に宿る

迷いのない光が一度曇ってしまえば、再び立ち上がることは難しい。この、まだ幼い少女にそれに立ち向かっていける強さがあるのだろうか。

「える？」

急に黙りこんだ俺を心配そうに覗き込んでくる、小さな優しい少女を俺はこの手で守れるのだろうか。面倒をみると決めた以上、責任を取らなければならない。覚悟を決めなければいけないのは俺の方か。

「える？大丈夫？具合わるいつわぶっ」

少女の言葉を遮ってぐしゃぐしゃと彼女のフワフワの髪をかき回す。「お前の言う通りだな」

「え？」

「何でもねえ」

きつと、少女はこの世界にいて山ほど辛い思いをするだろう。それでも、生き抜いてもらわなければ困る。少女は、この世界を救うたった一つの手がかりになり得る存在なのだから。

ふつと意識をあげると、まだ眠気に耐えていたのか、小さな身体を抱きこんでうつらうつらしている凜が目に入る。

「おい、そろそろ寝ろ」

声をかけるとハツとした様子で目を必死に擦る。何故そんなに眠るのを拒否するのか。

「やだ。まだエルと話す」

なんだってこんなに懐かれるんだ。はあとため息を吐き、半眼で見やれば、凜はうつと怯む。

「また明日付き合ってやるから、今日はもう寝ろ」

そう言えば、パアツと顔を輝かせて素直にうん！と言う。

フツと笑ってガキつと言つてやればガキじゃないとむくれる。

その行動がガキじゃないなら何がガキなんだ。

「そういう台詞はせめて歳が15・6になってから言っただな」
その瞬間、

「私はもう15歳だ————!!!!!!」

と言う絶叫が洞穴中に響いた。

6話（後書き）

あっさりとエルに倒された2人組は、凜の”冒険七つ道具”の一つのロープでグルグル巻きにして転がされました。

”冒険七つ道具”のあとの六つは？という突っ込みは無しでお願いします。（笑）

7話

「りーん！！！！凛どこだー！！！！…はあ…つくそ！！！！」

「浩樹くん！！少し落ち着きなさい！」

叫びすぎたせいか、喉に違和感がある。イライラと傍にあった木に握り締めた右手を叩きつける。それを見た春さんが見かねて俺を止める。

「…春さん。…でも、凛がつー！」

「大丈夫よ。きつと凛ちゃん、帰ってくるわ。あなたがしつかりしなくてどうするの？帰ってきた凛ちゃんに笑われるわよ？さあ、元氣出しなさい！」

春さんだつて辛いだろうに、いつもの笑顔で俺を励ましてくれる。くそっガキか、俺は。

「ありがとう、春さん」

そう言つと、春さんはふふつと笑う。

「いいのよ。大事な妹だもの。心配なのは分かるわ。凛ちゃんが帰つてきたら、私もお説教仲間に入れてちょうだい？」

「…そうだよな。凛のヤツ、帰ってきたら覚悟しろ！」

「ふふつその意気よ。さあ、少し休憩しましょう。浩樹くんも蒼太くんもずっと森の中を走り通しだったでしょう」

ここは、春さんの言葉に従ったほうがいいだろう。そう判断した俺は、こくりと頷いてから、今だ走り回っている蒼兄に届くように声を張り上げた。

「蒼兄！！少し休憩にするぞ！！！！」

凜がいなくなったことに気付いたのは、凜と同じ部屋で寝ていた春さんだった。朝、起きてみれば隣の布団は既にもぬけの殻だった。うだ。凜は、早起きが得意で、よく早朝の散歩に行ったりするから、春さんもあまり気に留めていなかったらしい。だが、いつまで経っても帰ってこない。さすがに心配になって探しに出たが、見つからない。そんな春さんの様子を起き抜けに見て、不審に思わないわけがない。事情を聞いた俺は、すぐに蒼兄を呼びに行き、そこから凜の大捜索が始まったのだ。

迂闊だった、としか言いようがない。凜があれくらいの探索で諦めるはずなどなかったのだ。再び自分への怒りがフツフツと湧き上がってきたとき、お茶を持った春さんが居間に入ってきた。

「はい、二人とも。疲れたでしょう」

そう言つて、差し出してくれた麦茶をありがたく受け取る。

「やっぱり、捜索願を出したほうがいいんじゃないかしら？」

「捜索願？」

「ええ。このまま闇雲に探しても私たちだけでは力不足だわ」

「……そうだな。あまり警察なんか頼りたくはないけど」

「無駄だ」

「「え？」」

今まで、一言も話さなかった蒼兄が、春さんから受け取った麦茶を険しい表情で眺めながら、強い口調で言い切った。

「無駄つて、どういうことだよ。蒼兄」

「……これを。森の中で見つけた」

「……こっこれつて。どこだよ！どこで見つけた!？」

蒼兄が、ギョツと握り締めていた手のひらをゆっくりと開くと、そこにはいつも凜が首から提げていたロケットがあった。ロケットの中身を確認すれば、やはりそこにあったのは、間宮家ではたった一枚の家族写真だった。

「……あの森には、奥のほうに広場みたいになつて場所がある。

そこにあつた」

「なつ何でそれを早く言わねえんだよ!!!」

淡々と話す蒼兄の態度にムカついた俺は、今だ手元の麦茶に視線を注いでいる蒼兄の胸倉を掴んだ。その拍子に蒼兄の手からするりとコップが離れ、ゴトツと畳の床に落ちた。俺が胸倉を掴んでいることなどたいしたことではない、というように蒼兄は、コップから出た麦茶が畳を這っていくのを見ていただけだった。いや、もしかしたら彼の目には、凜がいなくなった瞬間から何も見えてはいなかったのかもしれない。

「浩樹くん、やめなさい。ケンカしててもしょうがないでしょう」
慌てて俺たちの仲裁に入った春さんは、畳に落ちたコップを拾い上げ、雑巾で零れた麦茶を拭いた。俺は何の反応も見せない蒼兄に舌打ちをして、乱暴に胸倉から手を離れた。

「とにかく、その場所に連れてけよ。何か他にも手がかりがあるかも知れない」

そう言った俺をやっと見た蒼兄は、急に苛立ちを見せ始めた。

「だから、無駄だつて言ってるだろうが!!!」

「んだと!? やつとこつち見たかと思つたらそれかよ!!! 腑抜けてんじゃねえぞ!!! 探してみなきゃ分かんねえだろーが!!!」

「……だつたら勝手にしろ。俺は帰る」
耳に届いた言葉が信じられなかった。

イマコイツハナントイッタ?

立ち去ろうとする蒼兄の腕を掴む。

「いま、なんて、いった?」

「帰るつて言つたんだ」

沸点が一瞬で限界に達した。

「てつてめえ!!! 凜のことが心配じゃねえのか!? 何寝言言つてや

がっつ」

俺の言葉を途中で切るように蒼兄は俺の手を振り払った。

「心配に決まってるんだろーが!!!!!!」

「なら!!何でもつと必死になんねえんだよ!!」

「だからそれが無駄だつて言ってるんだ!!」

「!!!!つっつてつめえええ!!!!!!」

パン!!!!!!

大きく振り上げた俺のこぶしは、蒼兄の顔面にヒットする直前で止まった。その代わり自分の頬が熱くなってヒリヒリするのに気付く。犯人は春さんだった。眉をギュツと眉間に寄せて、俺の頬に振り抜いたであろう右手のひらを左手で押さえていた。

「!?!はるさつ」

「いい加減にしなさい!!この馬鹿ども!!」

「.....」

俺の記憶に間違いがないなら、春さんが大声を出して怒鳴るのは初めてだった。春さんが怒るときはいつも決まって静かだった。その顔に笑顔を貼り付けたまま静かに怒るのだ。その怖さといったら、今の比ではない。

俺は、頬の痛みよりも春さんが怒鳴ったという衝撃に身動きができなかった。蒼兄もどうやら俺と同じことを思ったようで、春さんを凝視したままピクリとも動こうとしない。春さんは、そんな俺たちを見てフウと息を吐くと今度は静かに口を開いた。

「浩樹くんが焦るのも分かるし、蒼太くんが自暴自棄になるのも分かるわ。でもね、そんなことしてたって凜ちゃんも帰ってくるかしら?二人とも少し落ち着きましょう。さあ、座って。大の男が二人も立ってたら部屋が狭く見えるわ」

そう言っつて、最後に春さんはふわりと微笑んだ。

「……で、蒼太くんは何を知っているの？」

俺たちは、春さんの言われたように少し落ち着くことにした。蒼兄も春さんの言葉には素直に従い、ゆつくりと話し出した。

「……今からする話は、信じなくていい。でも、事実です」

「信じなくていいって……どういうことだよ？」

「浩樹くん。黙って聞きましょう」

つい身を乗り出した俺を春さんが諫める。

「春乃さんも浩樹も聞いたことがあるでしょう。『蒼刻の森』の話
を」

「知ってるも何もその御伽噺のせいで凧がどっか行っちゃまったんじやねえか」

「ええ、そうね。凧ちゃんがいなくなったと思われる森、『蒼刻の森』は満月になると遺跡が現れる、というやつね」

「そうです」

「それが何だよ？」

「それは、御伽噺でもなんでもない。正真正銘、現実にかかることだ」

「………な、に言っただよ！そんなわけっ」

「だから、信じなくてもいい、と言っている」

蒼兄はあろうことか、親父がずっと探し続けていた遺跡が実際に存在する、と言う。そんなことが信じられるわけがない。だが、俺よりも現実的な考え方を常としている蒼兄が何故そんなことを言い出すのか。ちらりと春さんのほうを窺うと、春さんは真剣な表情で話の続きを促した。

「そう。それで？その話と凧ちゃんがいなくなったとは何か関係があるの？」

「ええ。凜はきつとその遺跡を見つけた。その証拠に遺跡が出現する場でこれを見つけた」

そう言つて、蒼兄は先程出した凜のロケットを見せる。

「それはっ、ただ単に凜が落としたんじゃない」

「違う。よく見る。鎖の切れ方が不自然だ。これは自然に切れたものじゃない」

言われるがまま、俺はロケットの鎖の切れた部分を凝視する。

「!!! なっ何だよこれ!？」

それは、明らかにおかしかった。俺は、木かなにかに引掛付けて凜が落としたのだらうと思つていた。しかし、そこにあつたのは、焼かれて千切れた痕だった。

「……推測だが、凜が神の力とかいうものを受けた結果だと思う」

「……………うそだろ? な、なんだよ神の力? 意味わかんねえ」

頭が爆発しそうだ。満月の夜に遺跡が現れ、神の力を授かる、なんて信じるほうがバカだと蒼兄は言っていたじゃないか。何で今更。

「……………つまり、凜ちゃんはその遺跡を見つけて、神の力を授かった。

蒼太くんが言いたいのはこういうことね?」

「そうです」

「…なら、どうして凜ちゃんは戻つてこないのかしら? 力を受けた時点で戻つてこれるはずでしょう?」

「ちよっ、ちよっと春さん! こんな話信じるわけ!？」

春さんが当然のように蒼兄の話を肯定しているのに驚く。

「あら、当然でしょ? 今まであなたが私に嘘吐いたことあつたかしら? それに私は、ずっとあなたたちを本当の子どもだと思つてきたわ。もちろん、これからもね。子どもの言葉を信じられないよ。うなら親失格よ。私は、蒼太くんを信じるわ」

「!!!」

俺は、このとき初めて春さんの器を知つた気がした。そして、蒼兄を信じられなかつた俺自信に腹が立った。

「春乃さん、ありがとう」

蒼兄は、少し照れたようにお礼を言う。それに微笑で返す春さんは、最高に綺麗だった。

「……………蒼兄」

「何だ？」

「……………悪かったよ、信じなくて」

急に謝った俺に蒼兄は目を見開く。

「浩樹。…いや、信じられないのも無理はない」

「……………蒼兄、教えてくれよ。凜は、凜はどこ行っちゃったんだよ！」

蒼兄は静かに頷くと、話を元に戻した。

「満月の夜、遺跡が現れ、神に力を授かる。この話には続きがある」

「続き？」

「ああ。神に力を授かった者は、異世界へと送られ、その世界を救う使命を負わされる」

蒼兄は一旦そこで区切ると静かに息を吐いた。

「凜が今いる場所は、異世界だ」

8話

『アザレア』

それが、この世界の名前である。

この世界には太陽の神であるリヒトリア、月の神であるユエラスを長に風、火、水、土の神が存在する。

その下に幾万、幾億の神が存在し、この世界を形づくる。

風の女神であるエレスティアはファルスの地を。火の神であるグレインはギスタの地を。水の神であるディーネはマーリナの地を。土の女神であるアリシアはオルガの地を創造した。

それらの地は、人間の手により国となり、それぞれの神の加護を受けて栄えた。

リヒトリアとユエラスは、昼と夜に分担して神々と地上の者を永とわくに見守る。

しかし、自らが他の神々と関わることはせず、地上のことに干渉することもない。

彼らは、ただ見守るだけである。この世界の終焉の時まで。

「へーじゃあエレンの他にも神様がいるんだ」

「ああ。数え切れないほどにな。全てのものに神は存在していると
言われている」

私が盗賊から襲われてからもつゞ日経った。私はあれからすぐに、エルに自分がエレンと話したことで異世界から来てしまったことを

正直に話した。エルは、私の話を馬鹿にすることもせず、真剣に聞いてくれた。そして、こんな突拍子もないことを信じる、と言ってくれたのだ。

私の人を見る目はあまり信用できないが、エルなら絶対大丈夫だと思っっている。エルはぶっきらぼうだし、口調も乱暴だけど本当は優しくして誠実だ。それは、この3日、四六時中一緒にいれば分かってくる。

私は、もうこれ以上エルに迷惑はかけられないと思った。だから盗賊に襲われた次の日の朝にもう一度お礼を言っつてエルに背を向けたんだけど、「バーカ、行く所なんて無いんだろうが。さっさと付いて来い」という言葉がかけられた。

その時の感情をどう表現すればいいんだろう。とにかく泣きそうなほど嬉しくて（実際に泣いてエルを呆れさせた）この人だけは絶対に信じようと思ったのだ。

そして現在。

エルに付いて行く道すがら、この世界の常識について教えてもらっているところなのだ。

「じゃあ、私のいた国と同じだね。八百万の神様っていつてトイレにも神様がいるっつて言われてるんだよ」

「…随分損な役回りの神だな」

「そうかも……。それにしてもアザレアかあ。私のいた世界にも同じ名前の花があるよ。花言葉は確か、愛されることを知った喜び、だったかな」

「花に詳しいのか？」

「ああ、すみれちゃん…じゃなくて、私のお母さんがお花に関わる仕事してたから自然に覚えたんだ」

「そうか……。そろそろ休憩にするぞ」

エルは度々こうして休憩を入れてくれる。エルはきつと休憩なんて必要としてないだろう。かなりの距離を歩いたというのに汗一つかいていない。だからこの休憩は私のためなのだ。その配慮が嬉しいと思うと同時に足手まといになっている自分が嫌になる。でも、休憩なんていらなんて突っぱねて、更にエルに迷惑がかかることは避けたい。自分の力を過信してはいけないのだ。まずは自分のできることからやって、いつかエルを助けられるようになりたい、と密かに思っていたりする。

休憩場所でエルと私は、早速落ち葉をかき集めた。かき集めた落ち葉に向かって、エルが何がしかの言葉を発するとボウツツと火が点く。最初見たときは驚いたなんてものじゃなかった。

なんと、この世界では魔法が当たり前存在しているのだ！元いた世界に魔法の存在が無いと知って逆にエルに驚かれたのは記憶に新しい。何でもアザレアでは、日常生活は主に魔法頼りのようなのだ。だから、魔法の無い生活など考えられないのだそうだ。まあ、それでもほとんどの人が小さな火を出したりとか、小さな風を起こしたりだとか、少ない水を出したりとかができるくらいで、結構原始的な生活を送っているらしい。

魔法を専門的に操ることを生業としている人も中にはいるみたいで、そういう人たちは魔術師と呼ばれているみたい。魔術師の人たちは、単純な魔法以外にも治癒の魔法だったり、獣を攻撃できるようなすごい魔法も使えるんだそう。

エルは、ただの剣士だそうでそんな魔法は使えないんだって。うーん残念。

エルは、携帯食として持っていた干し肉を軽く火で炙^{あぶ}って私に渡してくれる。何の肉かは聞きたくないが割といける。

エルも同じように干し肉を齧りつつ、気を抜いてる私に注意するの

を忘れない。

「凜。ちゃんとフード被つとけって言うてんだろ」

「！あ、ヤバイヤバイ」

慌てて、あの時から借りっぱなしの上着のフードを被りなおす。そんな私をエルは半眼で見やる。

「うっごめんさい」

「…気をつける。俺がいるからいつでもお前を助けてやれるとは限んねえぞ」

「はい」

エルに付いて行くと決めるとき、一番最初に注意されたのがコレだった。どうやら私の黒い髪と瞳はこの世界ではとても珍しいのだそう。

この世界ではまだまだ人身売買などが普通に行われていて、もしエルが現れなかったら、私は今頃盗賊の2人組の手によってどこかに売り飛ばされていたらしい。

エルに助けて貰えなかったことを考えるとブルリと身体が震えた。もう一生エルには頭が上がりないだろう。

「まだ森を抜けてねえからいいが、『漆黒の者』はこの世界、特にファルスにとっては伝説級存在だ。用心に越したことはない」

「『漆黒の者』かあ。ちつとも珍しくないんだけどな、こんなの」
私は、自分の髪を一房つまんでみせる。

『漆黒の者』とは私のような黒髪黒目の人のことを指すらしい。指名手配犯にでもなったみたいだ。

「エルの方が綺麗なのにな」

「まあ、俺の容姿もある意味では有名だけどな。お前程じゃない」
「有名って、どうして？」

「ファルス国の初代王と同じ色なんだよ。初代王は、名君だって話

だからな。この色を持って生まれた者はやがて大きなことを成すだろうと伝えられている」

「へー、じゃあ将来有望だね！エル！」

勢い込んでそう言うと、エルは少し眉を寄せる。

「将来有望……か。もうそんな歳でもねえけどな」

「え！？…エ、エルっていくつ？」

てつきり、20歳くらいだと思っていたのだがもしかして違うのだろうか。もっもしかして30代とか？

あまり考えたくないが、それなら私のことを子ども扱いした罪は重い！自分だつて十分童顔ではないか！

と、内心でエルに対して憤っていた私だったがあっさり謎は解けた。

「あ？22歳だけど……何だよその目？」

じとつと睨みつけていたのがばれてしまった。慌てて表情を戻す。

「なんだ、22歳ってまだ若いじゃん。将来有望だよ」

私は、ホッと息を吐いた。良かった、こんな容姿で30代なんて乙女の夢を壊すにも程があるところだったよ。

しかしエルは、私の若い、という言葉にピクリと反応する。

「お前の国がどうかは知らないが、ここでは成人が16歳。成人してすぐ自分の就く職業を決める。職業に就いた時点で、もう自分の将来は決まったも同然だ。俺は、ただの傭兵にすぎないからな。国に雇われてる騎士なんかとはそもそも身分が違う」

だから、将来有望という言葉は自分には当てはまらない、とエルは言った。

ふーん、そういうものなのか。身分とかいうのはよく分からない。

まあ、身分の無い所で生まれたんだからそれも仕方ないか。

話は、これで終わりだ、というようにエルは魔法で水を出して火を消した後、立ち上がった。

「そろそろ、行くぞ。日が暮れる前までに距離を稼ぎたいからな」

「うん」

私もエルに倣って立ち上がった。その時、

「伏せろ！！！！」

というエルの声が聞こえたと同時に腕を引つ張られて顔から地面に突っ伏す羽目になった。

ただでさえ低い鼻がこれ以上引つ込んだらどうしてくれる！！という抗議は、私の背後で起きた大きな轟音と甘く柔らかな声に遮られることになった。

「やっと、見つけましたよ。エルヴィス・コーウェン」

9話

私だって女の子だ。

いつの日か、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれる、なんてかなりしょっぱいことを願った時期がある。

将来の夢は、王子様とお城で暮らすことです！

なんて作文を書いた日には、約1年あまりに亘^{わた}って浩兄にからかわれ続けた。もちろん、報復のために《イニシャルG》を彼の靴の中に入れてやったことも今となっては良い思い出だ。（最終的に浩兄は半泣きになって謝ってきた）そんなこんなで私の夢は脆くも崩れ去ったわけなのだが、これは一体どうしたことだろう。

まるで太陽の光を集めて具現化したのではないかと思われるほど見事な金髪。

抜けるような青空から一番綺麗なところだけ搾り取ったかのような碧眼。

金の髪が風に靡く姿を見ようものなら、その麗しすぎるくらいに瞳に見つめられようものなら、その甘いマスクで愛の言葉を囁かれようものなら、どんなお嬢様方だってノックアウト間違い無し！

私は、間違っていた。エルが王子様？ハンツ鼻で笑わせる！

この人だ。この人こそ本物だ。完璧だ。奇跡だ。神秘だ。いや、もう神かも。

彼こそが理想の

「王子様だ！……！！！」

「……………は？」
ポカんと私を見つめる2対の瞳。

あ！ヤベツ。今って所謂修羅場ってヤツなんだってことをすっかり忘れてマイワールドに入ってしまった。いや、でもしょうがないよ、うん。だって美形は世界の宝だもの！！

……………ゴホン。まあ、そんなこんなで私とエルは、王子様と向かい合っている。私たちが休憩を切り上げようとした時に彼がいきなり現れたのだ。物騒な魔法付きで。

もし、後一瞬エルが私の手を引つ張って地面に倒すのが遅かったら、今頃私はまる焦げだった。

……………随分と好戦的な王子様だ。そんなギャップもたまらない。なんて思えるわけないし！！死ぬところだったんだから！いくら王子様であろうともこの人は第一級の危険人物だ！！

というわけで、彼は敵に違いない。私は、彼になるべく見えないようにとエルの後ろに隠れた。

「……………今更隠れても意味ねえだろーが」
呆れた声が頭上から降ってくる。っていうか王子様って何だよ、とブツブツ言っているエルは無視である。

「ねえ、そんなことより、あの人エルの知り合い？なんかエルのこと知ってる風だけど」

エルの服をクイツと引つ張りつつ気になっていたことを尋ねてみる。
「あ？……………さあな」
む？なんか答えを濁されたような気がする。この人と何かあったのだろうか。

すると、今まで私の言葉にポカンとしていた王子様がやっと我に返ったように綺麗な笑みを浮かべた。
うわっなんという破壊力！！鼻の奥が熱くなって慌てて鼻を押さえ

る。こつこの人は直視しては危険だ！

「ひどい言い草ですね。まあ、僕はあなたが居た頃はまだひよっこだったから、覚えていらっしやらないのも無理はありませんが」

「……何の話か分からねえな」

「フツツしらはっくれているのは、彼に知られたくないからですか？」

王子様は私のほうをチラリと見やる。

私はエルの言いつけ通りきつちりとフードを目深に被っている。だから「彼」という言葉に必要以上に反応する必要はないのだ。…くそう。

「……………」

「だんまりですか。まあ、いいでしょう。では、初対面ということでご自己紹介でもしましょうか。僕の名前はルイス・ベイル。宮廷魔術師ジュードの弟子をしています。以後お見知りおきを」
そう言うと彼は優雅に一礼する。

「ところであなたの名前はなんと言うんですか？」

ニコニコといきなり名前を聞かれた私は、反射的に口を開いた。

「え！？えつと、私は…」

「バカか、お前は。敵に易々と情報与えんな」

と、エルに頭をはたかれる。しっしまった。つい、あの笑顔につられて…。

「お前はもう少し警戒心を持って」

「はい」

言葉少なに怒られると逆にキツイ。私は、しょんぼりと項垂れる。

「で？お前の目的は何だ？」

エルは、私に対して放った声より幾分低音で王子様に詰問する。

「随分と彼のことを大事にしているみたいですね。あなたが他人に執着するところを見るなんて、初めてですよ」

しゅうちやく？エルが？

エルに対して、にしては似つかわしくない言葉が出てきて少し戸惑う。

「質問に答える」

「そんなに頑なに彼を守ろうとするなんて…。彼は一体何者です？」

「…ツチ。用が無いんなら、俺たちはこのまま行かせてもらおう」

そう言うところエルは私の手を引き、その場から立ち去ろうとした。

ドオンッ！！！！！！！！

耳を劈くような轟音と私のすぐ隣にあった巨大な岩が粉碎するのは同時だった。

サーッと血の気が引いていくのが分かる。無意識のうちにエルの腕に縋り付く。エルは、顔だけをこちらに向けて大丈夫だ、と言ってくれた。それだけで本当に大丈夫だと思えるのだからエルは凄い。

「行かせるわけないでしょう。師匠の命は絶対ですからね」

王子様は、いつの間にか持っていた杖らしき物をこちらに向けて不適に笑っていた。

「師匠の命、ね。宮廷魔術師が俺に何の用だ」

「さあ、僕は詳しいことは聞いていませんから、師匠に聞いてください」

「要は使い走りか」

エルの言葉に自尊心を傷つけられたのだろうか。王子様の顔から笑みが消える。

「あなたが大人しく僕に従ってくれたら、手荒な真似はしませんよ」

「笑わせるな。お前如きに従わせられるほど落ちぶれちゃいねえよ」

「僕如き、ですか。その言葉後悔しても遅いですよ。僕はもうあの頃とは違う。それに、彼を守りながら戦うことができるんですか？」

「人の心配してねえで自分の心配したらどうだ？お前がこいつに攻

10話（前書き）

少しだけ流血表現があります。多分大丈夫だと思いますが、苦手な方は注意してください。

.....
どうやら違つらしい。

「う、うう。え、えーれ？いや違つ。えれ、エリザベス」

.....。

なわけは無い。

参つた。本当にどうしよう。この時ほど自分の頭の悪さを嘆いたことは無い。

どうしよう、どうしよう、何とかしなきゃと思うけど焦りばかりが募つて余計に頭が真っ白になっていく。

エルは、まだ王子様とガキンツやら、ズドドドツとかいう音を響かせながら戦っている。

なんて役立たずなのだ、私は。エルを助けたいのに何もできない。自分が戦えないということがこんなにもどかしいなんて思わなかった。どうか、無事でいてと願うことしか今の私にはできなかった。

エルと王子様は、どうやら互角のようでなかなか勝敗が決まらない。しかし、均衡が崩れたのは一瞬だった。

一際大きな金属音を響かせると、2人は間に一定の距離を置いて離れた。

エルをやっと視界に入れることができた私は、安堵の息をつこうと

した。でも、エルの血に濡れた左腕を見て言葉を失う。本来エルの剣は、両手持ちなのだが、エルはそれを右腕一本で支えていた。エルは肩で息をしており、とても苦しそうだ。

一方の王子様は余裕の表情で、エルの様子に満足げに微笑んでいる。

エルのこんな様子は初めてで、居てもたっても居られなくなった私は、エルの元へと走り寄る。

でもそれを止めたのは、エルだった。

「来るな！！！！」

ビリビリツと一瞬全身が竦んだが、それくらいで諦める私ではない。

「いやだ！！！」

と叫び返して、一気にエルとの距離を縮める。

エルの傍に辿り着くと、ものすごい目で睨まれた。

「来るなって言ってたんだ。殺されてえのか！？」

そんな風に凄んだって無駄である。私は、躊躇無く着ていた上着を引き裂くとエルの左腕に巻きつけた。とにかく出血を止めなければ！！と思つての行動だったのだが、エルは意外に思つたらしい。一瞬目を見開いて私を見たかと思うと、徐に私の肩を引き寄せた。

「え、える！？」

私の動揺をエルはあっさりと無視し、王子様から目を離さずに小声で話し始める。

「いいか、よく聞け。魔術師は、俺が引き付ける。だから、お前はこの場所から森の出口まで真っ直ぐに走れ。道なりに行けば、お前の足でも1日掛からずに着けるだろう」

その言葉にカアツと怒りが湧き上がる。

「エルを置いて逃げられるわけないよ!!」

そんな私を宥める様にエルは一度私の肩を擦る。

「最後まで聞け。いいか、森の出口に着いたら近くに一軒の小屋がある。そこに行つてイルキデア・サニンという男を訪ねろ。俺は負けるつもりはねえが、念のためそいつとここに戻つてきてくれると助かる」

エルの助かる、という言葉に心が揺れる。エルは、私が何もできなくて憤つていたことを見抜いていたのだろう。だから、私が気に病むことが無いようにこんなことを言うのだ。それが分かるから余計に辛い。

「…いやだよ、エル。私、エルの傍にいたい」

泣くのを必死で堪えながら、エルの服を握り締める。このまま離れてしまつたら、もう会えないかもしれない。そんなのは嫌だ。

エルの手が肩から頭へと移動し、今までで一番優しい仕草で撫でてくれる。

「凜。頼む。お前にしか頼めないんだ」

と、じつと見つめられたら、もうNOなんて言えない。

しづしづ頷くと、エルは目を細めて笑つてくれた。その後、エルはぐいっと私の腕を引っ張ると、一瞬だけ私のことを抱きしめた。そして、すぐに体を離すと「行け!!!」と言つて私の背中を押す。

私は、一度だけエルの方を振り向いてから、駆け出した。

獣道のように見えるが、実はうつすらと道らしきものがある。森を歩き始めた最初の頃はどこが道なのか全然分からなかったが、しばらく歩いていると、確かに道であるらしきところにはあまり木が密集していない。少し広い空間になつていた休憩場所から一気に狭くなる森の出口へと続く道へ、私は全力で走る。

もう後ろは振り向かない。必ず助けを呼んで、エルにまた会うんだと自分に誓う。

あと一歩、あと一歩で狭い道に入る、という所で私と道は大きな壁によって隔たれた。

「逃がさない、と言ったでしょう」

後ろから聞こえた声に愕然とする。

逃げ道を塞がれた！まさか、こんな魔法まで使えるなんて！目の前の壁は地面の土が大きく盛り上がってできたもので3m近くはある。とても私なんかの背では飛び越すことは不可能だ。よじ登ろうと思っても土とは思えないほどツルツルで、手と足を引っ掛ける場所なんて無い。

「クソツ！そいつには手を出すな！お前の狙いは俺だろうが！！」

「彼に興味があるんですよ。あなたをそこまで動揺させることができる存在なんて他にいませんからね」

「そいつはただのガキだ！てめえの興味なんか引けやしねえよ」

「それは、あなたが決めることじゃない。僕が決めることだ」

エルは優しい。こんな時なのに、自分の方が大変な状態なのに、私を必死で庇ってくれる。エルが私を守ってくれるなら、私はエルを守りたい。今それができるのは私なんだから、絶対にエルを死なせたりしないんだから！！

私は、土の壁に両手の爪を立てて、懸命に登ろうとする。でも、爪に全体重をかけたせいで何枚かの爪が折れ、剥がれた。痛みなんか感じなかった。ただ必死で壁に向かって手を伸ばす。

すると、再び後ろからエルと対峙しているであろう王子様の呆れたような、憐れみのような声がかかる。

「あなたは、諦めるといふ言葉を知らないのですか？」

「うるさい！諦めるくらいなら、死んだほうがマシ……！」

「……そうですか。なら、死んでみる、というのはどうですか？」

「凜！……！！……！！……！！」

「え？」

彼がポツリと呟いた不穏な言葉に重なって、エルが焦燥と悲痛が合わさったような声で私の名前を叫ぶ。

私は、反射的に振り向いた。

それからのことは、まるでスローモーションのように私の目に焼きついた。

目の前に迫る鋭く尖った大きな木の根。

急に視界がぶれて、地面に倒れこんだ。

地面に、私にかかる影。

ゆっくりと顔を上げると、エルが私を庇うように背を向けて立っていた。

える、と名前を呼んだけど返事が無い。

ポタツと顔に雫が落ちた。雨？いや、雨なんか降ってない。

顔に当たった手を外し、雫の正体を確かめる。

赤い。……どうして？

ぐらり、と目の前のエルが揺れた。

そして、彼は私の方へゆっくりと倒れこんだ。

「え、る？」

「……っがはっ」

震える声で呼びかけると、エルは苦しそうに血の塊を吐いた。

よく見ると、エルのお腹辺りに私に迫ってきていたと思われる木の根が突き刺さっていた。

「……や、だ。な、んで？どうして？なんで、かばったの？ねえ、える、やだ」

「……………くっ、はあ……………」

全身が震える。ボタボタと涙が溢れた。必死に血がこれ以上出ないように傷を押さえる。

「うっえ、る。える、える、やだよっやだ。おねがい、へんじして……！」

私の声に反応したのか、するりとエルの手が私の頬を撫でた。

「ば、か、やる。ハアハアツ…俺、のこと、はいい、から、さっさと逃げ、るゲホッ……！」

「なんで、なんでそんなこと言うの！？なんで、エルは、じぶんのこと、どうでもいいみたいに言うの！？やだよ、死んじゃやだ！いつしよに、一緒にいてくれなかったらやだあ」

バラボロと涙を零す私を、エルはこんな時だというのにおかしそうに笑った。

「フツ……………ご、の、泣き、虫……………」

そうして、エルは静かに瞼を閉じた。

11話

「える！！！」

大きな声で呼びかけても、エルは今度こそ返事をしてくれることは無かった。

ピクリとも動かない身体に、どんどん赤みを消していく顔色に、私は発狂しそうになった。

「クスクス、やはり庇いましたか。馬鹿な男です」

この場にそぐわない穏やかな声が聞こえた。顔を上げれば、王子様が私を見下ろしている。

「……かじゃない」

「？何ですか？」

「えるは、ばかじゃない！！！！」

「！っアハハハハ！！！！」

ギツと睨みつけると、王子様は耐え切れない、と言うように笑う。

「なにが、なにがおかしいの！！！！？」

「フツツ彼が馬鹿じゃないというのなら、馬鹿は君か」

急に低くなった声音と「君」という呼び方の変わりようにピクツと肩を竦める。でも、ここで怯んでなんかいられない。必死で強がる。「……どういうこと？」

「分かりませんか？君が居なければ、彼がこんなにも苦しむことは無かったですよ。君は気付いていなかったみたいですが、あの戦いの最中、僕は何度も君に攻撃を仕掛けようとしていたんですよ」

「……！！！！」
「まあ、その度に彼に邪魔されてしまいました。しかし、君のことを気にして彼は戦いに集中できなかった。その結果、本来なら負わなくていいはずの怪我を負った」

その言葉にエルの左腕を見る。……わたしの、せい、だったの？

「そして、今度は君の命を救うために自らの死を選んだ」
もう、これ以上、ききたくない。

彼は、そんな私に気付いていない筈なのに、態とゆっくり言葉を紡ぐ。

「エルヴィス・コーウェンは、君のせいで、命を落とす」
彼はそう、甘く囁いた。

その瞬間、私の意識は過去の記憶へと引きずられた。

おおきなて。このてには、かなわない。

にげなきや。でも、にげられない。

からだがいたい。ぜんしんにあるタバコをおしつけられたあとをかぞえる。

おなかすいた。でも、なにもたべるものなんてない。

たすけて。だれか、たすけて。しにたくない。しにたくない！！

『ハハハハハ！！！！お前が殺した！！お前が莉玖りくを身代わりにしたんだ！！！！！！』

ちがう、ちがうよ。だって、わたしは、りくを、まもりたくて……。なのに、

『お前のせいだ！！お前が殺した！クククツアハハハハハハ！！！！！！』

わたし、わたしが、ころしたの？わたしのせいで、りく、しんだの？

わたし、わたしが、えるをころすの？

お前が気にすることじゃない。俺が勝手にしたことだ。

バーカ。さっさと付いて来い。

凜。頼む。お前にしか頼めないんだ。

フツ……この、泣き、虫っ

嫌だ！！嫌だ嫌だ嫌だ！！！！

エルは、絶対に死なせない！！

誓ったじゃないか！！エルを守るって！今度こそ大事な人を失うような馬鹿な真似はしないって！！自分にできる精一杯をやるうって！！！！

エレン！！！！お願い！！私に、力を貸して！！！！

わたくし私の名を呼んで。私の名は

「エレスティア！！！！！！！！」

今のは一体何だ！？

僕は、僕の言葉で放心状態になった子どもから、エルヴィス・コーウエンを奪い取るうとした。

なのに、彼は急にしっかりとした声でエレスティアの名を叫んだのだ。

その瞬間彼らの身体を、渦巻く風が包み込んだ。僕は慌てて介入の魔法を行使しようとしたが、時すでに遅く、風に舞い上げられた木の葉を残して彼らは忽然と姿を消した。

どういうことだ？彼は、魔法が使えたのか？しかもアレは上級魔術師でも使うことが困難な移動魔法。

しかし、魔法が使えるのなら、エルヴィスがあんなにも彼を守ろうとした理由は何だ？

何かがあるはずだ。僕が見落としている何か。落ち着け、よく考えろ。

そういえば、彼はサイズの合わない服を着ていた。かなり大きなもので幾重にも袖を捲り上げていたのでよく覚えている。多分あれはエルヴィスのものだろう。そして、彼はずっとフードを目深に被って…。

フード？

！！！！！

そういうことか。急に行使された魔法のインパクトの方が強く、気付くのが遅れた。

彼は、ずっとフードを被っていた。だが、一瞬だけそれが外れた。彼自身の魔法によって巻き上げられた風が彼のフードを脱がしたのだ。

彼は、『漆黒の者』だ。

「フツアハハハハ！！！！『漆黒の者』が現れた！！どつりで、あのエルヴィスが大事にしてるはずだ！！……さて、神話の通りになるのか、見せてもらおうじゃないか」

僕は、一頻り笑った後、師匠にこの件について報告するためにその場を去った。

エルヴィスの傷は致命傷にはならない。生け捕りにするために、急所は外したのだ。だから、また遠くないうちに会えるだろう。

その時は、今度こそゆっくり、黒の色を持つ彼と話してみたい。

12話

ピチチチッ

どこからか鳥の鳴き声が聞こえる。俺は、死んだんじゃないのか？
ゆっくりと瞼を押し上げ、身体を起こす。

「ここは…？」

どう見てもここは、ルイスと対峙した場所ではなかった。森の中なのは同じだろうが。

ふ、と自分の身体の異変に気付く。あれほどの怪我を負っていたにも関わらず、どこにも傷口が無かった。

「…一体？」

俺は、傷のあったであろう場所を撫でると、ハッと一番大事なことを思い出した。凜のことだ。

俺がここに居る、ということは多分ルイスに囚われたのだろう。ヤツは俺を生け捕りにしたかっただはずだ。傷が無いのは、ヤツが治癒魔法を使ったとしたら辻褄が合う。

でもそうしたら、凜はどうなっている？あいつが1人であるの状況を何とかできたとは思えない。ルイスのことだ。もう、凜が『漆黒の者』であることは気付いただろう。もし、そうなら俺と共に捕らえられているはずだ。だが、そうじゃなかったら？もし、ルイスが凜を『漆黒の者』だと気付かずに殺していたら…？

そこまで考えた俺は、一気に血の気が引いた。そして、何故かは分からないが、見張りが付いていないのを良い事に、そのままあの場所へと駆け出そうとした。の、だが、

「…うーん」

という、何とも気の抜けるような声が足元から聞こえ、俺はピタリと動きを止めた。

そして、視線を下に移すと、ただでさえ小さい凧が更に身体を縮こませてスヤスヤと寝入っていた。

「…凧？」

無意識にしゃがみこみ、凧の髪を掬う。

すると、凧は少し身じろぎをして俺のほうに手を伸ばすと、俺の手をぎゅっと握ってきた。

温かい。ああ、凧はここに居て、生きている。

それだけで今まで自分の胸の中で渦巻いていた、ドロドロとした感情が綺麗に解^{ほど}けていくのを感じた。

「…ん、える」

俺の名を呟いて、ふにやり、と笑みらしきものを浮かべ、凧は眠り続ける。

それを見た時、何故か鼓動が大きく跳ねた。

「…？」

だがそれは一度だけのことだったため、特に何かを思うことも無かった。

俺の手を握り締める凧の手は、爪が剥がれたり、折れたりして何とも痛ましかった。顔にかかった髪をどけてやると、目が赤く腫れている。

そういえば、随分と泣かせてしまったことに思い当たる。

あんな風に傷つけるつもりは無かった。ただ、凧に危険が及ばないようにしたかった。

結果的に俺は、凜を守ってやることはできず、凜の身体も心も傷つけた。

本当ならもう俺は凜の傍に居る資格は無いだろう。だが、あの時気を失う前に凜が言った言葉が耳に焼き付いている。

なんで、なんでそんなこと言うの！？なんで、エルは、じぶんのこと、どうでもいいみたいに言うの！？やだよ、死んじゃやだ！
いっしょに、一緒にいてくれなかったらやだあ

顔をクシャクシャにして泣きながら訴えてきた凜の姿を思い出すと、何故か傍に居てやらないといけないような気になる。

あんな風に全身で感情を表現する人間を見たのは初めてだ。凜は、嬉しいときは笑い、悔しいときは怒り、悲しいときは泣く。それが普通にできる人間は少ない。皆、自分の気持ちを曝け出すのが怖いのだ。だから、凜のように喜怒哀楽を真っ直ぐにぶつけてこられると戸惑う。子どものような、と言ってしまうえばそれまでだが、俺は嬉しかったのだ。

あの時、死ぬな、と、一緒にいて、と言われた時、俺は嬉しかった。

俺は、剣の腕には割と自信がある。だから、窮地に立たされる時は必ず自分を囷にして、仲間を逃がすのが普通だ。そう、それが普通なのだ。だが、凜はそれを良しとはしなかった。エルを置いて逃げなんてできない！、ときっぱり言い切った。最初は、馬鹿なこと言うな、と思っただが必死に涙をこらえる様子を見て分かった。

ああ、こいつは俺のことを守ろうとしているのか。

それが、分かると、どうしようもなく胸が温かくなった。

違う世界に突然現れて、訳が分からないまま命が危険に晒されたのだから、自分のことでもいいになっても良かったのだ。むしろそ

れが当たり前で、他人のことなんか放つとけば良い。自分を庇護する俺がいるなら、俺を利用すれば良い。でも凧はそれをしない。俺がやれと言っても絶対に頷くことはしないだろう。

それを思うと、無性に凧に優しくしてやりたくなった。俺は、一瞬だけ凧を抱きしめた。

守られる、ということがこんなにも心地の良いものだとは思わなかった。

「ん……ん……」

凧の眉間に皺が寄っている。そろそろ、起きるか。

思った通り、凧は睫を震わせるとゆっくりと瞼を開いた。

凧は、何度かパチパチと瞬きした後、俺と繋がっている自分の手を見てガバツと身を起こした。

そして、俺の姿を認めた途端、大きな瞳に涙が溜まり始める。

「え、る？」

「どこか、痛いところ無いか？」

そう尋ねると、凧は慌てて自分の身体を見やる。

「うん！どこも痛くない」

「…嘘付け。指、爪剥がれてるぞ」

凧は今気付いたというように、パツと俺の手から自分のそれを抜き取って後ろに隠した。

「え、えへへ。な、何でもないよ」

あくまでも白を切る凧にため息が出そうになる。

「…いいから、手出せ」

そう言つてやると、おずおずと手を差し出す。俺は、持っていた包帯代わりの布を凧の指一本一本に巻きつけてやった。作業を終えても手を離さない俺を不審に感じたのか、凧は少しだけ手を引く仕草をする。

「エル？」

「……悪かったな、助けてやれなくて」

「！！ううん。助けてもらったよ！！今回のことだけじゃなくて、エルには、ずっと、助けてもらった」

俺の急な謝罪に、凜はブンブンと首を振る。すると、顔を俯けて今度は凜がごめんなさい、と呟く。

「？お前が謝る必要は無いだろ。あれは、俺が…」

「あるよ！！…謝る必要、あるよ」

「凜？」

凜は少し逡巡した後、ゆっくりと口を開く。

「わ、たし、知らなかったの。あの人が、私のこと攻撃しようとしてたこと」

それを聞いた俺は、思わず舌打ちをしそうになる。あの野郎、余計なこと凜に吹き込みやがって。

「凜。それは、お前のせいじゃないだろ」

「私のせいだよ！！だって、私が居なかったら、エル、あんな人に負けなかったんでしょう！？私が居たから、あんな大怪我、して、える、しっ死んじゃうかと、思っ…だから、わ、たしのせいで…」

「違う！！！！」

大声を出すと、話の途中から溢れた涙をぐしぐしと拭っていた凜はビクリと身体を震わせた。怯えさせてしまったことに慌てて謝罪する。

「…いや、悪い。驚かせたな」

「ううん」

「…そうじゃねえよ。お前は悪くない。悪いのは俺だ。よく考えたら、あいつと戦い始める前にお前をどこかに隠してりゃ良かったんだよ。つい、血が上ってお前のこと考えてやれなかった。…悪かった」

そう言うと、急に凜が怒り始めた。

「！！エルのせいなわけ無いでしょ！！私がちゃんとしてれば良かったのに、何もできなかつた！もつと力があつたら私だって戦えたのに！！」

今度はそれを聞いた俺が怒る番だった。

「はあ！？馬鹿か、お前は！！お前が戦う！？無理に決まつてるだろーが！！」

凜も負けじと応戦する。

「無理かどうかはやってみないと分からないよ！！兄貴たちと同じこと言わないで！！」

「お前の兄貴なんか知るか！！！！」

「エルのバカ！！！！」

「お前の方が馬鹿だろうが！！！！何考えてんだ！！」

「うるさい！！エルだっていつも自分のことそっちのけの癖に！私のこと言えないよ！！」

「！俺はいいんだよ！！男なんだからどうにでもなる！！」

「男とか女とか関係ないでしょ！！だったら、最初私のこと男と間違えたんだからこれからもそう思えばいいじゃん！！！！」

「今更、そんなこと思えるわけねえだろーが！！！！いい加減にしろ、このチンチクリン！！！！」

「ちっ！？いい加減にしろはこっちの台詞だ！！！！この根暗男！！！！」

「ねっ！？なんだと！？」

「なんだよ！？」

「……………」
額をつき合わせて俺と凜は睨み合う。

そして、どちらからともなく噴出したのだった。

「く、くく」

「ふ、ふふ」

「あはははは！！」

暫くの間俺たちは笑っていた。こんなに大声を出して笑ったのは久しぶりだ。

「はー、ねえエル」

ごろんとその場に寝転んで凜が俺を呼ぶ。

「ん？」

俺もそれに倣って寝転がった。空は雲ひとつ無い青空だった。

「生きてるよね？」

「……ああ。生きてる」

「…よかったあ」

そう言つて、凜はまた大粒の涙を零した。

12話(後書き)

初めてのケンカ。

13話

コツコツコツ

石畳の回廊に足音が響く。ここは昼間だというのに一筋の光も通さない。魔法で作られたランプがゆらゆらと揺らめいているだけだ。僕は、通いなれた目的地を目指して軽い足取りで歩を進める。

ここは王宮の最奥であり、このワンフロア全体が宮廷魔術師の長の住処ともなっている。

この場所に足を踏み入れるものは、僕とファルス国38代国王ガナシュ・アルマーナ・ファルス。

そして、この領域の主である僕の師匠、ジュード・バックその人だけである。

目的地である扉の前に立った僕は、一つ呼吸を置いた。何度来てもここに来た際の緊張感はなくなることは無い。僕は二度扉を叩いてから口を開いた。

「ルイス・ベイル、ただいま戻りました」

扉越しに帰還の挨拶を簡単にすると、すぐに中から声がかかる。

「入れ」

「はい。失礼いたします」

扉を開けると、回廊と同じくらい薄暗い部屋の中、椅子に腰掛けた師匠が僕を迎えてくれた。

師匠は全身を黒のローブで隠している。僕でさえめったに師匠のお顔を拝見することは無い。素性も明らかにされておらず、王の一任

で宮廷魔術師の頂点に君臨されておられるのだ。ただ、その魔法の才能はとても素晴らしく、師匠以上の魔術師を今だ見たことが無い。たとえどんな素性の方であろうともそんな方を師匠に持てる僕は最高に幸せな身分だ。

「首尾は？」

「はっ申し訳ございません！エルヴィス・コーウエンを捕らえることとはなりませんでした」

「…何だと？」

分かりにくいのが、師匠の声が若干低くなった。背中に冷や汗が伝う。師匠は大きな才能を持つゆえだろうが、時々目下のものに酷く冷酷になる。たとえ弟子であったとしても師匠の意に沿わない行動を取ればいつ何をされるのか分からない。

僕は、なるべく師匠の怒りに触れないように慎重に言葉を選ぶ。

「申し訳ございません！ですが、エルヴィス・コーウエンには深手を負わせました。あれほどの傷ですから暫くはまともに動けないでしょう」

「…深手を負わせたにも関わらず捕らえられなかったというのか？」

「それは…。予測不能な事態が起こりまして…」

「言いたいことがあるならさっさと見え」

「エルヴィス・コーウエンと共に居た少年が、後一步というところで移動魔法を使ったのです」

「…何だと？移動魔法はかなり高位の魔術師しか使えない。ルイス、お前でも無理だ」

「はっその通りでございます。ですが彼は『漆黒の者』なのです」

「…！！…そっそれは本当か！？」

ガターン！！と椅子を倒して立ち上がった師匠が僕に詰め寄る。

師匠が取り乱す姿を見たのは初めてだった。

「はっ間違っています」
「……………」

絶句したように立ち尽くす師匠に僕はチャンスとばかりに畳み掛ける。

「師匠！もう一度僕にチャンスを頂けませんか？今度こそ必ずやエールヴィスも『漆黒の者』も捕らえてみせます！！」

「……………」
それでも何の反応も見せない師匠に焦れる。

「師匠！お願いいたします。僕は『漆黒の者』の顔を見ました。他の者に任せるより僕が適任かと思われ……………！！」

必死で師匠に捲くし立てていた僕の身体が急にふわりと浮いた。

「！！しっ師匠お待ちください……………！！」

そして、僕の懇願を聞かず、師匠は無造作に振り上げた手を静かに下ろした。ただそれだけの動作で浮いていた身体がぐんつと引つ張られ背中から壁に叩きつけられた。

「グハツ！！……………うっ……………！！」

その時初めて、目の前に迫る師匠の目が憎い敵を見るように僕のことを見ていることに気付いた。

「この役立たずが。少しは使えるかと思ったが…。まあいい。替えならいくらかもある。…死ね」

「う、うわああああああ！！！！」

「じゃあ、ルイスの野郎に捕まったわけじゃないんだな？」

「うん。エレンが助けてくれたんだよ！」

私とエルは、なんとか王子様の魔の手から逃れた。

エレンの名前を間違えずに言えた後、見知らぬ場所へと移動したのだ。エルの傷はどうしてなのか分からなかったが綺麗さっぱり治っていた。きつとエレンがやってくれたんだと私は思っている。エルの傷が消えたことに安堵した私は、そのまま眠りこけてしまった。目が覚めたらエルがすごい優しい顔で見てたのには驚いたけど、エルが無事で本当に良かった。まあ、その後ケンカしてしまったのはご愛敬だ。

そして、私たちは森の出口目指して再出発したのだった。

「エレスティアが、な。まあ確かにエレスティアに拠るところが大きいだろうが、俺はお前のおかげだと思うぞ」

「え！？なっ何言ってるの！？」

急に褒めるなんてエルらしくない。というかさつきからエルが優しいのだ。いや、彼は最初から優しくかったが、なんとなくか雰囲気柔らかいというか、そう！甘いのだ！何ともいえずこそばゆい気持ちになる。頭とか打ったのかな？

内心でエルに大してかなり失礼なことを考えていた私に気付いたのか、エルが睨む。

「お前は最初から褒めるところが少ねえんだよ。たまに良い事したときは褒めてやらねえと、次いつあるか分かんないだろ」

うん、これでこそエルだ。でも、やっぱむかつく。

しばらく他愛の無い会話をしつつ黙々と歩いているとエルが声を上げる。

「おっ見えてきたぞ。あんまり離れた場所には飛ばされてなかったみたいだな」

エルが指差す方向に視線をやると、私にも森の切れ間を確認できた。

「やったー！森の中の生活長かったー」

「お前には慣れないことばっかだったからな」

「うん。やっと水浴びじゃなくてお風呂に入れるー！」

森の中の生活は、それはもう大変だった。特にお風呂に入れないことがた。たまーに見つける泉やら川やら湧き水やらエルの魔法やらでなんとかするしかなかったのだ。乙女としては非常に辛いものがあった。

そんな私の様子をエルは鼻で笑うとさっさと行くぞ、と置いていこうとする。

「わー待って！」

慌ててエルを追いかける。さっきの優しいは完全に取り消しである！

森から出て3分くらいの所にその小屋はあった。エルがあの時私を逃がそうとしたのがここだ。なんでもエルの知り合いの人がここに住んでいるらしいのだ。エルも森に入るまではその人と暮らしていたらしい。

「…随分と趣のあるお宅だね」

「素直にボロだって言っていっそ」

私とその小屋を上から下まで見て引きつったように言うとエルはズバリと私の内心を言い当てる。

「人様のお宅にそんな失礼なこと言えないよ…」

「でも思っただろ？」

「いや、まあ、あはは」

日本人の得意技愛想笑いでその場を乗り切る。まあ、ぶっちゃけるとマジでボロなんだよね。

森らしく木造の小屋なんだけどあちこち痛んで今にも崩れそうだと成りのト　口に出てくる家並みのボロさと言ったら分かりやすいだろうか。…いや、余計分かりにくい。まあ、とにかく明日嵐が来たら絶対に堪えられそうに無いレベルなのだ。

小屋の耐久についてはこら辺で置いといて、エルは大胆にも小屋の扉をガンガンと叩き始めた。本人はおそらくノックのつもりなのだろう。

「ちよ、ちよっと、そんなに乱暴にしたら壊れちゃうよ!」
「あ?こんぐらいで壊れねえよ」
「いやいやいや、壊れるだろう。」

私がエルの暴拳にわたわたしている、小屋の中からパタパタという足音が聞こえてくる。そして、バアン!と扉がもの凄い勢いで開いたかと思うと小さな男の子が現れた。年の頃は5・6歳だろうか。私よりも幾分低い背で綺麗な藍色の髪とエルと同じ飴色の瞳を持っている。

男の子は真っ直ぐエルの方に駆け寄って飛びつき、こう叫んだ。

「兄上!!!」

ん?あにうえ?

エルは飛びついてきた男の子を難なく受け止め、そのまま抱き上げる。

「シリル。元気だったか？」

「はい！おかえりなさい。兄上！」

……私の聞き間違いでないのなら確かに男の子はエルの事を兄上と言った。こんなに小さな弟がいるなんてビックリである。いや、それよりもエルがお兄ちゃん……。

最初は違和感を感じたが確かにエルはお兄ちゃんみたいところがある。意外と面倒見がいいし、優し……くない！！それを認めると負けたような気になる。

「エルの弟さん？」

思い切って会話に入ると、男の子は今気付いたと言うようにエルの腕の中から私を見る。

「ん？ああ、そうだ。シリル、挨拶」

男の子はエルの言葉にすぐに反応すると、エルの腕からスルリと降りて私にぺこりと頭を下げた。

うむ、可愛いではないか。小さいのにとてもしっかりしている。将来有望である。

「初めまして。ボクはシリル・コーウエンです。今年6歳になりました。よろしくお願いします、お兄さん」

ニッコリ笑って、シリル君はしっかり私を男認定したらしい。……もうどうにでもなれ！である。

「……シリル。こう見えてもこいつは女だ」

エルがそう突っ込んでくれるが余計虚しいだけだ。思ったとおり、シリル君はえ！！と大げさなほど驚いた後ごめんなさい、フードで

よく分からなくてと可愛らしく謝ってくれた。素直な子は好きだ。

「私は、凜です。よろしくね、シリル君」

私も挨拶を仕返すとシリル君はじっと見つめてくる。

「?どうしたの?」

「ねえ、お姉さんって兄上とどういう関係なの?」

「は?.....どういう関係?」

思いもよらない質問に絶句する。そういえば私とエルの関係って一体何だ?知り合いと言うほど関係は浅くないはずだ。エルのことには大切だと思うから、友達?それが一番近い気はする。でもまだ会って1週間も経っていないのだ。じゃなかったら何だ?

私は首をひねる。すると、エルがとんでもないことをのたまった。

「あ?森で拾った」

.....。

「え?拾った?」

シリル君がポカンと口を開けている。当然である。

「ひ、拾ったって犬や猫じゃないんだから、もっと違う言いようは無いか!」

「うるせえ。拾ったことは事実だろ」

「うっそうかもしれないけど!」

エルは私の抗議をさらりと流しさつさと小屋の中へと姿を消してしまった。

はあ、とため息を吐く。エルに置いてかれた私は完全に小屋の中に入るタイミングをなくした。

くいつと服を引っ張る感覚に下を見るとシリル君がギュツと眉を寄せているのに気付く。

「シリルく.....」

ブチッ

私の手を心底汚らしいものでも見たように払いのけられた瞬間、何が切れた。

こんな所で告白するのもなんだが私はこう見えてかなりの短気だ。それでも少しは耐えた。その努力は認めてもらいたい。本当に少しだが。

「ふざけんな！このガキンチョが！！人が下手に出てればいい気になつて！！」

「うっわー、そのセリフ、三下が必ず言うよな。ダッセー」

「何だとー！エルにはいい子ぶつてるくせに！他の人には皆こんな態度取つてるの！？」

「ばーか、相手によるんだよ。お前に良い態度しても意味無いだろ。……どうせ、いつか居なくなるんだから」

「……居なくなる？」

シリル君は今までの威勢の良さが嘘みたいにシュンと頂垂れる。急に大人しくなつた相手について心配になってしまう。

「シリル君？」

彼の顔を覗き込もうとすると、彼はカアッと顔を赤くして、再び怒り始めた。

「見るんじゃねえよ、ブス！！オレに取り入ろうなんて考えるなよ！！もちろん、兄上にもだ！！お前みたいナブス、兄上に相手にされるわけ無いんだから！！」

そう言つて、彼はあつという間に小屋の中へと入って行ってしまった。

………何だつたんだ？一体。

1人残された私はポツンと立ち尽くした。

「随分やられたみたいだな、シリルに」

な、何だコレ!?!?
ここは何処だ!?!?
私は、ぽかーんと口を開けて天井についているシャンデリアを見上げる。

「馬鹿面してんな。さっさと来い」
何でもないと云うように振舞うエルを凝視する。

「エル!?!」

「何だよ?」

「何だよじゃないよ! シャンデリアがついてるんだよ! いや、それだけじゃなくて何このフカフカの絨毯!?! 何でこんなに広いわけ!?!」

ありえない。本当にありえない。ただの小屋だったはずだ。中に入るまでは。本当にただ寝るためだけに使うような小屋だったのだ。しかもボロ。

なのに何だコレは! まるでどこかのお屋敷のようだ。おまけに螺旋階段までついているときたら驚くなと言う方がバカだ。

「ん? ああ。そういえばお前、魔法の無い世界から来たんだっけな。この小屋には空間魔法が使われているんだよ」

「く、空間魔法?」

「ああ。簡単に言ったら空間を広げる魔法だ」

「…へー」

もうそれしか言うことがない。

なんとか疑問を飲み込んで無理矢理納得した私はエルに案内されてリビングへと通された。

「イル。こいつが凜だ」

ぐいっと押し出すようにエルは私の背中を押す。

押し出された先には190cm近い身長にがっしりとした体躯の男の人が立っていた。多分40歳くらいだろう。秋の稲穂のような金茶の髪と瞳を持つ彼は、私を認めるとふわりと微笑んだ。

「初めまして。私の名はイルキデア・サニン。あなたに会えたこと、とても嬉しく思います。漆黒のお嬢さん」

彼の第一印象はライオン。

金茶のふわふわな髪をオールバックにしているまるで鬘たてがみのようだ。

彼は、柔らかく目を細めて私のことを漆黒のお嬢さんと呼んだ。それに少し警戒する。

「私のことを知っていますか？」

「ええ、ついさっき。そこにいるエルヴィスから聞きました」

エルの方を見ると無言で頷かれた。この人は信用できる人なんだろう。

ホツと息を吐くと、クスクスと笑われてしまった。今更になって随分失礼な態度を取ってしまったことに思い当たる。

「ごめんなさい。あなたのことを疑ったわけではないんです」

「いえ、お気になさらず。警戒心を持つことは大切です。あなたは何も悪くありませんよ」

な、何という大人な対応なのだ。私はあっという間にこの人のことが好きになった。

「あ、あの、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると少し悲しみを含んだ声が降ってくる。

「あなたのような素直な方が『漆黒の者』とは…。神も無慈悲なことをしますね」

意味が分からず首を傾げると、彼はとても自然に手を差し出した。

「こんな所で立ち話もなんですからね。よろしければソファまでエスコートさせてください」

そう言いつつ、少し屈んで私と視線を合わせてくれる。私は慌ててフードを脱ぎ、彼の手に自分のそれを重ねる。

これは噂に聞く『れでいふあーすと』というものではなかるうか！
！なんてスマートに女性の手を取るのだ。感動である。まさしく彼

こそ紳士という名が相応しい。

私とエル、そして紳士（名前忘れた）はソファに座ると改めて自己紹介を交わした。紳士は、私とエルが出会い、王子様と遭遇し、エレンのおかげで難を逃れたというところまで話を聞くと、神妙な顔で唸った。

「宮廷魔術師にはまず間違いないあなたが存在を知られたでしょうね。ジュード・バックに伝わったとなるとあなたの方は今まで以上に危険に晒されることになるでしょう」

不穏な言葉に私に緊張が走る。

「イル。あんまり脅すな。こいつはすぐびびるんだよ」

エルがニヤリと笑う。本当むかつくんだけれど、今のは私の緊張をほぐそうとした結果だろうから睨みつけるだけに止める。

「ですが、事実を知っていた方が心構えもできるというものです。

エルヴィス、彼女は何をどこまで知っているのですか？」

「…何も知らねえ」

「……………」

一瞬空気が凍った気がしたが気のせいだろうか。特に紳士の方から冷たいものが漂ってきているのだが…。

「あなたという人は。今まで一体何をやっていたんですか!？」

「そう怒鳴るなよ。俺だって一応この世界の成り立ちは話したんだ」

「それだけ話しても意味が無いでしょう!」

「うるせえな。俺に講釈しろっていうのがそもそも間違いなんだよ。こういうのはお前の役目だろ?」

バチバチと今にも2人の間から火花が飛び散りそうだ。私のことでもこうなっていると思うと尚更肩身が狭くなる。

はあと紳士が盛大なため息を吐くと私に視線を止める。

「申し訳ありません。あなたが知っておかなければならないことをエルヴィスが面倒がって話さなかったようですね。ならば私が、と思うのですが今は時間が無いのです」

申し訳なさそうに眉を下げる彼を見るととても私を優先しろとは言えない。言うつもりはこれっぽっちも無いけど。

「いえ、気にしないでください。どうせエルが悪いことは分かっているのです」

そう言つてニツコリ笑つと紳士は呆気に取られたような顔をした。

エルはというと苦虫を噛み潰したような顔だ。

「はははっこれはいい。エルヴィスをそんな風に言うお嬢さんはあなたが初めてですよ」

紳士は豪快に笑つと笑窪えくぼができる。私はそんなちよつとした発見が嬉しかった。

「あの、それよりも何かまずいことが起きたつてエルが言つてたんですけど」

「ああ、そうなんです。…シリルには会いましたか？」

シリル君とまずいことは何か関係があるのだろうか。疑問に思いつつこくりと頷く。

「そうですね。…シリルには双子の妹が居ましてね。彼女が病気になるつてしまったのです」

「ええ!？」

シリル君に双子の妹!？それはかなり期待大だ。シリル君があんなにも可愛いのだから、妹であればそれ以上の愛らしさに違いない! まあ、性格に問題が無ければの話だけれど。しかし、病気とは心配である。

「あの、大丈夫なんですか？」

「それが、少々厄介なことになっていまして…。彼女は6歳という幼さではありますがとても才能のある魔術師なのです」

「そっそれは凄いですね」

6歳で魔法使いとは羨ましい限りである。

「ええ。ですが、そのために魔術師特有の病に罹つてしまったのです」

「魔術師特有の病?」

「魔術師は身の内にある魔力を使って魔法を行使します。ですが、そのコントロールがうまくいかないと時に魔力が暴走してしまうのです。フリルは、彼女の名前ですが、6歳と言う幼さの割に膨大な魔力を保持しています。本来であれば魔力と身体が均衡を保っていなければならぬのですが、フリルは魔力がその小さな身体に収まりきらないのです。そのため、小さな頃から魔力を抑えるための魔具を身につけていたのですが、先日それが壊れてしまいました。フリルは自分から溢れた魔力に中てられて倒れてしまったのです」

「なんとというファンタジーな世界だ。まさにゲームの中のお話である。だが、これは現実に今起こっていることなのだ。6歳の少女が倒れてしまったという言葉に不安になる。」

「えっと、それでフリルちゃんは今？」

「倒れてから3日経ちますが一向に目が覚める気配がありません。今、シリルがフリルの溢れた魔力を抑えようと頑張ってくれていますが、彼では完全に抑えることはできないでしょう」

「！し、シリル君も魔術師なんですか！？」

「いえ、シリルは違います。ですが、彼は魔具を作ることに長けているのです。魔具は、魔術師の魔力を媒体にして作られる物で、魔法を使うときに補助的な役割をしたり、フリルのように過度な魔力を抑えたりするときに使います。フリルの魔具は彼らの母親が作ったものだったのです」

「じゃ、じゃあもう一回作ればいいんじゃないんですか？その、フリルちゃんの力を抑えられるやつを」

私の言葉に紳士は残念そうに息を吐く。とても辛そうだ。

「そうしたいのは山々なのですが、どうやら材料が揃わないそうなのです。それに、魔具作りに長けていると言ってもシリルはまだ修行中の身です。彼の母親のように完璧な魔具は作れないでしょう。今は、一般的に出回っている魔具でなんとかその場を凌いでいるみたいなのですが、それももう限界のようで……」

「え、えと。もし、そのまま限界がきたらどうなるんでしょう……？」

「死ぬ」

だんまりを決め込んでいたのか、今までずっと口を出さなかったエルがズバツと言いつつ切った。

「！！し、死ぬって！た、大変じゃないですか！！こんな所で暢気に初めまして、なんてやってる場合じゃないよ！！」

思わずソファから立ち上がると、紳士が苦悶の表情を浮かべる。

「しかし、私たちではどうにもならないのです」

もう、諦めてしまったというように頂垂れる紳士に怒りがこみ上げる。

「そんなの、やってみなきゃ分からないじゃないですか！！…シリル君が居るところはどこですか！？」

「シリルの所へ行って何をするつもりですか？」

困惑したように紳士が尋ねる。

「そんなの決まってる！シリル君の魔具作りを手伝うんだよ！！」

私は、紳士に詰め寄ってシリル君の居所を吐かせると一目散にその場所へと向かった。

私は、呆然と彼女の後姿を見送った。なんて一直線な少女なのだろう。彼女は自分の正しいと思ったことを貫けるほどの行動力がある。そんな彼女の様子を面白そうに見て、口を出すことすらしなかったエルヴィスを見やる。

「随分元気なお嬢さんだ。エルヴィスには荷が重かったんじゃないですか？」

「あ？まあな。…でも、悪くない」

その言葉に目を見開く。この男がこんな風に他人を評価する時が来ようとは。

「…エルヴィス。もしかして、惚れましたか？」

その瞬間、テーブルにあった花瓶がブンツという音をたてて鼻先を

掠めた。

…相変わらず素直じゃない男だ。

「な！？お、お前、漆黒の！？」

ドアを勢いよく開けた私は、ずかずかと部屋に入った。

飴色の瞳をこれでもかというほど見開き、フードを外した私を凝視しているシリル君を完全に無視した私は、すぐに寝台に横たわっている少女の姿を確認する。

瞳の色は閉じられているため分からないが、何とも可愛らしい薄桃色の髪を寝台の上に散らす様はまるで一枚の絵のようだ。

「この子がフリルちゃん？」

確認のため、シリル君に問うと我に返ったのか返事の代わりにギロリと睨まれてしまった。まあ、確認するまでも無くシリル君にそっくりな顔を見ればすぐに分かる。この子がフリルちゃんだ。

もつとよく顔を見ようと一歩近づくと椅子に座っていたシリル君が立ち上がり、私の行く手を塞いだ。

「それ以上フリルに近づくな！！お前、どういっつもりだよ！！何で漆黒の者がいるんだ！？」

「何でここにいいのかって、シリル君も知ってるでしょ？エルに付いて来たんだよ。」

さらりと言ってやるとシリル君の顔が真っ赤になる。

「バカにするな！！そんなの分かってる！！何でお前みたいなのが兄上と一緒にいるんだって言ってるんだ！！」

「それもエルが説明したよ。…森で拾ったってさ」
投げやりに答えるとシリル君は余計に頭に血が上ってしまったらしい。

「ふざけるな！！漆黒の者は災いの象徴だ！！兄上はだませてもオシはだまされないからな！！」

「ふう、あのさ、どうでもいいんだけど…いや、良くないか。そん

なに大声出したらフリルちゃんに良くないんじゃないの？」
一生懸命妹を守るうとする姿はとても微笑ましいのだが、如何せん声がかい。病人に大声は毒である。シリル君の災いという言葉に引つ掛かりを覚えるがそんなのを考えるのは後だ。とにかくこの小さなナイト君を黙らせなければ。

私の意見に同意したのか、シリル君はチラリとフリルちゃんの方を見やると顔をむっとりとしながらも黙った。私はやっと静かに話ができる状態を作れたことに満足してさっそく本題に入る。

「さて、フリルちゃんのごことは紳士、じゃなくて、えーと、その、あー……」

「……………イルのことかよ？」

ナイスフォロー！シリル君。よく紳士というキーワードだけで分かったな。軽く感心しながら、そうそうと頷く。

「そう、そのイルさんから聞いたよ。シリル君がフリルちゃんを助けられる魔法のアイテムってヤツを作れるんだよね？」

そう言うと、シリル君のむっとり顔がさらにむむむっと顰められる。一体どこまで顰められるんだろう。しかし、小さい頃にしかめ面ばかりしては後々皺の痕が付いてしまわないかと心配だ。こんなに可愛いのに。きっと将来はエルに負けず劣らずのイケメンになるに違いない。

「オレじゃむりだ」

「え？」

ポツリと零れた小さな言葉に慌てて聞き耳を立てる。

「オレじゃ、オレじゃ無理なんだよ！フリルはたすけられない」

一変して6歳とは思えないほど悲痛な声音でシリル君はギョツと下唇を噛む。

「……………どうして？シリル君は魔法のアイテム作るの上手だって聞いたよ？」

「そんなの！イルや兄上が勝手に言っているだけだ。学院でオレは

いつもバカにされてる」

「学院？つて、アイテム作りを教えてくださいる学校？」

「お前、魔道高等学院のことも知らないのか？」

「え？…う、うん」

信じられないようなものを見る目で私を見るのはやめて頂きたい。

この世界の常識なんて全く持ち合わせていないのだ。分からなくても仕方ないだろう、と声高にに主張したい気分である。

私の曖昧な返事にシリル君は、お前一体どこから来たんだよ、と困惑気味に呟くと私に分かるように説明をしてくれる。意外と親切である。だから、こんなヤツに警戒したオレがバカだった、というセリフは聞かない振りをしておいてやる。

「魔道高等学院っていうのは、魔法に関係する全てのことを学べる所だ」

「魔法のこと全部？へーそりゃすごい」

「全部つて言つても、学科が分かれてる。一つの分野に対して専門的に学ぶんだよ」

「ふーん。大学みたいなもんかな？」

「だいがく？つて何だ？」

「あー気にしないで。続けて？」

「…そこにオレとフリルは通つてたんだよ。フリルは魔術学科でオレが魔道術具学科。主にこの2科で分かれてる」

「そうなんだ？でも、6歳で学校に行くなんて大変だね」

「？学校に行くのに年齢なんて関係ないだろ。学ぶ意志のあるヤツ、才能のあるヤツなら何歳だろうが入れる」

「へー、そしたら、シリル君は学ぶ意志があつて、才能があるから学校に行つてるんでしょ？なのに学校の子にバカにされてるの？」

「やっど、何となくだが学院とやらのことが理解できたので話を戻すすると、シリル君は再びギョツと眉根を寄せた。

「オレは才能があるわけじゃない。オレのはただの七光りだ」

悔しそうに言葉を吐き出すシリル君にこちらまで眉間に皺を作ってしまう。

「七光りってお母さんの？」

イルさんの言ったことを思い出す。フリルちゃんの魔具は双子の母親が作った、と。どうやら当たりらしい。シリル君がついに目を伏せて俯いてしまった。

逆に私はイライラメーターがぐいぐい上がっていくのを感じた。

「…学校の子にシリル君のことを七光りだって言っつて、シリル君自身を認めないバカが居るんだね？」

私の言葉にハツとしたようにシリル君は顔を上げた。私のイライラが伝わってしまったのかもしれない。だが、シリル君はすぐに私から視線を外す。

「…そんなんじゃない。本当にオレには才能が無いんだ。フリルの魔具だつて何度も作ろうとしたんだ。母上が作ったものだと材料が集まらないから、違う方法で何度も試した。でも……だめだった。オレじゃだめなんだ。オレが、助けられ、ない、せいで、フ、リルがっ……」

やっと子どもらしさが出た。堰を切ったようにポロ、と零れた涙に私は少し安堵した。いちいちこのシリル君は大人っぽいのだ。すぐむきになるところはまだ子どもだけど、まあ、それは私も似たようなものだし……。まだ6歳なのだから、もう少し甘えたっていいのだ。

「もし、シリル君に魔具つてヤツを作る才能が無いのだとしても、努力の才能つてヤツはあると思う。今までフリルちゃんを助けようつて頑張ってきたんでしよう？なら、今諦めるのはもったいないよ。まだ助けられる可能性がちょっとでもあるなら諦めるべきじゃない。

「そんなことお前に言われなくなつて分かつてる！」

「分かつてないよ。現に自分には才能が無いつてバカみたいに俯いてるだけでしょ？」

「！！うるさい！！お前に何が分かるんだよ！魔具のことだって何も分かってないお前に！オレの気持ちなんかっ…………」

「分かるわけないだろ、このガキンチヨ！」

私は、この時初めて声を荒げた。

「…分かるはずないんだよ。私は、シリル君じゃないんだから。分かって欲しいなら分かってもらおう努力をしなきゃ。何もしないで分かってもらおうだなんて思い上がりも甚だしい。甘ったれんな」

静かにそう言っでやるとシリル君の瞳に再び涙が浮かんだ。それでも強がるうとするのだからもはや天晴れである。

「お、前になんか、分かってもらいたくない。オレは、ただ、自分に腹が立っただけだ」

「そう。なら、フリルちゃんを助けよう。シリル君だけで無理なら私も手伝う」

「！お前が手伝ったくらいでそんなことできるわけ…………」

ないだろ！と続くだろうセリフをぶっちぎる。まだ言うか。私はそんな言葉は聞きたくない。

「やってみないと分からない！私の居たところではね、三人寄れば文殊の知恵っていつて、1人よりも3人集まればいい案が出るんだよ、ってという諺があるんだから！」

「…オレとお前で2人しかいねーし」

「……………細かいことは気にするな。さあ、自分には何もできないなんてバカなこと言っで時間を無駄にしない！自分にできることをちよつとずつでもやっでいこうよ」

そう言っでシリル君は黙り込んでしまっで。

「？シリル君？」

「……………なんで、なんでお前はそこまで言っでんだよ」

「え？えーと、何が？」

本気で訳が分からず問い返すと、シリル君がカッとなったように声を荒げる。

「だから！何でそこまでしようとするんだっで言っでてるんだ！！お

前にとつちや、オレ達なんてただの他人だろ!？」

なるほど、赤の他人に対してここまで必死になっているものだから不審に思われてしまったらしい。しかし、赤の他人というのはいただけない。これでも私は、シリル君と友達になりたいと思っているのだ。もちろんフリルちゃんとも。

「他人っていうのが気になるんだったら、他人じゃなくなればいいんでしょ？」

「他人じゃなくなればいいって、どうということだよ」

「だからさ、今から私とシリル君は友達になればいいんだよ。そして、友達の妹を助けることに何の不思議もないでしょ？私はシリル君と仲良くなれるし、フリルちゃんも助けられるしで一石二鳥大作戦だよ！」

ニッコリ笑って言うとシリル君はポカンと口を開けた。

そして、

「お前みたいなバカなヤツ、初めて見た」

そう言って、初めて偽者じゃない、本物の笑顔を見せてくれた。

17話

「エレクードの石？」

「そう、フリルの魔具を作るにはそれが必要なんだ」

ふーん、と私は相槌を打つ。あれからシリル君と私はフリルちゃんを助けるためにどうすればいいのかを話し合った。結果として、やはりフリルちゃんが以前使っていた魔具を作るしかないという結論に落ち着いた。しかし、それを作るためにはエレクードの石とやらが必要らしい。

「それが、ここには無いんだね？」

材料が足りないということはつまりそういうことだ。だからこそシリル君はあんなにも悩んでいたのだから。だが、私の質問に答えたのはシリル君じゃなかった。

「エレクードの石ならあるぞ」

声のした方に顔を向けるとエルがドアに凭れ掛かっている。…いつの間に。

「え！？あるの！？」

「兄上！ですが、それは…」

材料が揃うという言葉に喜ぶ私とは反対にシリル君は複雑そうな顔をする。だがそんなことに構ってなんかいられない。

「どこにあるの！？」

勢い込んでエルに尋ねるとあっさりとその石がある場所に案内してくれると言う。なんだ、もうこれで一件落着ではないか。シリル君がこんな風に悩む前にエルもさっさと教えてくれれば良かったものを。

エルに案内された場所はなんと小屋のすぐ裏だった。

「え？ここ？」

あまりの近さに拍子抜けする。大体のゲームとかではそういう特別な材料は様々な困難を乗り越えて手に入れるものだ。だが、簡単に手に入るのならそれに越したことは無い。さっそく石の在り処をエールに聞こうとすると、シリル君がぐいつと私の手を引く。

「どうしたの？」

「ダメだよ」

「え？ダメって？」

「…エレクードの石はこの木の一番上に生なってるんだよ」

そう言つて、シリル君は目の前の大木を指差す。樹齢何年だろうとか、100年は経つていそつだ。

因みに今のシリル君はエールが居るから猫をかぶっている。

「生ってる？…って？えーと、石なんじゃないの？」

「石だ。だが、エレクードの石は木に生るんだ」

後を引き継いだエールが説明をしてくれるが全くもって意味が分からん。

「????？」

「エレクードの石はただの石じゃない。その石が生るこの木もただの木じゃない。この木は、魔力を長年溜め続けている。何もせずとも自然にな。何故魔力が溜まるのかはまだ誰にも分かっていない。ただ、分かっているのはこの木は自身に留められない魔力を結晶にできることだ。それがエレクードの石、魔力の塊だ」

「…つまり、フリルちゃんの木バージョンってこと？。フリルちゃんは溢れる魔力をどうにもできないけどこの木は自分で違う物へと力を変換できるってことだよね？」

私の言葉にエールはニヤリと笑った。

「お前にしては頭が回るじゃねえか。正解だ」

ぐりぐりと頭を撫でられる。微妙に失礼なことを言われたにもかかわらず嬉しい。エールはよくこうして私の頭を撫でるが癖なのだろうか？嫌な気はしないから別になんだっていいのだけれど。

「えーと、それでこの木の一番上に生ってる石を取ってくれば良いんだよね？」

「なんだ、それなら簡単ではないか。さっそく取ってこようと腕まくりをしていると、シリル君に止められてしまう。」

「だから、ダメだつて言つてんだ……言つてるでしょー!!」

…慌てて言い直しても遅いような気がするが、まあ、いいか。

「どうして?その石取ってこなきゃフリルちゃん助けられないんだよ?」

「でも!その木はっ……」

「シリルが言つてんのは、その木が神木だつてことだろ?」

「神木?神様が宿つてるの?」

「神そのものというより、この木は昔からエレスティアの力が宿っていると言われてんだよ。エレスティアはこの国を創った女神だからな。むやみにこの木を傷つけることを誰もが嫌がる。まあ、他にも理由があるんだが……」

「他の理由って?」

「この木全体に魔力が詰まってるからな。小枝一本折ろうもんならどうなるか分かったものじゃねえんだよ。そう簡単に折れたりはしないだろうが、身体が吹っ飛ぶだけじゃ済まないかもな。おまけに魔法も無効化される。直接登つて採ってくるしか方法が無いんだよ。全く、神木とはよく言つたもんだぜ」

エルの言葉に全身の血の気が引く。か、身体が吹っ飛ぶつて、どういう状況なんだ!!

「だから、材料が揃わないって言つたんだ……よ」

シリル君は私の手をギュッと握つたまま離そうとしない。私が飛び出していくのを阻止しようとしているのだろう。エルの手前、強く言えないから行動で示しているのか。

…なんて、なんて可愛いんだ!!

さつきまで私のことなんか嫌い嫌いオーラを出していたというのに、今は私の心配をしてくれている。それが凄く嬉しい。こんな風に想われてしまったらお返しをしたくなるのが人情というものだ。

そんな私の心情を正確に読み取ったエルが、やめておけと私の肩に手を置いてグツと力を込める。

む、エルにまで心配をかけてしまったらしい。…でも、フリルちゃんを助けるにはエレクードの石が必要なのだ。

私は、2人の手をぎゅっと握った。

「私、エレクードの石、取ってくるよ。エルが行ったら重くて枝が折れちゃうかもしれないし、私が一番適役だよね」

エルは細いようでいて、意外とがっしりしているのだ。しかも上背がある。エルが木に登るよりも私が登ったほうが石を採ってこれる確率が高い。もちろん、幼いシリル君に行かせるわけにはいかない。

「…！ダメだ！！兄上の話を聞いてなかったのか！？お前、死ぬつもりかよ！オレに友達だつて言ったのはウソだったのか！？」

必死に私を引きとめようとするシリル君は、もう取り繕うことも忘れてしまったのか思いつきり素を出してしまっていた。私は、シリル君の視線に合わせるように膝立ちになるとそのまま彼を抱きしめた。

「大丈夫。私は死なないし、シリル君に友達だつて言ったのも嘘じゃない。それに、シリル君がフリルちゃんを助けるのを手伝うつていう約束も絶対に守る」

シリル君の背中に置いていた手を彼の肩に移すとじつと彼の瞳を見つめる。嘘じゃないと彼に分かつて貰うために私は決して視線を外さなかった。

シリル君は視線を逸らさない私に観念したのか、俯いてしまった。

「……………からな」

「え？」

よく聞こえず、彼に耳を寄せるとシリル君はガバツと顔を上げた。
「お前はオレの友達で、フリルのこと助けるの手伝うって約束したんだから、フリルが元気になるまでオレの傍にいなきゃ許さないからな!!!」

シリル君はそう言うと、私を押し倒す勢いで抱きついてきた。
こんな風にあからさまに好意を示してくれたのは初めてだ。
私は、シリル君のことを抱き返すと決意を込めて頷いた。

エルはそんな私を見て、ハアとため息を吐くとお前ならそう言うと思った、と苦笑した。

でも次の瞬間すごく険しい顔をして、くれぐれも気をつけるよと念を押すのも忘れなかった。

「さあーで、登るぞー!」

私は眼前に聳える大木を睨みつける。

「凜。もし、少しでも木を傷つけたと思ったら迷わず飛び降りろ」
私の意気込みを挫くように発せられたエルの言葉に私は顔を引きつらせる。

「飛び降りろって…嫌だよ」

「お前、吹っ飛んで木っ端微塵になりたいのか？」

私は慌ててブンブンと首を振る。そんなのはゴメンだ!!

「だったら、飛び降りろ。ちゃんと受け止めてやるから。…本当なら俺が行ってやりたいが、お前の言う通り、俺だとすぐに枝が折れるかもしれないからな。…悪いな、また巻き込まれて」

「エルが謝ることじゃないでしょ。それに、私でも力になれることがあって嬉しいんだ。…あの時は何もできなかったから」

王子様事件の時、自分に力が無いことが悔しかった。だから、こうして頼りにされていると思うと嬉しいのだ。

エルは目を細めて、表情が動いたか動かないか分からないくらいのも微妙な笑みを浮かべると、行って来いと私の背中を押した。

エルが見守ってくれているなら、もし枝を折ってしまってもきつと大丈夫だと思える。エルは絶対に私を受け止めてくれる。私は木登りは大の得意だ。小さな頃から虫かごを片手にスルスルとよじ登っていた。だからそんなに心配することも無いのだ。でも、エルが居てくれるということに私は凄く安心して、木を登るということだけに専念することができたのだった。

私が満面の笑みで手の平くらいの大きさの綺麗な翡翠色の石を持ち帰ると、エルとシリル君は同じように目を見開いた。ううむ、こうして見ると似ている。さすが兄弟というところか。だが、似ているのは顔だけじゃなかった。考えることも同じなようで、2人同時にこう言ったのだった。

「お前ってサルみたいだな」

全くもって失礼である！！

魔力の塊であるエレクードの石を手に、少女は満面の笑みでエルヴィスとシリルと共に小屋へと戻ってきた。なんとという少女だ。誰もが恐れて近寄らないエレスティアの神木に登るなんて、もはや怖いもの知らずというレベルではない。

彼女がフリルを助けるため、シリルの元へと駆け出して行く際に見たエルヴィスの表情を思い出す。あんな風には笑う彼を見たのは何年ぶりだろうか。ほんの少し見ないうちに随分と雰囲気は柔らかくなっていた。

シリルにしてもそうだ。彼は1年前に母親を亡くしてからというもの、作り笑いは別として、フリルの前以外で笑うことは少なくなっている。今のシリルは、少女の手を握って悪態を吐きつつも笑顔を見せている。フリルが倒れてからは自分をつくる事にいつその拍車がかかってしまったような気もするが、少女の隣で見せている笑顔は本物だ。

私は知らず知らずのうちに口元に笑みが広がるを止められなかった。願わくば彼らの笑みが再び消えてしまうことが無いように、不思議に人を惹きつける少女のことも含め見守っていききたい。

私がエレクードの石を採って来た後、シリル君はすぐに魔具を作る作業に取り掛かった。私も何か手伝えることがあればと思ったのだが、何の知識も無い者が近づく方が集中できないし危険だと言われたので少々部屋の外で待っている。紳士もとい、イルさんが気を遣ってくれて、私のこと、つまり『漆黒の者』について教えてくれると言っているのでお言葉に甘えることにした。そのことについては私も知

りたかったことだ。しばしば言われてきた『災い』という単語に気にしない振りをするのも限界だった。エルから聞いた、ただ単に珍しいということだけではいような気はしていたのだ。いつか元の世界に帰るのだとしてもしばらくはこの世界で過ごすのだ。私がこの世界でどついう立場にあるのか、それを知っておかなくてはならない。

「漆黒の者とは、髪と目の色が黒である者のことをいいます。そこまでは知っていますね？」

イルさんの言葉にコクリと頷く。彼は、微笑んでから私にも出してくれた紅茶を一口啜った。その一連の動作がまさに紳士。上流階級の貴族のような感じた。貴族なんて見たこと無いけど。

「漆黒の者の説明をするにはまず、神話から話さなければなりません。どうやら、エルはそれを話すことさえ面倒だったみたいですから」

チラリとイルさんはエルを見やる。私の隣に座って紅茶を飲んでくれるエルは、そんな嫌味もどこ吹く風でそ知らぬ顔をしている。

そんな様子を見たイルさんはふうつと息を吐く。そして、私に視線を止めた。やっと本題である。

風の女神エレスティアはファルスの地を。火の神であるグレインはギスタの地を。水の神であるディーネはマーリナの地を。土の女神であるアリシアはオルガの地を創造した。

それらの地は、人間の手により国となり、それぞれの神の加護を受けて栄えた。

ファルス国初代王ヴェルト・アリム・ファルス。

彼は、とても才能のある若者であった。歴代の王の中で名君と聞け

ば必ず一番に名前が挙がる。彼は国をどのように導けば民が幸せになれるのか、それを良く知る王だった。また、武芸にも秀でていた。他国との争いがあれば、先陣を切って戦場へ駆けて行くほどの勇敢さと相手を巧妙な罠に嵌め、自身はそれを高みから見下ろすような強かさ^{したた}を併せ持った男だった。

彼は銀の髪と琥珀色の瞳を持っていた。見目さえも麗しい彼に惹かれないものは居なかった。女はもちろんのこと、男でさえも。誰もが彼に憧れを抱いた。しかし、それは人だけに止まら^{とど}なかった。

風の女神エレスティア。彼女もまた彼に親愛の情を抱いた。

神界に住む者にとつての地上とはただ見守る、それだけの存在である。加護は与えても決して干渉してはならない。それが掟だ。

それでもエレスティアは、ヴェルトに恋をした。そして、彼もまたエレスティアの想いに応えた。彼らは他の神々にばれないように短くとも幸せな時の中で想いを育んだ。

だがそのことにいち早く気付いた、エレスティアに長年に亘って仕えた側近でもあり、彼女に最愛の友人とまで言われた神使^{しんし}はそれを許さなかった。神使は神界のことをよく分かっていた。掟を破った者はどんな神だろうとどんな理由があろうと容赦しない。それが神界における風習であることを。掟を破れば死罪。よくて10億年の眠りにつかせられることになる。

神使はまた、エレスティアのこともよく理解していた。彼女は優しく寛大だが、時に風の女神らしく自由気ままに己のやりたいこと、決めたことしかやらない。そしてやるとなったら必ず突き通すのだ。だから、刑に処されるとしても自分の気持ちに嘘を吐くことは決してしない。神使はそんな彼女をとて愛おしく思っていた。本当の妹のように。だからこそ、神使は彼女だけは殺されることがないように自らを犠牲にした。例え最愛の友人に恨まれる結果になっても。まっただとして。

神使はヴェルトを殺した。

エレスティアを裏切り、神界の掟を破った罪の意識のためか、神使は神の使いの証である真っ白な翼を黒に染めた。それは、アザレアではとても珍しい色彩である神使の髪や瞳と同じ色だった。

エレスティアは、神々に命じられ神使を手にかけた。

己の神使が罪を犯したなら己で処断する。それもまた、神界での掟である。

その後、彼女は絶望し全てのものを憎んだ。

人を愛することが罪だとする神界のことも。人という種を生み出した地上のことも。彼女の心を奪っていった恋人のことも。恋人を手にかけた友人のことも。

エレスティアは神使より先に自らが罪を犯したことを神々に明かした。そして彼女は牢に入れられ、処罰の審議を待ち、死罪を告げられた。刑が執行される時、彼女は最後に呪いをかけた。

『ファルスの地に破滅が訪れし時、漆黒の者が現れる。彼の者こそが、己が世界を導く要となるう』

地上の者は誰もが恐れた。ファルス国初代王を手にかける、エレスティアの怒りを買った神使の生まれ変わりが世界を破滅に陥れることを。

そして、エレスティアが命を落としてから何千年と経った今でも漆黒の者はアザレアにとっての災いの象徴として恐れられているのである。

「これがアザレアで漆黒の者が厭われる原因になった出来事です」

「……………」

イルさんから聞いた話に呆然となる。今のは一体誰の話だ？どう考えても私の知っているエレンとは違う。エレンが世界を滅ぼそうとするわけがない。エレンはあんなに慈愛の溢れた声で私の名前を褒めてくれたし、エレンの名前を呼んだら王子様から助けてくれたではないか。絶対に違う。こんなのはエレンじゃない。

「凜？どうした？」

ふと顔を上げるとエルが心配そうな顔で私の顔を覗き込んでいる。

エルは私の肩を引き寄せるとゆっくりと擦ってくれた。

「エル？」

「…本当にどうした？震えてるぞ」

エルに言われて初めて気付いた。無意識にぎゅっと握りこんでいた両手を開くと小刻みに震えている。どうやらそれは手だけでなく全身に及んでいたみたいだ。エルが心配するのも分かる。

「エル。エレンはそんなことしないよ。エレンは大切な友だちを使つて誰かに嫌がらせをするような人じゃない。エルも知ってるでしょ？エレンは私達を助けてくれた」

エルにまでエレンが悪く思われていたらどうしよう。不安感からか掠れた声しか出せない。そんな私を見たエルは一瞬目を見開くといつものように私の頭をクシャリと撫でた。

「…お前な、今はお前の話をしてるんだぞ？イルが話したのは漆黒の者がこの世界では災いだって思われてるってことだ。そんでお前はその漆黒の者だ。エレスティアの心配より自分の心配が先だろーが」

そう言いながら、エルは私の手をぎゅっと握つて震えを止めてくれるようにする。

「…なんでシリル君が私のこと災いって言ったのか分かったけど、私がこの世界を滅ぼすなんて大それたことやりたくてもできるわけではないもん。皆から怖がられるのは嫌だし、漆黒の者だからって誰かに利用されるかもしれないって思うと怖いけど、エルやイルさんは

そんなことしないでしょ？それが分かっているから、私は大丈夫だよ」
精一杯の虚勢を張って私は笑った。本当は怖くないわけがない。髪と目が黒いというだけで嫌われるなんて凄く嫌だ。自分が悪いわけじゃないのに敵意をぶつけられるのは怖い。

でも、エルは絶対それをしないっていう確信がある。エルは最初から私に優しくかった。漆黒の者って分かっても私を1人の人間として認めてくれる。だから、大丈夫。エルに付いて行こうと決めたと
きから、私は何があってもエルを信じるのだ。

「：お前ほど悪役が似合わねえヤツもいねえな。俺は、神話の通りには信じてねえよ。昔話つてのは伝わっていく中で事実が捻じ曲がる
ことが多いからな。全部が嘘ってわけじゃねえとは思うが、お前
がエレスティアの加護を受けた漆黒の者って時点で大分違うだろ」
エルがそう言ってくれたことで私の全身の力が抜けた。知らず知ら
ずのうちに緊張していたのかも知れない。

「私もあなたがこの世界を滅ぼす存在になるとは思えません。エル
ヴィスの言うとおり、この神話を頭から信じるつもりはありません
よ」

イルさんの温かい言葉に自然と頬が緩んだ。

「長くなってしまいましたね。少し休憩しましょう。新しいお茶を
淹れてきます」

イルさんはそう言うと言つて私の手伝います、という言葉をやんわりと断
つて席を立った。

暫くイルさんが帰ってくるのをエルと待っているとドタドタという
足音が部屋の外から聞こえてきた。そして、勢いよく部屋の扉が開
いたかと思うとシリル君が飛び込んできた。

「フリルが、フリルが目を覚ました!!!」

18話（後書き）

アザレアの人にとってエレスティアは畏怖の対象であり、あくまで憎しみを向けられるのは神使です。エレスティアはファルスを創ったということからもとても力のある神なので憎しみよりも怖さの方が先にたちます。

シリル君が精魂こめて作った魔具は、どうやら完璧に近い形で完成したらしい。やっぱりシリル君は優秀なんだと思う。周りの人に心無いことを言われて、自分に自信が持てなくなっていただけなのだ。私は、シリル君に隠れるようにしてチラチラとこちらを窺ってくる女の子に笑みを向ける。女の子はカアツと頬を紅色に染めるとぱつとシリル君の後ろに完全に隠れてしまった。

…なんて、なんて可愛いんだ！！（2回目）

フリルちゃんはとてもシャイな女の子だ。きつと深窓のお姫様ってこんな子のことをいうんだと思う。淡い桃色の少しウェーブがかった髪を腰の辺りまで伸ばしているため、彼女が動くたびに髪も一緒にフワフワと踊る。伏し目がちな瞳を縁取るように、長くくるとした睫がフリルちゃんの顔に影を作る様は本当に可愛い。間違いなく睫にマツチ棒が乗るだろう。瞳の色はエルとシリル君とお揃いの飴色だ。

あまりにも私がデレデレとした顔をしていたからだろうか、すかさずシリル君から鋭い突っ込みが入る。

「気持ち悪い顔」

「……………つぶ」

「……………」

もう、エルの前で自分のことをごまかすのはやめたらしい。なんだか吹っ切れた顔をしているシリル君を見ると私まで嬉しくなる。それは、いい。それはいいのだが、友達である私に対してあまりにも酷くはないだろうか。そして、それを聞いたエルが噴出したことにもグサツとくる。

「シリル、エルヴィス。レディに対して失礼でしょう」

ああ、心のオアシス！！さすが紳士は言うことが違う。イルさんを味方につけた私は俄然強気になる。

「そーだそーだ！私ははれでいなんだからね！！」

「…はいはい。レディならレディらしく大人しくしてる」

ふう、やれやれこれだからお子様は、というようなニュアンスをエルの言葉の端々から感じ取る。…本来なら、エルの鳩尾にエルボーを食らわせるだけでは物足りないところだが、私はレディなのだ。これっくらいのことですら怒ったりはしないのが大人の女性というヤツである。だから、私はすました顔で紅茶に口をつけた。もちろん小指は立てるのがセオリーだ。

すると、そんな私達のやり取りがお気に召したのだろうか、鈴の鳴るような声でふふつとフリルちゃんが笑った。そして、ゆっくりとシリル君の背中から出てくると私の方へとトコトコと歩いてくる。

「フリル？」

不思議そうな顔をしてシリル君がフリルちゃんを呼ぶが、フリルちゃんには構わず私のところまで来ると、くいつと私の服を引く。どうやら耳を貸せと言いたいらしい。促された通りフリルちゃんに耳を寄せる。

すると、思いがけない言葉が私の耳に飛び込んできた。

「…わたしのために、エレクードの石とつてきてくれて、ありがとう、お姉ちゃん」

驚いて顔を上げると、満面の笑みのフリルちゃんが居た。どうやらシリル君から事情を聞いたらしい。その笑顔があまりにも可愛くて思わずぎゅっと抱きしめると、少し戸惑っていたフリルちゃんも私の背中に手を回してくれた。うー子どもって柔らかい！！髪なんてふっわふわである。しかもなんか甘い匂いがするのだ。やばいぞ、これは。癖になりそうである！

暫くそうして、フリルちゃんのことをぎゅーぎゅー抱きしめていると（最終的にくすぐり合いっこになってじゃれあってたつていうのが正しい）シリル君がむすつとした顔でこちらを見つめているのに気付く。

「シリル君？」

何やら恨めしげに見られていると思ったら、シリル君もトコトコとこちらに歩いてくる。そして、少し距離のあいた所からさらにじーっと見つめられる。ん？もしやシリル君もくすぐり合いっこ仲間に入りたいのだろうか。それならばウエルカムである。フリルちゃんから手を離し、おいでおいでと手を振るとおずおずと近寄ってくる。大人しく近づいてきてくれたことが嬉しくて、フリルちゃんと同じようにぎゅーっと抱きしめる。すると、素直に私の背に腕を回してくれるものだから、もう、堪らない！！私は、我慢できずにわしゃわしゃとシリル君の頭をかき混ぜた。そんな容赦の無い私の所業に、さすがにビックリしたのか、シリル君が抗議の声を上げる。

「わあ！わっぷ、やめろ、バカ！！」

「やめないー！だって可愛いんだもん！うりゃうりゃ」

「男にかわいいって何だよ！？離せ！！」

こうして改めて抱きしめてみると、6歳なんだなーと実感する。こんなに小さい身体で色々と頑張ってくれたのか。そう思うと何やら切なくなってくるではないか。今回のことだけじゃない。今まで周りからのプレッシャーに押しつぶされそうになってもきつと踏ん張ってきたのだろう。

ピタリと撫でるのを止めた私を不審に感じたのか、シリル君が心配そうに見上げてくる。

「どうしたんだよ？疲れたのか？あんなに大きな木、しかも神木に登ったんだから、無理するなよ」

自分の方が疲れただろうに、私のことを心配してくれるのか。なん

て似ているんだ、この兄弟は。優しいところまでそっくりではないか。零れそうになる涙を根性で止める。そして、再びぎゅ　　とシリル君を抱きしめて彼の耳元で囁いた。

「よく、頑張ったね。フリルちゃんを助けてくれてありがとう」

バツとシリル君が私から少し離れたと思うと、見る見るうちにシリル君の瞳に涙が溜まる。

「そ、それはっオレの、セリフだろ！」

シリル君は詰まったように言葉を吐き出すと、耐え切れずにポロリと涙が零れ落ちた。

「うん。でも、シリル君が居なかったら、こうしてフリルちゃんを抱きしめることもできなかった。だから、ありがとう。最後まで諦めないでくれて、約束を守ってくれて、私なんかを信じてくれて、ありがとう」

私がそう言うと、シリル君がドンツと私に突進して抱きついた。そして、大きな声で泣きだしたのだった。

シリル君は、暫く私の胸の中でわんわんと泣いていたが泣き疲れたのか、あつという間にコテンと寝入ってしまった。

心配そうにシリル君を覗き込むフリルちゃんに大丈夫だよ、と言うと安心したのかそのままうとうとし始める。フリルちゃんもまだ全快ではないのだろう。ポンポンとシリル君に貸しているのは反対の膝を叩いてやると、すぐにそこに頭を乗せて寝息を立て始めた。あー可愛いな。なんなんだろこの子達。どうにかしてやりたくなるほどの可愛さってあるんだなーとしみじみ思っていると、お馴染みのエルの手がポンと私の頭に乗った。

「重くないか？部屋に連れてってやることもできるが」

「ううん、平気。せつかく気持ちよさそうに寝てるんだから動かしなくて起こしちゃったら可哀想だよ」

「そうだな。…凜」

「んー？」

「ありがとな」

「え？何？いきなり」

突然のお礼に驚いてエルを見上げると、王子様から逃げ出した時に見た優しい笑顔のエルがいた。何となく分かってきた。この笑顔はエルが本当に嬉しいときの笑顔だ。いつもの皮肉びた口の端を僅かに上げる笑い方じゃない、本当の笑顔。そんなエルについて、見惚れてしまう。仕方ない、エルはこんな風に笑うと色気3割り増しなのだ。

「なんとなく、言いたくなっただけだ」

「ふーん？…どういたしまして」

どきまぎと視線をゆっくりと外して、双子ちゃんの寝顔を観察する。睫長いなー、とか髪サラサラでフワフワだなー、とか今までも思っていたことを意味も無く頭の中で繰り返す。そうしていないと、動揺でどうにかなりそうだったのだ。エルの本物の笑顔は王子様同様、いやそれ以上に綺麗過ぎて危険だ。

そんなことをぐるぐると考えていると、だんだんと私まで眠くなってきた。

そういえば、今日は色々大変な1日だったなーと思う。フリルちゃんが助かって本当に良かった。でも、少し疲れたなー。

私は、だんだんと落ちる瞼に抗うことなくそのまま意識を闇に沈めた。

20話

『凜が今いる場所は、異世界だ』

蒼兄あおいの爆弾発言から1週間が経った。凜の消息は未だに不明で、俺はやくもきとした日々を送っている。

今が夏休みで本当に良かった。凜が居なくなっただことを学校側に知られたら、神隠しだ何だと大騒ぎされかねない。

タイムリミットは8月31日。それまでに凜を見つけ出さなければならぬ。

だが、蒼兄が言うにはそれまでに凜を異世界から連れ戻すのは無理があるらしい。異世界とこちらの世界が繋がるのは満月の夜だけという面倒な制限があるそうなのだ。凜が消えたのが1週間前だからあと3週間は経たないと満月は訪れない。そうになると完全に時間切れだ。仕方なく、俺達は適当な理由をつけて凜を休学という扱いにしてもらうことにした。

何でも夏期講習という名のバカのバカによるバカのための補講があり、それに出れば進学させてやる、という学校側の救済措置に凜が一向に現れないため教師から連絡が来たのだ。

凜は俺達に補講があることすら話していない。期末が赤ばっかりだったので何かしら夏休みにあるだろうとは思っていたが、まさかの進学できないかもしれない事態になっているなんて思いもしなかった。

教師からの電話を取った時の蒼兄は怒り心頭で、そのまま受話器を破壊しかねない勢이었다。なんとか蒼兄の機転で、「妹は病名も分からない病に罹ってしまいました、田舎で療養しているんです。

空気の良い所にいると症状も良くなるので、暫くはゆっくりさせようと思います」() 事なきを得たが、冷や汗ものだった。診断書も何も無い状態で信じた教師に「大丈夫か、おい」と言いたくなかったが、まあ良いことにおこう。

俺は今、所謂『異世界』について図書館で調べている。この世界と凜が今いる世界が繋がるのを暢気に待ってなんかいられない。だが、一向に成果は上がらない。

手当たり次第に異世界について関係のある本を読んではあるが、何も手がかりらしきものが無いのだ。

「くっそ、何も分かんねえ」

がりがりと自分の頭を掻き篦ると隣で本を読んでいたおばさんが嫌そうに目を細めた。慌ててすみませんと小さく謝ってから俺は席を立った。

望みを捨てきれない俺は、関係のありそうな本を何冊か借りて図書館を出る。出た瞬間モアツとした熱気が纏わりついて夏特有の不快感に知らず眉根がよる。

こんな日は、いつも凜がアイスを買ってくれとうるさかったことを思い出す。アイスを買ってやると現金なもので途端に笑顔を見せるのだ。いつだったかそれが面白くて、アイスは何個も買ってやったら、その晩凜は腹痛でトイレから出てこれなくなった。まさかその日のうちに全部食べるとは思わなかったのだ。当然の如くその後蒼兄に2人して怒られたが、それがあまりにも馬鹿馬鹿しくて耐え切れずに爆笑すると蒼兄も叱る気が失せたのか、3人一緒になつて笑い転げた。

凜のどうしようもない過去に思いを馳せると、ふっふつと怒りがこ

み上げる。

何のために凜を連れ去ったかは知らないが、絶対に許さない。異世界だろうがどこだろうが乗り込んで、神だろうが誰だろうが1発ぶん殴ってやらないと気がすまない。

俺は、決意も新たに茹だるような暑さの中家路へと急いだ。

1 週間前

「い、せかい？」

俺の言葉に浩樹ヒロキはポカンと口を開けた。当然の反応だろう。俺だつて俺が言ったのでないのなら絶対に信じない自信がある。頭が狂ってしまったと思われても仕方ないかもしれない。せつかく信じてくれると言ってくれたが、こんな突飛な話だとは思わなかったはずだ。無意識のうちに視線が浩樹の顔から下へと下がった。信じてもらえないかもしれない。それがすごく怖く感じる。自分で信じなくてもいいと言っておいて調子がいいにも程がある。

「…なにしけた顔してんだよ、蒼兄。って俺のせいかな」

余りにも軽い声に顔を上げると、浩樹はバツが悪そうに髪をかき上げる。それから徐に俺の肩に手を伸ばすとぎゅっと掴んでくる。それが思いのほか強い力で、思わず顔をしかめて非難しようと浩樹を見ると、今までに見たことがないくらい真剣な表情をしているのに気付く。

「俺は蒼兄を信じる。さつきは本当にごめん。頭に血が上っちゃまってどうかしてたんだ。蒼兄が意味もなく嘔吐くわけないって知ってるのにな。異世界？ってよく分かんねえけど、そこに凜がいるなら連れ戻す方法を教えてくれ」

まっすぐに俺を見つめて言い切った浩樹にこちらが呆気に取られてしまった。

「……お前、馬鹿じゃないのか？」

「はあ！？何でだよ、信じるっつってんだろ」

心の中で思ったつもりが口に出してしまったようだ。すかさず噛み付いてくる浩樹に苦笑が漏れる。

「だからだよ。お前、幽霊だって信じてないだろ？異世界なんて幽霊よりも信憑性無いだろうが」

「ゆーれーなんて物は非科学的だ！俺は信じねえ。これだけは譲らねえぞ！例え蒼兄がいるっつたっつて俺は信じないからな！」

「…異世界も非科学的だと俺は思うけどな。そろそろ直したらどうなんだ？虫嫌いとお霊嫌い」

「うるせえ！！…とにかく俺は凜を早く見つけ出したいんだ。本当は、異世界が存在するとかしんどいかなんてどうでもいいんだよ。

凜が見つかるならどこだっていい」

浩樹は、グツと下唇をかむとそのまま俯いてしまった。

凜が消えて苦しいのは俺だけじゃない。浩樹も春乃さんだって俺と同じなのだ。そのうち凜の手がかりを持つてるのは俺だけで、きつと藁にも縋るような思いだっただろう。それなのに俺は1人でうじうじとしていて、最悪だ。信じてもらえないかもしれない、なんて俺の臆病さが浩樹を傷つけた。信じられなかったのは俺の方だ。

「浩樹、春乃さん、初めに言っておく。俺の知っていることを全部話すことはできない。…2人を俺の事情に巻き込むわけにはいかなから。でも、凜がどこに消えたのかに関して、どうしたら凜を見つけて出せるかに関してなら俺の知っていることを全て話す。それでいいか？」

「…つまり、蒼太くんの事情を詮索するな、という意味ね？」

「はい。それでもいいならお話しします。それが許せないと言つのなら」

ら、俺は1人で凜を連れ戻す」

春乃さんは、ふうつと息を吐くと呆れたように俺を見る。

「あなたの悪い癖ね。何でも1人で何とかしようとする。…あなたが詮索すると言うなら、そうするわ。でもね、これだけは忘れないで。いくらあなたが私達に心配をかけたくないと思っても、私達はいつでもあなたのことを心配しているわ。それをあなたは重荷に感じることもあるでしょう。それでも、私達はあなたを心配することをやめたりしない。あなたが振り返った先にはいつでも私達がいることを忘れてはダメよ」

「俺も。蒼兄が知られたくないって言うなら何も聞かぬーよ。でも、話したくなったら話せよな。そんな時はちゃんと聞いてやるからさ」

「…春乃さん、浩樹。ありがとう」

春乃さんと浩樹の言葉に不覚にも涙が出そうになった。俺は、心から感謝して頭を下げると覚悟を決めて口を開いた。

「凜が飛ばされた世界は『アザレア』といって、この地球とは全くの別次元に存在している。アザレアには、主に4大国と呼ばれる国が中心となり他諸国を支えているんだ。4大国の1つに『ファルス』という国がある。ファルスには古くから迷信というか…神話だな、が伝わっていて、ファルスを創ったとされる神があることを切欠に世界に呪いをかけたんだ」

「あることって?」

「…そのことを話すと話が長くなる。その話は後でもいいか?」

「ああ、分かった」

「悪いな。…まあ、その呪いってというのが、ファルスが滅びる時、髪と目が黒い人間が現れるっていうものなんだ」

「はあ?なんだそりゃ。それが凜ってことかよ?凜はそのアザレアっていう世界を救うために連れてかれたんだろ?呪いのせいで現れたってことになったら、凜は魔王みたいな存在ってことになるんじ

「やねーのか？」

浩樹が納得がいかないとはかりに口を尖らせる。

「ああ。浩樹の言う通りだ。実際にはそうじゃなくともアザレアではそう伝わってしまったている。凜は、アザレアでは悪しき存在なんだ」

「それじゃあ、凜が危険つてことかよ！？世界を滅ぼそうとする存在つてことになってるつてことは、もしかしたら……っ」

その先を言うことは躊躇われたのだろう。俺だつて考えたくないことだ。

凜が…殺されるかもしれないという可能性なんて。

「…とにかく、凜ちゃんが今現在危険な状況にあることは理解したわ。それで、どうやったら凜ちゃんをこちら側に連れ戻すことができるの？」

こんなときでも冷静な春乃さんは、しっかりと現実を受け入れてくれているようだ。それが浩樹の落ち着きを取り戻す効果もあることもきつとこの人は分かっている。

「凜を連れ戻すためにまず俺達がいなければならないこと、それは…待つことだ」

「…は？」

あまりにも予想通りの反応に、こんな時だというのについ口元に笑みが浮かぶ。

俺は、慌てて口を引き結んだ。

「凜が消えた蒼刻の森とアザレアが繋がるのは、満月の夜だけなんだ。だから、次の満月が来るまで待たなければ俺たちにできることは何もない」

「な！？つてことは、あと1ヶ月ただボーっと過ごしてろつて言うのかよ！！こうしてる間にも凜が危険な目にあつてるかもしれないぞ！？」

浩樹の言葉が胸に突き刺さる。そんなことは俺だつて分かっている。

「だが、他にアザレアに行く方法がない。今の俺たちには凜を信じることしかできないんだ」

「そ、んな」

部屋に重たい沈黙が流れた。

ドンツと浩樹が行き場のない怒りを畳に叩きつけるのを申し訳ない気持ちで見やる。最初から、この村に来たときから嫌な予感はしていた。それなのに、油断した。凜が俺たちの前から消えるわけがないと高をくくっていた。俺の責任だ。

しばらく、黙ったまま身動きも取れない俺たちを救い上げたのはやはり春乃さんだった。

「2人共、顔を上げなさい」

浩樹は、春乃さんの言葉にピクリと反応するとのろのろと顔を上げる。俺もそれに倣うと春乃さんの強い眼差しにかち合った。

「…何もできないということがどれほど辛いことか、私はよく知っているわ。あなた達はまだ生まれてなかったから知らないかもしれないけれど、私の夫は癌で亡くなったの。病気が見つかったのは、もう手遅れの状態の時だったわ。あの人は私を心配させないようにいつも笑っていた。無理して笑っていることなんかお見通しだったわ。強がる必要なんてない。そう何度言っても、あの人は笑うことをやめなかった。…先が短いのなら、せめて君には僕の苦しんでいる姿じゃなくて、笑顔を覚えておいてもらいたいんだ、なんて。馬鹿みたいでしょ？」

「…そんなこと、ないです」

「そうだよ！春さん。叔父さんは春さんのことを思っ…」

「そうかしら？本当に私のためを思うのなら無理なんてして欲しくなかった。私は、精一杯の気持ちで心配したかったのよ」

春乃さんの言葉が理解できず、俺と浩樹は首を傾げる。

「心配したかった？」

「そうよ。あの人って何でも1人でできちゃう人でね、料理だって

私よりも上手かったんだから」

「え！？春さんよりも？」

春乃さんの料理の腕は、どこかの高級なホテルよりもずっと美味しいのだ。浩樹の驚く気持ちはよく分かる。

春乃さんは懐かしむようにふふつと笑う。

「そうなの。だから、私の唯一自慢できることが無くなっちゃってね。そんな人だったから、病気の時くらい私に頼って欲しかったのよ。でも、それすらあの人はさせてくれなかった。そんなに私は頼りないのかしら、なんて悩んだことも1度や2度じゃないわ。でも、いつからかこう思うようにしたわ。私が傍にいるから、この人は意地をはれるんだってね。私がいなかったら、うんうん唸って病気の苦しみに耐えるしかなかったのを私という存在が彼に意地をはらせて、苦しみを追いやろうとさせる。それなら、何もできなくても私の存在って案外役に立ってるのかもしれないわ、なんてね。結局最後まで意地をはらせることしかできなかったけど、私はそれで良かったと思うわ。決して弱みを見せない人だったけど、私を愛してくれたことは嘘じゃないものね」

春乃さんはそこまで言うと、すっかり温くなってしまった麦茶をゆつくりと飲んだ。

「さ、それで何が言いたかったのかというと……2人共、1ヶ月の間私たちでできることをしましょう。何もできることが無いなんてそんなことは無いと思うの。凜ちゃんの学校にも連絡を入れなきゃいけないし、1ヶ月後の準備だつてしないといけないわ。何ていつたつて異世界ですもの。色々必要でしょう？蒼太君は確実に安全に異世界に行ける方法も見つけなければいけないんじゃない？蒼太君は凜ちゃんを信じることしかできないって言ったけど、それも立派な”できること”だわ。私たちが凜ちゃんのことを想えば想うほど、それは凜ちゃんの力になる。ほら、やることは山盛りよ！今から準備しないと間に合わないかもしれないわ！」

そう言つて、春乃さんは満面の笑みで笑った。

この人には敵わない、そう思った瞬間だった。

21話

この不思議な世界、アザレアに来てからとても不安に思っていたことがある。エルと2人で過ごした期間ではそれに突っ込むことが怖くて聞けなかったのだが、とてもとても不安だったのだ。

そう、それは……

「…これ、何？」

目の前に出されたおどろおどろしい物体を気の遠くなりそうな思いで指差すと、イルさんは紳士らしい慎ましい笑顔でそれを紹介した。

「こちらは、庶民の間で一般的に食されている、トマトを煮込んだスープでございます。トマトの他に様々な野菜を細かくしたのも入っておりますので健康にも良いかと思いい、不肖この私が作らせていただきました。さあ、遠慮せずに召し上がってください」

……ああ、つまり目の前にある青紫色をしたボコボコと煮立っている、何やら刺激臭のする物体はミネストローネだったのか。

って召し上がれるか……！！！！！！

と内心ではちゃぶ台をひっくり返したいほど憤ってはいてもそれを表面に出せるはずも無く、

「へーそうなんですかあ、とっても美味しそうですね」と根性で笑顔を浮かべる自分に万歳である。

私がとても不安に思っていたこと、それは食べ物だ。

森でエルと過ごしていたときはもっぱら保存食だったため、何か良くわからない肉を出されても何とか気にしない振りをして必死に胃の中に押し込んだ。助けてもらった分際で食事にまで文句を言うほど恥知らずではないのだ。だが、何度も言うが私は不安だったのだ。エルが飴を知らないと言ったときから、食文化の全く違う世界に来てしまったのではないかという恐ろしさは実際になつてみないと分からない。

食事は命の糧であり、ひと時の幸せを噛み締める時間にもなり得るのだ。何を隠そう、間宮家では教育の一環と称して野菜を作っている。自然大好きのみれちゃんに興味の延長線で始めたことらしいが、これが結構面白いのである。自然と触れ合いながら食の大切さを学んだ私にとって、いくら魔女のスープ的な何かを出されたとしても、それを粗末になどできないのだ。

私は、ごくりと生唾を飲むと戦場にも赴くかのような決意でスプーンを手を取った。

「おまえ、イルの殺人兵器を飲んだのか？……勇者だな」

ぐったりと行儀悪くソファの上でうつ伏せに撃沈していた私の頭上から、心底尊敬するといった風なイルの声が降ってきた。

イルさんの特製ミネストローネは想像通り、いやそれ以上にすさまじい破壊力をもってして私の舌と胃を暴れまわった。

何とか根性で食べきった後、イルさんの「おかわりはいかがですか？」攻撃を振り切って命からシリル君の部屋まで這って来たのだ。

「……殺人兵器って何？」

聞き捨てならない言葉に、動くのも億劫な体をなんとか仰向けにしてエルの姿を探す。エルは面白そうに口端を上げて私の顔を覗き込んでいた。割と近いところにあつたエルの顔に微妙に驚きつつ、返事を促す。

「イルの料理全般のことだよ。あいつは昔っから料理が下手でさ、何を作らせようともし何故か全ての料理がああ青紫になる。そのくせ、料理が趣味だから余計に性質たちが悪い。あいつの作るもので口に入れても良いものは紅茶だけだ」

エルの言葉に啞然とじつじつ、いつの間にか心配そうに私のことを見守っていたシリル君とフリルちゃんもうんうんと頷いているのを見て一気に全身の力が抜けた。

「……あれが、この世界の一般食じゃないの？」

「そんなわけないだろ。あんなものを日常的に食ってたら何人死人が出るか分かったもんじゃねえぞ」

「……それで、殺人兵器」

「そういうことだ」

思わず、私はクツションに顔を埋めた。

そして、ぶるぶると震えている私に何を思ったか、3人が慌てたように私の頭を撫で始めた。

「悪い、もつと早くに言ってくれば良かったな。イルの料理は味こそ酷いが毒が入ってるわけじゃねえから、本当に死ぬことはないから安心しろ、な？」

「うじうじするなよ、お前らしくないぞ！」

「お姉ちゃん、おなか、痛い？」

三者三様の慰め方をしてくれてはいるが、申し訳ない、私はちっとも聞いちゃいなかった。

私は、エルがイルさんの料理について教えてくれなかったことに怒ったわけでも、シリル君の言うようにいじけたわけでも、フリルちゃん心配してくれたようにお腹が痛かったわけでもなかったからだ。

「~~~~っあ~~~~よかったあ~~~~!!まさかあんなものを毎日毎食食べなきゃいけないかと思ったよ!ああ、お天道様ありがとう!ビバ自然の恵み!!」

ガバツと身を起こすと、私は両手を天に伸ばし心から太陽に感謝した。

そんな奇天烈な私の行動に、どうやら何も心配が要らないことを見て取ると、3人は再び三者三様の反応を見せた。

「…心配して損した」

「…元から変だとは思ってたけど、イルの料理を食べてさらに頭がどうにかなっちゃたのか!?!」

「お姉ちゃん、元気でよかった」

失礼な言葉が約2名から聞こえたが、聞こえなかった振りをしておいてやるう。今、私はとても機嫌がいいのである。

そんなこんなでこの世界の食文化がほぼ私のいた世界と同じであることを知り、ようやく胸の奥で燻ぶっていた不安を取り除くことができたのであった。

だが更なる問題が私の身に降りかかろうとしていた。

「で、シリル君とフリルちゃんはエルがいない間一体何を食べて生きてたの?」

ふとエルがいない間この小屋に大人がイルさんだけであった状況を思い出し、シリル君とフリルちゃんに尋ねると2人はきょとんと可愛らしく首を傾げて、

「何も」

「……………は？」

意味が理解できずポカンと口を開けた私に向かって更なる爆弾の投下は続く。

「…そういえば何も食べてなかったな。兄上が出て行ってからすぐにフリルが倒れてそんな場合じゃなかったし、3日くらい食べなくても死なねーし」

「うん。…べつに食べるひつよう、ないよ」

「…た、食べる必要が、ない？」

2人の言葉にわなわなと身体が震え始める。

「あーフリルの場合が特別なだけだ。フリルは、膨大な魔力を身に宿しているから、特に栄養を補給しなくても勝手に魔力でカバーできちまうんだと。原理については未だ説明されていないことなんだが本人がそう言ってんだから大丈夫だろ」

隣でエルがフリルちゃん豆知識を披露するが、そんなことはどうでもいい。いや、どうでも良くは無いが、そんなことよりシリル君の言葉に引っかけかりを覚えた。

「3日？私とエルが会ってから今日でちょうど4日目でしょ？エルと最初に会った場所からここまで多少のロスを含めても3日かかったんだよ？計算が合わない気がするんだけど」

エルがこの小屋を出て、私と出会った場所まで行き、そして戻ってくるのに3日かかったのだ。少なくとも5日は経っていないとおかしい。

私の疑問にああ、とエルはひとつ頷く。

「帰りは、お前の足に合わせたから3日もかかったが俺1人なら半日である場所まで行けるんだよ」

「……………へー」

もうそれしか言うことがない。(2回目)

私の理解の許容量が越える前に早々に話題を変えたほうが良さそう
だ。私は1度咳払いをしてから改めて双子に向き直る。

「それで、昨日の夜は何か食べたんだよね？」

昨日は自分で思っていたよりも疲れきっていたらしく、目が覚める
と朝だった。誰かが運んでくれたのか（多分エルだろうが）、私は
いつの間にかフリルちゃんのベッドの上にいたのだ。そして、慌て
て階下に行けばあの殺人兵器が待ち構えていたというわけ。

双子は私の問いに互いの顔を見合うと、元気よくうん！と頷いた
のでほっとした。…のもつかの間、

「兄上が猪を獲ってきてくださったんだ！こーーんなでつかいや
つだぜ！？」

シリル君は自慢気に腕を一杯伸ばしてその大きさを私に伝えよう
とするが、私はひくりと顔を引きつらせる。

「それを、兄さまがやいてくれたの」

にこにこフリルちゃんも心なしか頬を染めて得意気だ。それにく
らりと眩暈がしたが必死で持ち直す。

「…もしかして、それだけってことは無いよね？もつと、ほら野菜
とか野菜とか野菜とかも食べたんでしょ？3日も食べてないんだ
からもうちょっとお腹に優しいものとか…」

一縷の望みに賭けた私の必死の訴えは、

「…それだけだ（よ）」「」

3人兄弟の爽やかな笑顔によってあっけなく吹っ飛ばされていった。

22話

「おいしい？」

心配そうにオレの顔を覗き込みながら凧が聞く。オレは素直に認めるのが照れくさくて曖昧に頷くのがやっとだった。それでもそんなオレの様子に、満足気に良かったと笑みを見せる凧に少し態度が子どもっぽかったかと反省する。もしフリルのように素直においしいという一言が言えたなら凧はもつと喜んでくれただろうか。

「ちよつとそこに座りなさい」

どこか目が据わったように見える凧の迫力に圧されて、兄上までもが凧の言う通りに腰を下ろした。

傍から見ればそれはとても異様な光景に見えることだろう。凧の前にフリルとオレ、そして兄上がキレイに並んでセイザというものをさせられている。なんだつてこんな変な座り方をさせられなければならぬんだ、と文句を言えるような雰囲気ではないから、ただ黙って自分の足に全体重がかかるのを我慢するしかない。

変な座り方と言ったが、凧のセイザはとてもキレイだと思った。ピョンと伸びた背筋、膝にそつと乗せられた手、ついと引かれた顎。オレたちも同じ座り方をしているにも関わらず、凧とは何かが違うような気がする。どこが違うのだろうと凧とオレたちとの違いを考えていると徐に凧が口を開いた。

「まず、フリルちゃんが何も食べなくても大丈夫な点について詳しく聞きたいんだけど、いいかな？」

いきなり矛先が自分に来たことにフリルは少なからず動揺したよう

だった。ピクリと身体が反応するとおずおずと首を縦に振る。凜はそれを確認すると、わりかしゆっくりと言葉を紡ぐ。フリルを怯えさせないための配慮だろう。

「フリルちゃんは、本当にずっと何も食べなくても平気なの？」

「……うん。魔力でおぎなえるのは、ほんの少し。食べなくて死ぬことはないけど、成長はとまる、よ」

「……つまり、現状維持ってことか。フリルちゃんの身体に緊急事態例えば何も食べられない状況になった時に自動的に魔力が働くってことなのかな」

「うーん、と。たぶん？そう、だと思っ」

フリルの言葉に、凜は顎に手を置きながらふむふむと頷く。そんな凜を見てみると、普段の凜とはまるで違う。いつもはオレに突っかかってくるくらい子どもなのに、真面目な話をするときになるとガッツと態度が変わる。オレみたいに意識して作ったわけではなく、きつと凜は無意識にやってるんだと思うけど、そういう時の凜はどこか頼もしく感じるから不思議だ。オレたちのことを真剣に心配してくれているのが分かるからだろうか。

ちらりと横を見れば、見た目には無表情な、でもどこか嬉しそうな兄上がいる。こんな風にオレたちのことを心配してくれる人は今まで母上くらいだった。その母上も亡くなり、今は兄上に常に付き従っているイルだけがオレたちの味方だ。だからこそ、見返りを求めない凜の気持ちがあんなにも嬉しく、温かいと感じるのかもしれない。

「でも、やっぱり食べないと大きくなれないのは確かなんだね」

凜は、ふうとひとつ息をつく、オレたち一人ひとりの顔を見た。

「皆、よく聞いて。人間が生きるために必要なことって何だと思っ？」

凜の突然の問いにオレたちは顔を見合わせると、それぞれ自分が思うことを言っていく。

「信念」

「技術」

「ゆめ」

「……………」

我ながら自信のある答えだったにも関わらず、凜は頭が痛いと言うように米神に手を当てる。

「…あー、うん、そうだよ。エルの言うように信念は大事だよ。シリルくんのは、手に職って感じかな。フリルちゃんの夢も、まあ、分かる。うん、それぞれ大事だとは思っただけど、私が言ってるのはもっと根本的なこと」

「根本的？」

「そう。私はね、人間が生きるために必要な一番大事なことは、衣食住だと思っただ」

「衣食住、か。道理だな」

兄上が感心したように頷くと、凜はここで初めて柔らかい笑顔を浮かべた。

「私のお父さんに言われたことがあるんだ。どんな時でも衣食住をしつかりできる人は、とても強いつて。だから、私はお母さんが亡くなったときも、お父さんが亡くなったときも、辛くて苦しくてご飯なんか喉に入らないって思っても無理矢理押し込んだんだ。そしてたらさ、なんだ私ってどんな辛いことがあってもご飯食べて生きていけるんだなって分かったら、なんか安心したんだよ。…だからね、食べるってすごく大事なことなんだよ。一食ぐらい抜いたって大丈夫、なんて軽く考えちゃダメ。食べるってことはエネルギーを補給することだけじゃなくて、生きる気力を補給するってことでもあるんだから。特にシリル君とフリルちゃんは育ち盛りなんだから、しつかり食べて大きくならんくちや、ね？」

凜は、言葉の最後にいたずらっぽく小首を傾げた。そんな様子を見ているととても両親を亡くしたとは思えない。強がっているわけでもなさそうなのに、どうしてそんなに明るく振舞えるのか。オレは、母上が亡くなつた時、何もする気が起きなくてただボーっと日々を過ごしていたような気がする。

凜は、強い。

…なんか、悔しくなってきた。どうして凜にできることがオレにはできない？フリルのことだって凜がけし掛けてくれなかったら、きっと今でもオレは蹲ってるだけだった。子どもだから、なんて言い訳にならない。

強くなりたい。できないことがあつたって構わない。兄上のように力をつけるのは、まだ先でいい。でも、凜のように心を強くすることは今からだつてきつとできる。

「…凜！」

「ん？何？シリル君」

自分にできることをする。まずは、手始めに

「腹減つた！！」

凜が大きく目を見開いて、少し恥ずかしくなつたけど、そのすぐ後に見せた凜の笑顔を、オレは一生忘れないようにしようと思う。

「すぐに準備する！」

22話（後書き）

間宮家の家事分担はこんな感じ

蒼太 洗濯、ゴミ出し

浩樹 掃除、お財布（普段は蒼太も凜も質素だけど使うときは豪快なので間宮家のお財布担当は浩樹）

凜 料理、害虫駆除（言わずもがな 笑）

23話

残り物で作った割にはよい出来だと思う。

私は、目の前でおいしそうに料理をがつつく彼らを見て達成感に浸る。

3日も食べていないシリル君とフリルちゃん、ついでにイルさんとエルの分も用意した『凜ちゃん特製卵粥』だ。まずいわけは無いだろう、と思いつつも少し不安だったが、皆おいしいと言ってくれた。それにしても驚くべきはこの台所だ。まさにガスコンロや冷蔵庫なんて物が無いこの世界でどうやって料理を、と思つたが至る所にシリル君作成の魔具が大活躍していた。どうやら魔法には属性というものがあるらしく、例えば火を使いたいときは火の魔力が注ぎ込んである魔具を。物を凍らせたいと思つたら氷の魔力が注ぎ込んでいたり、壁に付いていたりして、ボタンを押すだけで発動するというように魔法が使えない人にも簡単に扱えるようにできていた。勿論、私も類に漏れず使い方を一通り教わつたらすぐ要領が分かつた。

そんな感じで日常で感じる魔法の存在にも驚いたがそれ以上に衝撃だった、いや感動だったのが米・味噌・醤油・塩・砂糖・日本酒・酢など日本食には欠かせない調味料&食材がまるっと揃っていたことだ！

この感動を分かってくれるだろうか…。もしかしたらこれからしばらくの間白いご飯、あつたか味噌汁を食べることができないかもしれない絶望！そしてそれが食べられると分かつたときの喜びが！！

「…兄さま」

「ん？なんだ？」

「お姉ちゃん、どうしたの？おたまもって、泣いてるよ。どこか痛いなの？」

「…気にするな。あいつは頭が少し、いやかなり弱いんだ」

「ふーん？」

背後でひそひそと交わされる会話にハッと我に返ると、不思議そうな視線と呆れ返った視線、馬鹿な子を見るような視線そして生温い視線が私に突き刺さっていた。

言わずもがなで順番にフリルちゃん、シリル君、エル、イルさんだ。一気に自分の顔に熱が集まるのを感じたが、無視である。こんなところで動揺してはれでいの名が泣くではないか。とりあえず、私は何も見なかった振りをしてようやくがちりと掴んでいたお玉を手放したのだった。

皆が絶賛してくれた朝食を終えると、イルさんがお茶を淹れてくれた。もちろん和食の後には緑茶である。ああ日本の文化って素晴らしい。

皆が一息ついた頃、ずっと気になっていて、でもタイミングが無く聞きそびれていたことを聞いてみることにした。

「あのさ、ずっと疑問だったんだけど…」

「何だ？」

「その…昨日イルさんが話してくれた漆黒の者の話なんだけど」
そろりとエルとイルさんの顔を窺うと、エルがくいつと顎をしゃくって続きを促す。イルさんも少し居住まいを正してくれたのでどうやら真剣に聞いてもらえるようだ。

「えっと、神話でエレンは、漆黒の者が現れた時、ふあ、ふあーりゆ？が滅びるって言ったんだよね？」

「……………ファルス、な」

「そつそう！それ」

むむむつこの世界の単語は発音が難しいのである。そろそろエルの呆れ顔にも耐性ができてしまったぞ。

ふあるすふあるすと口の中で2、3回もごもごと呟いてから、2人へと向き直る。

「漆黒の者が現れたらふあるすが滅びる。…それなら国が1つ滅びるっただけで世界全体が滅びることにはならないんじゃないのか、な？イルさんが世界を滅ぼす存在だって言っただけから何か引っかかっている感じがしてただけ、その、私変なこと言ってる？」私が疑問を話す途中からイルさんの目が見開き、エルはニヤリと口角を上げる。2人の反応にまた何か変なことを言っただかとオロオロしている、エルが私の頭をくしゃくしゃと撫でる。

「お前は無知だが、バカではねえな。何かに気付けるっことは長所だ。自信持て」

エルが一瞬ふわりと笑うのを見て急に緊張してきた自分に戸惑う。胸がぼわわしてなんだか落ち着かないけどエルが褒めてくれたことがすごく、嬉しい。緊張しているのがばれないようについ憎まれ口をたたきそうになるがそれをグツとこらえる。行き場の無い気持ちがつろつろと目を泳がせていると、イルさんが「良く気付きましたね」と穏やかに笑った。

「さて、その質問の答えをお教えするためにはまず、4大国の説明からしなければなりませんね」

「イル、なるべくこいつが理解しやすいように簡潔にな」

「分かっていますよ」

「アザレアには4大国、火の国ギスタ、水の国マーリナ、土の国オルガ、そして私達のいる風の国ファルスが主たる国家として栄えていることはお話ししましたね？」

「はい！イル先生」

まるで家庭教師でもしてもらっている気分になってしまったのでついイルさんを先生と呼んでしまったが、イルさんは嬉しそうに微笑みただけだった。ふむ、これからはイル先生と呼ばせてもらおう。

「はい、良い返事です。∴それぞれの国にはやはりそれぞれの特徴があります。火の国は希少で頑強な鉱石が取れることから軍事力に優れています。しかし、慢性的な水不足に悩まされている国でもありますね。水の国は海に面している国なので水産業が盛んです。海だけでなく、湖や川など多くの水に恵まれている土地です。火の国とは正反対の国ですが、水害による被害がとて多い国ですね。そして、土の国は水の国と隣り合わせになっているためかとにかく植物が良く育ちます。国全体が1つの森と言っても過言ではないほど緑に溢れています。まるで外界から隔離されたようなので文明的な発展が乏しいことが問題点でしょうか。最後に風の国ですが、ここがアザレアで最もバランスの取れた国であると言われています。フアルスは、火の国、水の国、土の国の3大国の中心にあり、それらの恩寵を受けているのです。アザレア1の交易国家と呼ばれています。昔から風の如く自由気ままに世界を旅する民族の多くがフアルスへと流れてきたこともその要因といわれています。さて、これがアザレアの世界地図になります。この1番大きな大陸に4大国があるのが分かりますか？」

イルさんが広げた地図を見てみると確かにとても大きい大陸だ。ふあるすは確かに3つの国に挟まれている。火の国は南、水の国は北、土の国は東でその中央にふあるすがあるのが分かる。大きさで見ると火の国が1番大きい。水の国と土の国を足したくらいはあるだろうか。火の国は確か軍事力が優れているのだけ。こんな大きな国に攻め込まれたらあつという間に負けちゃう気がする。ふあるすは2番目に大きい。交易国家というくらいだから様々なものを輸入してるんだろうな。だったら、火の国の武器とかも手に入ったりするのかな。だったら……

「ふあるすが火の国を牽制してる？」

私が捻り出した答えにイルさんは笑みを深くする。

「よく分かりましたね。あなたの言うとおりです。ファルスは、3大国全ての恩寵を受けています。そしてそれを3大国にうまく分配している。火の国に対しても然り。火の国に水を運んでいるのはファルスなんです。ファルスの働きがあるからこそ、世界は回っている。火の国は軍事力に長けているといっても実は魔法の技術はそんなに無いんです」

「え？そうなんですか？」

「ええ。アザレア1魔法に長けている国は土の国なんです。ファルスは土の国とも交流がありますから、その技術と火の国から輸入している鉱石から作られる武器を最大限に利用して無用な戦が起こることが無いように牽制しているんです。もしファルスが無くなってしまうえば、そのバランスが崩れてしまう」

「だから、漆黒の者が災い、なんですかね？」

「はい。良くできました」

なんとなく、イルさんにとっても小さな子ども扱いされているような気がしないでもないがここはスルーである。：最近スルースキルが上がっているような気がしてならない。

「でもじゃあ、火の国はふあるすが無くなった方が嬉しい？」

「さあ、どうでしょうね。確かに水を得るために水の国を攻めることは簡単になるかもしれませんが、それは火の国にとってもかなりのリスクがあります。なんとといってもアザレア1の大陸ですからね。火の国と水の国はとても遠い。国に攻め入るということはそれだけ兵糧が必要になります」

「あ！そっか。火の国は水を得る手段がふあるすしかなかったのにふあるすが無くなつたら…」

「水の国に辿り着く前に多くの犠牲を出すことになるでしょうね。辿り着いたとしても水が無い状況では長期的に戦うことはできない。火の国にとってもファルスが滅ぼされるのは望むところではありません」

せん」

「ふーん、あ、でも魔法とかでビューンと移動とかってできないんですか？」

「それは無理だ」

ただの思い付きだったか我ながら良い考えだと思ったのにエルにバツサリと切り捨てられる。それに多少ムツとしつつ理由を尋ねる。

「どうして？」

「そういう魔法が無いわけじゃない。が、さっきもイルが言ったがギスタは魔法に頼らない国だ。空間を転移できるほど上位の魔術師はほぼ皆無といって良いだろうな」

「もしできても、すごく魔力使うから、おおぜいのひとをはこぶのは、むずかしい、よ」

いつの間にか話しに加わっていた魔法専門家のフリルちゃんに言われてしまつては納得するしかない。

「因みにフリルはその移動魔法を使える数少ない1人なんですよ」魔法の知識がまるで無い私にはイル先生の言うそれがどれほど凄いことなのかよく分からなかったが、とにかくフリルちゃんはチヨー天才なんだろうなと推測して「フリルちゃんってすごいんだね！」と頭を撫でるとポワツとフリルちゃんの頬が赤く染まる。ああ、もうほんと、鼻血出そう。

「ま、利害が一致して今の状態なんだ。この力の均衡が崩れたら実質世界が滅びると同義だな。4大国なしで生きられる国なんてアザレアには存在しない」

フリルちゃんに癒されていた私はエルという言葉にハツとする。この世界が微妙な均衡の上に成り立っていることを初めて理解して、でもあまり実感は無い。戦争とは無縁の日本で生まれた私には仕方ないかもしれないが、それでももどかしく思った。

大体のことは理解したとエルとイル先生に礼を言うと「聞きたいことがあつたらなんでも聞け」というありがたい言葉を貰った。

「さて、それではこれからの我々の行動について話し合いましょう。漆黒の者が現れたことを宮廷魔術師に知れてしまった以上、行動は早い方がいいですからね」

イル先生がそう切り出すと私以外の全員が私を見る。まるで示し合わせたような皆の行動にへ？と間抜けな声を上げると、イルの強い視線に絡めとられるように動けなくなった。

「凜。お前に選択肢を与える前にここに連れてきた俺が言うべきことじゃないと思うが……」

何かを悔やむように言葉を切ったエルは、ふっと落とした視線を再び戻す。

なんだか、とても、嫌な予感がした。

「今すぐ選べ。俺達に付いて来るか、それとも……死ぬか」

24話

私は1度だけパチリと瞬いた。
そして、

「付いてく」

即答した。

当然だ。

私にはまだ死ぬ予定なんてこれっぽっちもない。
まだ始まったばかりの女子高生ライフをエンジョイしなければなら
ないし、女子大生にだって憧れがある。もしかしたら彼氏だつてで
きるかもしれない。そしたらおしゃれなキャンパスでうふふ、あは
はなことが待っているのだ。

仕事だつてするつもりだ。何といつても私の将来の夢はOLである。
おーえる。

おふいすれでいというやつである。女の子達だけのランチタイムと
いうのもやってみたい。きつと恋バナで盛り上がるのだろう。どこ
の課の誰々がカッコいい！なんて言いながら。凜は誰か好きな人い
ないの？なんて聞かれたら、うーんあんまり興味ないかも、なんて
言っておいて実は秘密の社内恋愛をしている、というのが理想であ
る！彼はもちろんいつも厳しく当たっているくせに実は私のことが
好きだった設定のツンデレ上司である。そして、海辺の砂浜でプロ
ポーズを受けるのだ。「結婚しよう」「ずっとそう言ってくれるの
を待ってたの」そこでBGMでザザンなんて波の音があったら最
高である。2人は手を取り合つて見つめあい、静かにちゅーをする
のだ。

そして、皆に祝福されながら結婚し、数年後にマイホームを建て、

犬を飼う。私は柴犬がいいがマイダーリンが何と言うかで要相談である。子どもは3人は欲しい。もちろん末っ子は女の子だ。そして休みになればキャンプに行き、バーベキューをしたり川で遊んだりする。

子どもが1人、また1人と大人になつて最後はのんびり2人で縁側でお茶を飲みながら生涯を終えるのだ。

完璧である。何て素晴らしい人生設計であろう。こんな素晴らしい人生が待っているのだ。死んでたまるか！である。

私めぐるめく将来の夢という名の妄想を繰り広げ、1人楽しんでいと今までに聞いたことがないほど深いため息が降ってきた。それにより現実世界に引き戻された私は、またやってしまったとばかりに恐る恐るエルを見る。

エルは、片手で額に手を当てものすっごく疲れたように俯いている。

ああ、どうしよう。きつとまた思考が駄々漏れだったに違いない。兄貴達によく言われたものだ。お前は考えることがすぐ顔に出るだの、考えてるときは口を閉じるだの（つまり考えてることをもろに口に出していたということ）、バカだの、アホだの……思い出してきたら腹立ってきたぞ。

つとダメだダメだ。今はエルのことなのである。私はブンブンと頭をふる。いい加減にしないと本当にエルに愛想をつかされてしまう。そうなつたら私はこの世界でどうすることもできないのだ。エルの言葉通りエルに付いて行くことができなかつたら、冗談抜きで私は死ぬのだ。

うつつ、そんなのは嫌だ。私は死ぬわけには行かない。なぜなら、なぜならっ私にはぱーふえくとな未来が待っているのだから！ってあああ、また思考がループしているではないか！私が今考えるべき

はそれではないだろう！

……っと自分に自分で突っ込んだところで、もの凄い音が聞こえた。びっくりして音のするほうを見ると……エルが信じられないほど爆笑していた。

お腹を手で押さえて、ゲラゲラ笑いながら床をゴロゴロと転がっている。

うっかり引いてしまった私を誰も責めることはできないだろう。他の皆も呆然としながらエルを凝視している。

せつかくのイケメンが台無しである。

「はっ腹が痛え！お前もうやめろ！いい加減にしねえと髪むしるぞ！！」

なんと！髪をむしられるなんて、何という拷問だ！恐ろしすぎる！！「ひいいい！！」
慌てて髪を押さえてエルから後ずさる。

「~~~~っただっから、っげほ……はあ、その変な動きをやめろっつてんだろーが！！」

「そっそそそんなこと言われてもわっ私はどっとうすれば!?!」
なんとというか私という人間を全否定されたような気分である。涙目になりつつ訴えると、エルは数回むせた後げんなりした様子で半眼になる。

「ああ、ああもついい。お前がそういうやつだったのは分かったんだ。……俺が我慢すりゃいいんだ、俺が」

自分に言い聞かせるようにぶつぶつと言うエルに私は結局どうしたらいいかわからず困惑するばかりである。

「あーつくそ。おい凜」

「はっはい！何でありますか!?!」

ついピシッと姿勢を正した私にエルはハアとため息を1つ吐いた。エルはとんだ苦労性らしい。一体何回ため息を吐くつもりなのだろうか。だからつい、

「ため息を吐くと幸せが逃げるんだよ。エルがいららないなら私が貰うけど」

という忠告をしつつちゃっかりエルの幸せを貰おうと息を吸う。

「スーッ、スーッ」

と、しつかり息を吸った後でしまったと思ったがもう遅い。

米神に青筋を立てたエルがギロリと私を見下ろしていた。

……正直言ってそこまで怒ることはないと思う。

「……俺の幸せなんざいくらだってお前にくれてやるから、俺の話
を聞け。い・い・な？」

「……はい」

私はこの時エルのことでも分かったことが3つある。

1・エルは意外と怒りっぽい

2・エルは苦労症

そして、

3・エルは太っ腹

ってことである。

「今すぐ決めろつつったことは取り消しだ。俺も言い方が悪かった
しな。お前なりに良く考えて決断しろ」

エルの言葉に真剣さを感じた私は素直に頷いた。

エルはそれを見るとふつと笑って、別に本気で死ねなんて言わねーよと私の頭をすりと撫でた。うぬ、それならそうと先に言ってもらいたかった。すっかり勘違いしてしまったではないか。

「イルが話したが、この世界で4大国のうち1国でも滅びるようなことがあれば力の均衡が崩れてあつという間に世界が消える。だが、今のファルスは神話や漆黒の者の話を抜きにしてもかなり危険な状況なんだ」

「えと？危険って？」

「半年前に国王が代替わりした。ファルスには前国王を慕う民が多かったからな、現在の国王に不満を持つやつらがどんどん増えていつてる。そのおかげで今やファルスは、国王派と反国王派とで二分しちまつてるんだよ。まあ、簡単に言えば仲間割れつてところか」エルはそこまで説明すると私をちらと見る。私がちゃんと理解しているか確かめたみたいだが、私はもちろん話の内容を理解するとか、全くそれどころじゃなかった。

おおおおおおお王様——————！！！！？？？

まさかのビックリ発言である！エルがあまりにもさらりと言うものだからつい流しそうになってしまった。

いや、でも神話には出てきていたな。てつきり昔々のおとぎ話の存在だと思っていた。女神がいるくらいなのだ、王様がいても不思議はないのかも。もといた世界にだっていないわけではないのだし……いや待て、王様がいるということはもしかして、もしかしてもしかして王子様がいるのではなかるうか！！！！

あの憧れの！王子様である。夢にまで見た王子様なのである！！今度こそエルを殺そうとしたりしないような王子様である！！！！

ああ、この世界はなんてふぁんたじーなのだ！王子様がいるなんて

素敵すぎる。ぜひ1度だけでもいいからお目にかかってみたいものである。

「ぼーっとまともや夢の世界へ旅立とうとしていた私を引き戻したのもまたエルだった。」

「……残念だが、現在の国王に子どもはいねえ」

撃沈である。その一言で私の夢は終わった。

「……先を進めるが、まあ、つまり俺たちもその反国王派側だったことだ。正確にはまだ属してはいないんだが、これから反国王派側の奴らと接触しようと思ってる」

「うん、それで？」

きよとんと首を傾げた私にエルはきれいな眉を寄せる。

「お前の世界には戦はなかったのか？」

「え？う、んとないことはなかったよ。私の国は昔戦争で多くのものを失ったから今は戦争はしちやいけないってことになってるけど、やっぱり他の国ではまだまだある、みたい」

「……そうか。なら少しは分かるな？戦つてものがどんなものか」

「……う、ん。こわいものっていうのは分かるよ」

「それだけ分かれば十分だ。……俺たちが今しようとしていることは、その戦だ。それでも俺たちに付いてくるか？俺は正直言って何の関係もないお前を巻き込みたくねえんだ。お前が望むなら宮廷魔術師なんかじゃ絶対見つけれられないような場所にお前を連れて行ってやる。安全は保障する。どうだ？」

《いくさ》っていうのが戦争のことだっていうのはわかる。でも、それを身近に感じたことなど1度もない。

どうしよう。自分がどうしたいのか分からなくなってきた。エルに

は付いていきたい。これはほんとう。でも、戦争は怖い。これもほんとう。じゃあ、どうしたらいい？私はいつかもとの世界に戻る。それなら何も知らない振りしていつか帰れるときまで安全な場所にいる？…ううん、ダメだ。何も知らないなんて嘘。もうすでに戦争が起こるかもしれないことを聞いてしまった。それにエルは参加するのだという。エルだけじゃない。きつとイルさんもシリル君もフリルちゃんも。彼らの目には覚悟がある。それなのに私は逃げるの？

…いつかは帰る。でもそのときまではエルの力になりたい。私のことを信じてくれたエルに、助けてくれたエルに何かを返したい。私が行くことでかえって足手まといになってしまうかもしれない。それでも私にできることをしたいのだ。

それならもう、私の答えは1つである。

「私は、エルに、皆に付いて行くよ」

私は真つ直ぐにエルを見つめた。エルは一瞬険しい顔をしてフウッとまたため息を吐いた。

「…お前が考えてるほど戦は簡単なものじゃねえぞ。分かってんのか？」

「うん」

「分かってねえ。本当に分かっているやつはそんな簡単に頷いたりできねえんだよ。お前は元の世界に帰りたいたいんだろーが。だったら大人しくしてる。それがお前のためだ」

「いやだ」

「いいから人の言うこと聞いてる！」

エルが急に大声を上げたことに私は少しびびる。くそう、もうそろそろ慣れてもよさそうなのに修行が足りないぞ。

エルは自分を落ち着けるためか少し間をおいてから、私の頭に手を

伸ばす。そうして1回くしゃりと撫でると困ったような顔をした。

「…お前が俺たちのことを心配してくれてんのは分かってる。ありがとな。だけどな、お前はこの件に関して本当に関係…」

「ないなんて言わないで!!」

ずるい。そんな風に優しくしないで欲しい。私なんか役立たずなんだと言われているみたいだ。現に役立たずなんだろうけど、それを優しい言葉で突きつけられるほど痛いものはないのだ。それだったらさつきみたいに怒鳴られた方がマシだった。

私は必死で泣きそうになるのを堪える。

「わつわたしは、確かに何にもできなくて、いたって何の足しにもならないかもしれないけどって言うかむしろマイナスになっちゃうのかもしれないけど、でも！それでも、せつかく仲良しになれた人たちが大変なことをしようとしているのを見ない振りなんてできないんだよ！わつわたしは、わたしはそおいう性格なんだよ！しつ仕方ないじゃん！放っとけないんだもん！こっこれで付いていけなくて私1人だけ安全なところにいる、いつか帰れたってきつとずつともやもやする！そんなの絶対いやだ！だっだから、わたしは絶対にエルに付いて行くんだから。へばりついてだっ行ってやるんだからね!!」

最悪である。これは完璧なる子どもの癩癪であり、ただの駄々だ。

しかも最後の方なんて完全に自己満足の領域に入っている。

私はあまりの居た堪れなさに、いまだに私の頭の上を占拠していたエルの手を振り払って部屋を飛び出したのだった。

凜は俺の手を振り払うとあっという間に部屋を飛び出していった。

また、やってしまった。

どうやら俺は凜を泣かすことに関しては変な才能があるらしい。泣かせたくないと思っていたはずなのに何故かいつも逆をいってしまったのは、俺が未熟なせいなのだろう。

凜を傷つけたくなって言ったことだ。それを後悔しているわけではないが、何故か胸に痛みが走る。

……矛盾してるな。

「追いかけてなくていいのですか？」

かけられた言葉に振り向くとどこか面白がっているようなイルの視線とぶち当たる。

「…お前楽しんでないか？」

投げやりに聞くとイルはさも可笑しそうに声を立てて笑う。

「ええ。楽しいですよ。エルヴィスがたった1人の少女に振り回されるのを見るのは」

その言葉にムツとする。

「別に振り回されちゃいねえだろーが」

「おや、そうですね。私の目にはそう映りましたけどね」

あくまでもニコニコと笑みを浮かべる顔に、まだ並々と緑茶が入ったカップを投げてやろうかと半ば本気で思う。実際に行動を移そうとカップに手をかけると、シリルが慌ててそれを止める。

「あっああ兄上！」

「…どうした？」

シリルは一瞬口ごもると意を決したように口を開く。

「あの…凜を連れて行ってあげてはもらえないのでしょうか」

シリルは言うか言うまいか迷っていたようだが、やはり言わずにはおれなかったらしい。

「それは…ダメだ」

「っどうしてですか！？凜はあんなにもオレたちに付いて来たがっているじゃないですか！」

「シリル。…俺たちは国王に狙われている。それを分かっているのか？お前は俺たちがあいつを巻き込んだせいであいつが傷つくのを見たいのか？」

「それは…っ」

シリルはグツと下唇を噛むとそれ以上何も言わなかった。

「全く、あなたのその頑固さは父上に似て厄介ですね。少しは母上の柔軟さを見習って欲しいところですが」

困ったように笑うイルを睨む。

「…冗談ではなく、私もお嬢さんを連れて行くのは賛成ですよ。エルヴィス」

「っそれは単にお前が凜を利用しようとしているだけだろーが！！」イルの言葉にカツとなる。イルの凶星を突いたはずなのにイルはピクリとも動揺せずにもしる開き直った。

「そうですね。私はあのお嬢さんを、いえ、漆黒の者を利用したい。彼女が我らの手元になれば国王とて無闇に手を出すことは出来ないでしょう。宮廷魔術師に伝わったということは王の耳にも入ったということですからね」

「凜はお前のことを信じてるんだぞ」

「ええ、ありがたいことに。ですが私にとって彼女の信頼など些細なことです。私は彼女とエルヴィスのどちらかを選べと言われたら迷うことなくあなたを選びます。あなたのためになるものならば最大限に利用するつもりですよ」

「ッチ！…凜は利用させない。あいつはこの世界の人間じゃねえんだ。無事にもとの世界に戻す。それまでは誰であろうが手を出すや

「つは許さねえ」

「…それを、彼女が望んでいなかったとしても？」

「……それでも、だ」

イルは少し落胆の表情を見せると最後に一言だけ呟いた。

「…あなたのお心のままに」

また、やってしまった。

私は木の幹にもたれかかるとがつくりと頂垂れる。何故いつもこうなってしまうのだろうか。エル言うことはもつともで私が首を突っ込む理由なんて、私がエル達のことを放っておけないっていうだけだ。エル達が私がいることで得るメリットなんて何一つ無いのだ。ついハーンとため息が漏れる。

エレンはどうして私なんかをこの世界に送ったんだろう。

この世界に来てから何度も自分に問いかけていることだ。もっとエレンの願いを叶えるのにふさわしい人がいたはずだ。黒髪黒目で無ければいけないのなら、それこそ蒼兄なんてお勧めだ。冷静で頭がいいし、ああ見えて運動だって得意だ。私は怒られてばかりだけど、蒼兄ならきつとエルの良い友達にだってなれただろうし…。

「ううあああゝゝ。卑屈だ！卑屈すぎるぞ、凜！こんなことでグルグル考えたってここにいるのは私なんだから、蒼兄がいたら…とか意味ないっつーの！」

ブンブンと頭を振って、弱気を追い出そうとする。

私は自分がどうしたいのか、もはや良く分からなくなっていた。エ

ルたちを助けたいと思っても、それは迷惑でしかないことは良く分かった。でも、自分だけ何も知らない振りをして元の世界に帰るのも気が引ける。

…そもそも私は、帰れるのだろうか。

一番重要なことに思い至って私は顔を青くした。今までなんとなく考えるのを避けていたけれど、これから先私にとってこの問題が最重要事項であることに違いは無い。

来ることができたんだから帰る方法だってきつとあるはず。…それでも思わなかったら心が折れそうだ。

この世界には魔法がある。きつと違う世界へ行く方法だってあるはずだ。

私は、今まで読んだ小説なんかの話の記憶を辿る。大抵のお話は、不思議な世界へ行つた後、何か大きな事件に巻き込まれて、紆余曲折しながらも旅の途中でできた仲間たちとの友情とか努力とかで乗り切つて、事件を解決して大団円。いつの間にか元の世界に戻つていたり、実はそれは夢だったり、元の世界には帰らずに、その世界で暮らしていく…とかいう感じだった。

夢だったらいい。それならこんなに悩んだりしないのに。

…でも、夢なわけは無いのだ。確かな現実として、私はここにいる。

「もし帰れなかったら、私どうなっちゃうのかな。…小説の主人公にはなれないタイプだと思ってたのになあ」

ふいにカタカタと身体が震え出す。私は、自分の身体を抱きこんでただその場でじつと丸くなっていることしかできなかった。

『ああ、ついに見つけた』

「え？」

急に聞こえた声と共に風が吹き、木の葉が舞い上がる。ぱつと顔を上げその異様な雰囲気息を呑む。初めてエレンと話したときのような安心感はどこにも無かった。

『私の元へ』

わけが分からぬうちに私の意識はそこでぶつつりと途切れた。

ねえ、聞いて！私があのお方の役に立つときが来たのよ！ああ！夢見たい。私、とても幸せだわ。

最近　　様が落ちこんでいらっしやるの。私に何かできることはないかしら。え？私まで落ち込んでるって？ふふ、困ったわね。あの方が悲しいと私まで悲しくなってしまうのよ。

なあに？嬉しそうですって？もちろんよ！　　様が私の髪が綺麗だつて褒めてくださったの！そんなことを言われたのは生まれて初めてよ。

どう、しよう。私、どうすればいいのかしら。全然気づかなかったのよ！　　様が人間と通じていたなんて！どうしよう、もし、このことが神々に知られたら　　様が殺されてしまうわ。！！何を言うの！？見捨てる、なんてそんなこと出来る訳ないわ！私様が守らなきゃ、本当にあの方は1人ぼっちになってしまっわ。

殺したわ。それしか方法がなかったの。私って馬鹿ね。あの方を1人にしないと言ったのに、あの方の命と引き換えには出来なかった。ごめんなさい。あなたにもたくさん心配かけたわね。ねえ、聞いて。それでも私は　　様が生きていてくれて嬉しいの。心から思っわ。私は　　様に仕えられて幸せだった。

彼女は最初から最後まで幸せだったと、心の底から微笑んだ。例え、その手が血に染まっても。

私は、彼女を血に染めた者を憎んだ。だが、それ以上に彼女のあの満面の笑みを引き出せたのもまた同じ者だと思ひ知る。

悔しさで震えた心を彼女は知っていただろうか。

するりと何かが頬を撫でる。なんだかそれが気持ち悪くて思わず身を擦ると、許さないとでも言うようにコロンと仰向けにされてしまふ。むむ、誰だ。私の安眠を妨害する奴は。と、そこまで考えてハッとして意識が覚醒する。

意識を失う前の異様な出来事を思い出したのだ。そして瞬時に理解する。ここは意識を失う前までいたエルたちの小屋ではない。

何で分かったのか、というところの寝心地の良さだ！この布団のふかふか加減は半端ない。小屋にあった寝台もそれなりに寝心地は良かったがこれの比ではない。ってことはだ。……ここは、どこだ！？っていうかこんなことを考えている間にも私の頬を撫でたり引つ張ったり、あまつさえたこ焼きなんぞを作っているコイツは誰だー！！

……どつどつしよう。このまま寝た振りを決め込んだほうがいいのか、それとも目を開けていつまでも（何がそんなに楽しいのか）私の頬を弄繰り回している誰かさんと相対した方がいいのか。……くう、な、悩む。

すると私の心情を察知したのか、相手から動いた。

「起きているのは分かっている。さっさと起きろ。殺すぞ」

「はい！もう起きました。なので殺さないでくださいー！」

ピツと手を挙げつつガバツと身を起こすと、若干目を見開いた全身真っ黒な人がいた。

「…………えーつと、黒いですね」

「……………」

「もう、ほらアレデスヨネ？あなたでいいですよ。いやいや、私なんかじゃ絶対務まらないと思ってたんですよ。遠慮は無用です。あなたに差し上げましょう。今なら出血大サービス！なんと無料で提供しましょう。」

今日からあなたが『漆黒の者』だ！！」

ビシッと1度はお母さんにやってはいけないと言われる「人に指差しちゃいけません！」を私は堂々と敢行した。

最初に異変に気づいたのはフリルだった。

「…………っ！」

今まで何も言わずに黙っていたフリルが、急に真っ青になって外へと走り出したのだ。

「フリル！どうした？」

慌てて追いかけると、フリルは走る足を止めずに追跡魔法を詠唱する。

詠唱を終え、神木まで来るとググツと眉間に皺を寄せる。フリルのこんな表情は珍しい。走ったことで乱れた息を整えるとフリルはゆっくりとこちらを振り向いた。

「…兄さま。今すぐにレジスタンス（反国王派）のきよてん（拠点）に行きましょう」

そう言っただけを真つ直ぐに見つめるフリルは、いきなり何年も年を重ねたように大人びて見えた。

「…どういうことだ？」

「感じませんか？このいやな感じのまりよく」

「……っ！！」

そう言われて初めて気づいた。神木を取り巻く微かに残る禍々しい魔力は、俺の記憶が正しければ宮廷魔術師ジュード・バックのものだ。

そして気づいた瞬間背中に冷や汗がつつた。

「凜！」

俺の手を振りほどいた凜は間違いなくここに来ていたはずだ。ギリツと奥歯を噛み締める俺にフリルの無情な声がかかる。

「わたしがたおれたから、結界がゆるくなっていた。その穴をつかれました。ついせきは失敗です。この場所もばれた。ここにいつまでもいるのは得策ではありません。…さらわれたお姉ちゃんをとりもどすことも、今のわたしたちでは、不可能です」

あくまでも冷静なフリルについに我慢できなくなったのか、シリルが噛み付く。

「何言ってるんだ！凜はお前を助けてくれたんだぞ！今度はオレ達が凜を助ける番じゃねーか！！」

その言葉にフリルの肩がピクリと動く。が、すぐに感情を消してシ

リルを見つめる。

「何をいつているの、はこっちのセリフ。シリル。何をかんちがいしているのか知らないけれど、わたしたちが守らなければいけないものはたった1人。エルヴィス兄さまだけよ。わたしの命がお姉ちゃんにすぐわれた。それは事実だけれど、それがなに？今はたいせいを立て直すとき。ささいなことに時間をさいているひまは、わたしたちにはないわ」

「お、お前！……っ」

あまりにも冷酷な言葉にシリルは言葉を詰まらせる。だがシリルも分かっているのだろう。

フリルが本心で言っているわけではないことを。フリルはとても優しい子だ。自分を助けてくれた人が攫われて平気でいられる訳が無い。

フリルは、病から目を覚ましてすぐにゆるくなった結界を強化した。そして気づかれないように凜にも防護魔法をかけていたのだ。凜に何かあってもすぐに分かるように。

それでも病み上がりだったことが致命的だった。力が安定していなくいまま魔法を行使すれば魔法は上手く働かない。

相手がフリルの状態さえも把握した上で「今」を狙ってきたのだとしたら……。

凜が攫われたことで一番悔しい思いをしているのは間違いなくフリルだ。本来ならすぐにでも助けに行きたいと思っているはず。それでもそれを口にしないのは、偏ひんに俺のためだ。

「……分かった。フリルの言う通りにすぐここを離れる」

俺の言葉にシリルは俯き、フリルが小さくホッと息を吐いた。

「それで体制を整えたらさっさと性悪魔術師から凜を取り返すぞ」

俺がそう続けると2人はパツと顔を上げ満面の笑みで返事をした。

「はい!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0623m/>

WINDBLAST

2011年9月28日16時41分発行